Fの軌跡

ひこうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆの軌跡

【Ｎコード】
Ｎ５５８６Ｚ

【作者名】
ひこうき

【あらすじ】
『モールド』と呼ばれる、人間に眠った潜在能力を最大限に引き出す液状薬品によって、旧世界から姿を大きく変えた近未来世界が舞台。
この革命的な薬品への『適合率』で、個人の能力に極端な差が生まれる残酷な上下社会の中、主人公『支倉恭司』は適合率０％という最大のコンプレックスを抱えながらも、それなりに楽しい学園生活を送っていた。
しかし現実は、友人の突然の失踪と、『一人の少女との出会い』を

きっかけに容易く終わりを迎える。

主人公

覚醒タイプのバトル物です。

１／１、小説家になろう　勝手にランキングで、総合1位になりました！皆さんありがとうございます！

次回更新日が決まりました。次回更新は１／９です。

プロローグ　（注：初回2話分掲載）（前書き）

バトル物です。最初で色々誤解されるかもしれませんが、主人公覚醒のバトル物です。

当時の自分が主人公の心情変化の描写に最も力を入れていたこともあって、主人公の変化描写を読者の方々に一番良い形で提供するには、（読んで頂ければ分かりますが）プロローグにはこのエピソードを持ってくる他無く、初っ端から主立った会話が『野郎だけ』によるものという、トンデモな事態になっております。

大丈夫です。普通プロローグでは『主人公ヒロインの運命的な出会い』がセオリーになりかけているのも分かっております。

会話がやたらと青臭いのも分かっております。

ヒロインはプロローグのすぐ後に登場します。この次のエピソードもご覧頂ければ幸いと存じます。

更新の件についてですが、既に原稿が8割方完成した状態で手元にあるので、しばらくは毎日更新という形で提供させて頂きたいと思います。毎朝4時頃、遅くとも5時頃の更新を予定しております。

最後までお付き合い頂けたら幸いです。

PS．感想とか評価とか、一言でも頂けるとメチャクチャ喜びます。

プロローグ　（注：初回2話分掲載）

―第一章―

1

物事に、絶対なんてものは存在しないだろう。しかし、この世界の唯一にして絶対の事実。

――――支倉恭司は、世界に見放された人間である。

季節は春。

厳しい冬を越え、世間一般では、夢と希望に満ち溢れているらしい、春。

桜の花びらが舞い散る快晴な午後の校庭で、新たなクラスメイトと共に体力測定に参加していた俺、支倉恭司は、深い、深いため息をついた。

耳を澄まさずとも、聞こえてくるのは他生徒の歓声。記録が伸びたやなんやだの。

校庭では、新入生を含めた全校生徒８００人ほどが、様々な競技に熱心に打ち込んでいる。

俺は、毎年訪れるこの季節が嫌いだった。

新たな出会いへの希望なんかより、現実を突きつけられる絶望の方が、遥に大きかったからだ。

人だかりから離れた俺は歓声を気にすることなく、地面に胡座をかき、手元の測定結果に目を通す。そして自身の記録を見ては、さら

に深いため息をついた。
このため息は、落ち込みからくるものではない。
足掻いても足掻いても変わらない、残酷な現実に対する『諦め』から来るものだった。

自分が、世界に見放された人間であるという。

俺の測定結果は、依然として世界の除け者に相応しいものだった。
それは凄惨たるものだった。
一人で地面に座ったまま遠くを見つめていると、不意に後ろから誰かに背中をこづかれる。
「よっ、新学期早々、何落ち込んでるんだ？」
からかうような笑みを浮かべて話かけてきたのは、高一からの仲である小西哲平だった。
能力が低い俺を同類だと思ったのか、知り合った当初から何かと絡んでくる。今回高二に進級した際も同じクラスになってしまったのだ。
俺は口を尖らせて言い返す。
「別に落ち込んでなんかねーよ」
「まあまあそう言うなって。どれ、結果見せてみろよ」
哲平はひょいっと俺の手から測定用紙を取り上げた。
「ふむふむ、１００Ｍ走、１１秒５８。ハンドボール投げ、３０Ｍ。立ち幅跳び３Ｍ５０。前回より上がったじゃないか」
なめ回すように眺めた哲平はしかし、引きつった笑顔で俺に用紙を返す。俺はそんな友人を睨み付けながら、乱暴に用紙を奪い返した。
「それはそうだけど。じゃあお前の結果は？」
気まずそうに頬を掻きながら、哲平は用紙に視線を落とす。
「えーっと。１００Ｍ走、７秒３４。ハンドボール投げ、２１０Ｍ。立ち幅跳び７Ｍ５０、だな」
「そらみろ」

そらみろそらみろそらみろ。運動音痴の哲平にさえ勝てないじゃないか。

俺の落ちこぼれ具合は、異常なのだ。

スポーツテストが全国最下位なのは当たり前。腕相撲では女子に負け、ハンドボール投げにいたっては小学生にまで負ける始末。学習面で言えば、普通に授業についていけない。それも全国の中学生に完敗するレベル。留年しないのが奇跡と言ってもいい、といった具合なのだ。

これで、世界に見放された人間ということが納得できるだろう。

では、一体どうしてここまで落ちこぼれることになったのか。

その原因は分かり切っており、今更考えるまでも無かった。

「『モールド』さえなけりゃな～」

そう俺は呟く。

モールド。

世界中の８９億４０００万人の方々にとっては地球上で最も有益な薬であり、俺にとってはまさに地獄の創設者のような存在である液状薬品の一般名称だ。このモールドと呼ばれる薬の効果は、今では俺を除いた全世界の人間が、その身を持って堪能している。

モールドの効果。

それは服用した人間の潜在能力を最大限まで引き出し、知力、体力、五感などのありとあらゆる能力を底上げするというもの。効果は半永久的、摂取後は死ぬまで体内に残留し続ける。そんな魅力溢れる効果に対して、副作用は一切無し。年齢制限などの条件も皆無で、その上摂取の際は、国の医療保証で料金がタダと来た。

おかげで誰もが容易く超人になろうと、開発当初から凄まじい人数が摂取を初めて、１０年前に全世界の人が摂取し終える結果となっ

た。
しかし俺を苦しめている問題は、このモールド自体には無い。
人類がこの薬一つで進化したことは喜ぶべきことだし、俺もこのモールドを摂取しているのだから文句を言えた身ではない。
俺が苦しむ問題。
それは、この薬の影響度合いが人によって違うということなのだ。
つまり同じ超人になれる薬を服用しても、モールドとの相性で、人によって能力に差が生まれてしまうのだ。
このモールドとの相性は、『適合率』と呼ばれている。
この適合率が高くなるにつれて、個人の能力が大きく跳ね上がると考えて貰って構わない。
３０～４０％が一般的で、５０％を超えるエリートは滅多にいない。
そしてその逆もまた然りで、２０％から３０％がいわゆる、『落ちこぼれ』と呼ばれる人達だ。
うんうん、と俺の意見に賛同した哲平は、何度か頷いた後に俺を指さす。

「適合率０％の人」

「うっさい！！」
「イテッ！！」
もっとも気にかけていることを指摘された俺は、哲平の頭に本気のゲンコツを食らわせる。適合率が２０％以上も離れてると、本気の拳ですら軽い小突きとしか思われないのだから、一層悲しくなる。
そう、俺は世界の人口８９億４０００万人の中で、唯一のモールド適合率、０％の男だったのだ。それは統計データからの紛れのない事実。
本当に、世界中で俺だけなのである。
１％でも０．１％でもない、純粋に０が一個。どうだ世界でたった一人だけダゼ！すごいだろわははと自慢できることでは無い。問題

である。大問題である。
このモールドという液状薬品の力は、本当に絶大なのだ。
この薬品の登場が、世界を変えたといっても過言ではない。
経済は大いに安定し、技術レベルはわずか十数年で過去１００年分に相当するほど向上した。
大まかな環境問題も、全て科学の力で解決された。
医療レベルも、１５年前と比べれば遥に向上し、今時１００歳なんて珍しくない。
ふと空を見上げれば、家庭用小型飛行船が飛び回っている。フロートシステムという技術が注目されてから暫くしたこの現代社会で、車という代物を使っている人は、今となってはほとんどいない。
人類の能力が底上げされた結果は、ありとあらゆる所で顕著に表れている。
当然教育面でも、この薬品の影響は大いに現れている。
５年前を機に、考査やテストといったものが世界中で一斉に廃止された。例えそれらを行ったとしても、順位が適合率の高い順になってしまうから。意味がないのだ。
学校、資格、会社などなど、ありとあらゆる面接も含めた試験も当然廃止。合格要点が、『アナタの適合率は？』一つだから。
今、俺や他のクラスメイトが行っている体力測定も、モールド適合率と身体能力の統計を採るため、仕方なくやっているものなのだ。
そんなワケで、薬の影響を一切受けられない俺が落ちこぼれているのは、当たり前なのである。
この薬の力無しで落ちこぼれから脱出しようとするのは、三輪車でＦ１レースの優勝を狙うようなものなのだ。
努力なんてものは無価値に等しく、適合率という生まれつきの才能だけで人の価値が決まってしまうこの現代社会に嫌気がさし、俺は再びため息をついた。
「ホントなんでお前、適合率が０％なワケ？どんなに低くても全員２０％超えてんのにさ」

ホレホレ、と哲平が指をさす。
そう言うお前も学年最低レベルだけどな、と思いつつも哲平が指さす方向を向くと、新入生の女子達がハンドボール投げをしていた。
「ホラ、今投げたコ。今年最低適合率の２１％だぜ。確か名前は、宮谷茜、だっけな。今年入ってきた女子の中じゃ相当なアタリらしいぜ」
哲平の指さす少女は、随分と華奢な体付きをしていた。
遠くで良く見えなかったが、長い黒髪は一本にまとめてあり、いかにもなお嬢様の雰囲気を漂わせている。
周りでは他学年の男子が集まり、その少女を囲むようにして立って騒いでいた。どうやら『宮谷茜』という少女は、男子から結構な支持を受けているようで。モテ具合だけは適合率関係無いのだろうか、などと俺が思考を巡らせていると。
女の子の投げたボールは、大きな放物線を描き、地面に落下した。
「おっ、１８０Ｍか。お前何Ｍだっけ？」
「・・・・・３０Ｍ」
「君の６倍だね、恭司君」
「そうだね、哲平君」
「華奢なお嬢様に力で負けた感想をどうぞ」
「もう死にたい・・・・・・」
華奢でか弱な後輩の女子に、力で負ける高校二年児の気持ちを考えてご覧なさい。自殺もしたくなるから。
しかし俺はこんなことはもう慣れっこだ。残酷な現実を突きつけられたところで、自殺などしない。
哲平もこの理不尽な世界に対して不満を抱いているのか、俺の隣で愚痴を溢す。
「２４％の低適合者だから言える事だけど、ほんっとこの世界って、不公平だよな！」
「まあな」
進路も就職も富も名声も、何もかもが適合率という数値一つで決ま

ってしまう。単純明快、理不尽極まりないこの社会は本当に嫌いだ。

モールドと同時期に生まれてきた俺たちの世代はまだいい。
問題は、ちょうど職を得て、幸せな家庭を持つような世代の人だ。
この超人的な力を引き出す液状薬品によって、一体何人の人が幸福な人生を奪われたことか。
例えば、必死に努力して努力して、ようやく名声を手に入れられた人がいるとしよう。
また、仕事もせず町中をブラブラしているような遊び人がいるとして。
モールドは、必死に努力した前者の人が、後者の人の前に這いつくばらなくてはならないような状況を、いとも容易く創り上げてしまったのだ。
血の滲むような思いで手に入れた名声を、次の日起きたらどこの誰かも分からない遊び人に奪われて、ペコペコと頭を下げるような生活。
モールドは確かに人類に成功をもたらした。しかし、その成功と同じ数だけの不幸が人々に訪れたことも事実だ。
本当に辛いのは、その不幸になった人々が大方努力家だということだ。
彼らはもう一度名声を手に入れようと、必死に努力して努力して、それでもダメで、尚更足掻こうとする。しかし結局は、適合率という才能の壁が立ちはだかり、落ちこぼれる。
生きているのが嫌になる。
そんな人々が次々と自殺をしていくのを知るのは、本当に辛い。
だから、俺はそうならないために、自分が超低適合者であることを受け入れたのだ。
受け入れてしまえば、足掻くことを『諦め』てしまえばどうってことはない。別に職が無くなるわけでもない。現に今は力が必要ない単純作業の工場でアルバイトをしている。

上を目指さず、低適合者は低適合者のままで、そのレベルにある幸せを求めればいい。
それだけの話なのだ。
そうぼんやり考え事をしていると、いつの間にか立ち上がっていた哲平に呼ばれる。
「おい、恭司。あれ」
「ん？何？」
俺もその場から立ち上がり、哲平の指差す人だかりを見てみる。
誰かが揉め事をしているようだが、遠すぎて俺には良く見えない。
揉めている２人の周りには、２０人くらいの野次馬ができている。
「荒瀬だ。アイツ、また大杉にちょっかい出してやがる」
やはり２４％と０％の差だろうか。
３００Ｍはあろうこの遠距離から、哲平は個人の顔までしっかりと捉えているようだ。視力も大分違う。

荒瀬。

確かこの学校でも大分有名な金髪チャラチャラ不良だ。
適合率が４７％であることを自信にしてか、親が相当のお偉いさんだからか、度々教師にも刃向かっている。イライラしている時は、自分より適合率の低いヤツを相手に、気が済むまで殴り続けるというのを耳にしたことがある。残念ながら親の影響で退学にはならないそうで。
俺はまだ絡まれたことはないが。大杉というヤツは、荒瀬の怒りをかったか、それとも運が悪かったか。
いずれにせよ、この状況での俺の行動は決まっている。
「まあ、ああいうヤツは放っとくのが一番だって。何でイライラしてるのか分からないけど、関わると俺らまでとばっちりくらうぞ」
低適合者だから、と付け足す。しかし、俺の言葉に哲平の返事はない。

その様子が気になった俺は隣の哲平の顔を一瞥する。
今までのヘラヘラとした表情から、怒りに燃えるような表情へと変わっていた。拳を握りしめ、食いしばられた歯がギリギリと音を立てている。
「お、おい哲平落ち付けって。別に他人のことだろ?気にすんなよ」
俺の言葉を無視し、哲平は突如荒瀬に向かって駆け出そうとした。
とっさに俺は哲平の左腕を掴む。動きを止められた哲平が、怒りと驚きの眼差しを俺に向ける。
「!?何だよ、恭司!離せよ!」
「いいから!俺の話を聞けって!ああいうヤツに関わると、結局最後までカモに・・・・・・」
「この状況を放っておけるか!」
そう強く言い放った哲平は、俺の手をふりほどくと、駆け出した。
「お、おい!待てよ!」
俺も慌てて追いかける。しかし、適合率の差だろうか。
哲平との距離は確実に引き離され、視界の先の哲平が少しずつ小さくなっていく。
そして。
「うぉりぃやあああああ!!!」
俺の視界の先で、振られた哲平の拳が、荒瀬の顔面を直撃した。油断していたのか、荒瀬は大きく仰け反り、地面に激しく尻餅をついた。周りで見ていた野次馬が突然の事態に騒ぎ始める。
「やっべー!アイツ本当にやりやがった!」
俺はそう叫びながら、ダッシュで哲平の元まで駆けつけた。視界の右端にいる哲平に比べて、俺の息は随分と上がっている。
哲平の左隣りで尻をついているヤツがいた。
大杉というデブっちょいヤツだ。随分と殴られたのか、顔が大きく腫れ、手足の所々から血が滲んでいる。随分酷くやられたものだ。
そう呑気に状況を観察していると、哲平の先にいる荒瀬がゆっくりと起き上がった。

体格はがっしりとしているが、大分痩せている。そしてやたらと高身長だった。１７０?前後の哲平と俺からすると、１８５?位はあるだろうか。

哲平に殴られたところが赤く腫れており、荒瀬は口からペッと血混じりの唾を吐く。そしてがっしりとした腕で、乱暴に哲平の体操服の襟元を掴み上げた。その迫力に、俺は思わず後ずさる。

「いてーじゃねぇか、この野郎」

ドスの効いた声で、哲平を威嚇する。哲平の襟元を掴んでいた荒瀬の拳に力が入り、それに気圧されたのか、恐怖を振り払うように哲平は叫びながら荒瀬に殴りかかった。

しかし。

哲平の拳が荒瀬に当たることは無かった。

適合率が２０%以上離れているのが痛かったようだ。恐らく、荒瀬には哲平の拳が大層ゆっくりに感じられたことだろう。

哲平が地面にねじ伏せられた後は、まさに一方的な暴力だった。哲平をサンドバックとでも思っているのか、と考えてしまうくらい、容赦ない暴力だった。

荒瀬は笑っていた。

さすがに周りのギャラリーも恐ろしくなったのか、その暴君を止める者は一人も出ないまま、視界から去って行った。

どうせ俺が助けに入っても、とばっちりをくらうだけだ。

そう思った俺は、多少の罪悪感を意識しつつも、せめて哲平の行動を無駄にしないため、地面に座り込んだまま泣きそうになっている大杉という男子に肩を貸して、その場を去った。

2

その後、俺から状況を知った教師が駆けつけて、事態は収束した。

荒瀬の両親は、学校とも繋がりが深い組織のお偉いさんで、職を失うのが怖かったのか、教師は荒瀬に対して軽い注意しかしなかった。

哲平の怪我は大杉というヤツよりもずっと酷く、体力測定後の午後の授業には参加せず、保健室で安息をとっていた。俺が保健室を寄った際、哲平は意外にも元気だった。顔にはいくつかのガーゼが張ってあり、笑う度に変に歪んだ。その様子を見て、俺も思わず笑った。

そして現在、放課後。

俺と哲平は、公共の飛行船に乗っての帰宅途中だった。

飛行船といっても、１０年前まで使われていた、ガスを入れて浮遊する飛行船ではない。空中で静止ができる飛行機とでも言ったらいいか。

俺と哲平は、飛行船内の窓側に座り、黙りこくっていた。

普通ならば、登下校の時間帯は混雑しそうなものだが、船内は閑散としており、俺と哲平を含めても数名しかいなかった。

窓の外は個人飛行船が忙しく行き来しており、沈みかけの夕日と相まって、都会らしい風景を映し出していた。

沈黙が続く中、俺の前に座っていた哲平が口を開く。

「サンキューな。大杉逃がしてくれて」

「何改まってるんだよ」

感謝される理由はない。むしろ俺が謝るべきなのだ。

哲平を助けに入らなかったことを。

俺が言葉をつまらせていると、哲平が俺の心境を察したように言った。

「別に気にスンナ。第一俺が勝手に起こした行動だし、お前は止めるよう忠告してたろ」

「まあな。飛び込んだお前が悪い」

「くっ、コイツ開き直りやがって！」

「教師を呼んだことも感謝してほしいな」

「孤独な生涯を送っていくお前の姿が浮かんだよ」

軽い談笑の最中、俺は哲平に一つの疑問を感じた。

当然といえば当然の疑問であるが。

「なぁ、哲平」
「何？」
「お前、何であんなことした？」
あんなこと、とはもちろん、今日の荒瀬の件だ。
哲平が上を向く。
「恭司よ、俺が人助けしちゃダメなのか？」
「いや、そんなことは言ってない。ただ、とばっちりくらって負けるの知ってて、何で助けに入ったかなって」
哲平は少し唸った後、開き直ったように言う。
「何でだろ？」
「おい」
ハハハ、と軽笑の後に、哲平は明るい調子で言う。
「いやな、なんかああやって楽して得た力を振りかざしてるヤツ見てると、俺のオヤジやお袋を否定されたみたいでな。ついカッとなっちゃったんだよ」
しまった、と。哲平の話を聞いた後に、俺は激しく後悔した。
「わりぃ」
「気にスンナって」
バカだった。何で忘れていたんだろう、と自分を責める。
哲平の両親は、８年前に自殺をしていたのだった。
哲平が小さかった頃に、両親二人で経営していた会社が倒産。当然例の薬の影響だ。それから数年後に投身自殺。
哲平は明るい調子で続けた。
「だからさー、俺の親ってあれじゃん？割と努力家だったのよ。会社が潰れた後も、借金抱えても、元ライバル会社の平社員やりながら金貯めて、もう一度会社再建するんだって。無駄に一生懸命になってさー」
哲平の言葉に、俺は黙って耳を傾ける。
「結局才能の壁を越えられなくて、その会社すらクビになってさ。で、橋の下でおだぶつよ」

哲平が前から頭をのめりだして、笑顔で聞いてきた。
「俺の親、バカみたいだろ？」
「そんなことねーよ」
俺は一応、否定する。
「うそつけ。怒んねーから、本当のこと言ってみろよ」
「・・・・・まあな。バカみたいだ」
「ん」
「お前の両親、バカだよ」
哲平は笑顔のままだ。
俺は哲平から視線を逸らすと、窓の外を眺めながら吐き出すように言う。
「だって、勝てもしないものに抗おうとするなんてバカじゃないか。それで、一番大切な命捨てて、息子に借金残して、ホント何がしたかったのか分かんないな。まあ、生き方なんて人それぞれだから、否定はしないけど。けどな、俺に言わせればバカだね。大バカだ」
お前らしいな、と哲平は笑顔を見せた後、前向きに座り直す。
「俺も、オヤジとお袋はバカだったと思うよ。けど、間違っていたとは思えない。だって、この世に絶対なんてものは存在しないじゃないか。そりゃ、この薬の壁を超えられる可能性なんてほぼ０に等しいけど、それでも抗い続けた俺の両親はスゲェと思うよ」
「借金背負わされて、辛いバイトの毎日を送っていてもか？」
哲平は、迷いのない声色で返してくる。
「ああ。俺のオヤジとお袋は、尊敬に値するってな。だから、俺も『諦め』ない。荒瀬にだって、いつかはケンカで勝ってやろうと思ってるし、適合率なんて関係ないね」
俺は少し考え込む。そして浮かんだ疑問を哲平に投げかける。
「お前、大杉を助けようとしたのは初めてか？」
「んにゃ？何でそんなこと聞くんだ？」
「いや、お前のバカ具合を測定するため」
「助けに入った数なんて、もう数え切れないな」

高一の頃から、時々キズを作って帰ってきたのはそのためだったか、と納得する。
と同時に呆れつつも、笑みをこぼす。
「お前は大バカだよ。いや、大バカ超えて超大バカだ」
「おう。最高の誉め言葉だ」
しばらくお互いに苦笑していたが、ため息で一区切り付けて、俺から切り出す。
「まーでも、俺はお前みたいにはなれないな。能力が低いからって、自分から無茶なことに挑戦しようとは思わない。抗う辛さは知らなくても、負けることは、その行動が無意味なのは知っているからな」
それでいいだろ、と哲平は優しげに呟く。
「俺とお前は正反対の人間なんだよ、恭司。俺は、抗うことの辛さを知っていても抗う。お前は、抗うことの辛さを知らないが抗わない。俺はバカでお前は利口だ。俺の方が高適合者だけどな」
うっせ、と俺は投げやりに返す。
自分で言うのも何だが、俺自身、俺は低適合者の中でもかなり利口な方だと思う。
過去に栄光を手にしていた大人と同じで、低適合者の現代学生は、足掻けば何とかなると思い上がりやすい。
過去に一度成功しているから、その時以上に努力すればなんとかなる。
そういう思考で足掻く大人に対して、考査などの他者と競う場を無くした俺達には、本格的な敗北と失敗を喫するような機会があまり無い。
だから、無駄だともしらずに才能の壁に挑戦する。
そして、足掻いて足掻いて足掻いては、不変の現実を思い知らされる。
結局最後は『諦める』。哲平の両親のような大人になるのを未然に防いでいる点では、彼らには有益な挑戦かもしれないが。

だけど、俺は違う。

その挑戦が自身にとって無益であることを理解している。なぜなら俺は常に正しく現実を知り、それを受け入れているから。

哲平の両親のような大人にはなり得ない、なれないから。

これからの時代では必要ないと判断された上で廃止された、考査やテストがいい証拠だ。こういうものが、努力が無価値だという現実を俺に正確に教えてくれる。

だから、挑戦しない、抗わない、失敗しない。

過去も今もこれからも。

勝ち目が無く成功率が低いと断定できた物事には挑戦せず、もっとも確実で安定した道を選ぶ。これほど利口な低適合者が他にいるだろうか。

その点、俺に言わせれば哲平はバカの極みだ。

コイツは他の低適合者と違って、挑戦の無意味さを知っている。抗うことの辛さを理解している。結局は無駄骨に終わることを確信している。

なのに、挑戦する。抗う。失敗する。そして何度も挑戦する。

荒瀬の件がいい例だ。負けても負けても何度も挑戦する。

本当に哲平は、バカだ。

俺がそんなことを考えていると、哲平が再び身を乗り出してきた。

「なぁ、恭司。俺前から気になってんだけどよ」

少し躊躇うような素振りを挟んでから、哲平は俺に聞いてくる。

「お前、何でそんな『諦め』グセがついたんだ？」

俺は少しだけ、頭を揺さぶられた気分だった。一度軽いため息をついてから、自分の目頭を摘む。

「わりぃ、聞いちゃいけないことだったか？」

哲平が苦笑いで聞いてくる。俺が泣くほど悲惨な境遇でも歩んでき

たと思っているのだろうか、コイツは。強ち間違いでも無かったが。
「孤児だったんだよ、俺」
「・・・・・・は？」
哲平が目を丸くする。
「政府の育児施設に引き取られる、えーと・・・・・・7歳までだったかな。それまでは、路上での生活だよ。物心ついた頃には、途上国の路地にいたんだ。まあ、生き残る為には、色々妥協しなきゃいけないことがあってな。親がいなかったから、俺自身で出した結論。生き残るには『諦め』が肝心。大人の連中相手に食料奪おうとしても、どうせ力で負けて、無駄なエネルギー使うだけだし。黙って食料を恵んでもらうのを待つか、動けるだけ元気だったら自分で探すか。『諦め』ぐせがついたのは、そのせいかな」
哲平はまだ目を丸くしている。数秒フリーズした後、慌てた様子で再起動。
「ばっ、お前何でそんな重要なこと言わなかったんだよ」
「進んで言う話題でも無いだろ？周りに変に気味悪がられるのも嫌だったしな」
数回の瞬きの後、はっー、と哲平がため息。
「お前がそんな壮絶な人生を送っていたなんてなー」
哲平に遠い目で見られる。気持ち悪い。
「なんだよ」
「いや、恭司君に対する感情が１８０度変わったな、と」
「気持ち悪いこと言うな、俺にそんな趣味は無い」
「ちげーよ。同情してるだけだよ」
「してもらわなくて結構」
ん？と哲平が首を傾げる。
「さっきお前、物心ついた時には途上国にいたって言ってたよな。じゃあ何でお前日本にいんの？」
「別に。俺を引き取ってくれた施設が日本にあったんだよ。施設の人が偶然途上国に来ていて、路上で倒れている俺を含めた子供達を

引き取ってくれたってワケ。支倉は施設長の名字だし、恭司だって施設のお姉さんにつけられた。顔立ちはアジア系だけど、俺は何処の国出身か未だに分からないしな」

いつの間にか、船内は俺と哲平だけになっていた。夕日も大分沈み、空は少しずつ闇に飲まれていく。深い沈黙の中、飛行船の駆動音だけが聞こえていた。

俺の話を聞いた哲平は、そっか、と軽く呟くと、完全に沈黙した。

俺の前席に座り直し、こちらからはその表情を伺えない。

両者の間を沈黙が包む。

その耐え難い雰囲気に、俺は思わず席を立った。哲平がどうした、と尋ねてくる。

「いや、今日バイトのシフト入れてるの忘れててな。先に寮に戻っといてくれ」

嘘だった。その場の空気に耐えきれずのとっさの小嘘。

高校に入った際、俺は育児施設を出た。

規定では、１８歳までは施設に残っていてもいいことになっていたが、俺の同期は既に全員施設を出ていたので、俺一人が施設で温々お世話になるのは我慢ならなかったからだ。

現在住むべき家が無い俺と哲平は、学校の持つ学生寮に住んでいる。入寮者の多くは、実家が遠いとの理由だが、１０年前に比べ交通手段が著しく発達した現在では、よほど遠くからの生徒でない限り、寮というものは利用しない。つまり、寮を利用している人はもの凄く少ない。

「バイトって、ああ、あの安時給の工場か」

哲平は手を叩くと、思い出したように言った。俺は若干バカにされているようで、投げやりに応答する。

「悪かったな、才能がない俺には、能力が関係ないあのバイトが合ってるんだよ」

俺も哲平も、国からの生活補助金は貰っている。ただ、欲望旺盛な高校生にはその金額は少々頼りないのだ。俺は箱詰め工場で、哲平

は引っ越し業者。二人とも週の大半はバイトで埋め尽くされている。
俺の言葉に対し、少し考えるような素振りを見せた後、哲平は笑顔で答える。
「ん。分かった。じゃあな」
「おう」

普段通りの、何気ない会話。

特に意味のない、ただの挨拶。

それが、俺が聞いた哲平の最後の言葉であり、俺の非日常の始まりを告げるものだった。

プロローグ　（注：初回2話分掲載）（後書き）

いかがでしたでしょうか。物語は、この次のエピソードでの『少女との出会い』をきっかけに動き始めます。

非現実（前書き）

ここからヒロインが登場します（といってもプロローグでこっそり登場しておりますが）。物語もようやく動きだします。
宜しくお願いします。

非現実

3

哲平は、その日から行方不明になった。
哲平が失踪した日。帰るに帰れず、街で彷徨っていた俺が寮に戻って来たときには、既に哲平はいなくなっていた。
それからはや2週間。
哲平の捜索は続けられている。全く手がかりが出てこないことから、警察の一部では、何処か人目のつかない所で自殺をしたのでは、という見解も出ている。
しかし、俺には哲平が自殺したとは思えなかった。あの、飛行船の中での会話。哲平は確かに、抗う、と言っていた。あの頑固者に、自分の信念を曲げてまで自殺が出来るはずがない。俺が導き出した結論は、そんな単純なものだった。
この2週間は、特に何もやる気が起きず、ボーっと過ごす毎日。適当に学校に出て、適当にバイトをして。
こちらから何度連絡をしても哲平は応答しなかった。しかし、もしかしたらその内哲平から連絡があるかもしれないと僅かな期待を寄せて、肌身離さずケータイだけは所持していた。
今は学校の昼休み。俺は教室で、窓の外を眺めながら一人で昼食を取っていた。他のヤツらからの誘いがあったが、断って一人で食べている。相変わらず何もやる気が出ない。
「しかしまあ」
うるさいなぁ、と心の中で不平を漏らす。それはそうだ。俺が進級してからこの教室で静かな昼休みを送ったことはない。
『マサマサー！可愛いよー！！マサマサー！！』
教室の真ん中を占拠した男子達が、特定の名前を叫び、騒ぎ立てているためだ。『ＩハートＭＡＳＡ』という文字がデカデカとプリン

トされたバンダナを頭に巻き、液晶パネルのスピーカー前で、発光ペンを全力で振り回している。

「放送アイドルね……」

俺は椅子に深く腰掛けたまま呟く。丁度俺が２年生になったこの４月上旬から、何処の誰かが昼休みの校内回線を占拠して、毎日３０分間の校内放送を行っているのだ。その内容はバラエティに富み、近頃のニュースは当然、校内の至る所の情報を掻き集めて話題にしている。放送主は自分のことをマサと呼んでいて、顔は一度も晒されていないが、可愛らしい独特の声をした女子のため男子学生から絶大な人気を誇っている。オシャレに関する放送もしているから、女子にも人気があったりする。特にこのクラスの男子はモテないためか、放送を欠かさず録音しているヤツまでいる始末だった。

「ただ……」

この放送の問題は、外部からという点なのだ。つまり、この『マサ』と呼ばれる女子は、毎日昼休みになる度にわざわざ学校外の何処かで校内回線をハッキング。その後マイクを握っているということだ。完全に犯罪な上、学校側も黙ってはいないのだが、如何せんこのマサと呼ばれる女子のハッキング技術が尋常で無く、かれこれ１ヶ月近く警察が捜査しているのにも関わらず、未だ手がかりの一つも掴めていないというのだ。一体マサと呼ばれるこの女子は、どれほどの高適合者なのだろうか。

一方の俺は、犯罪者の声で踊っている男子達が理解出来ない上、アイドルなどといった類は全くもって興味が無い。だからと言って恋人がいるわけでもないが。もし仮に恋人が出来ようものならば、まず間違いなくこのクラスの男子勢から制裁を加えられる。恋人禁止令というクラス内条約すら発令されているくらいなのだ。

俺は騒がしい男子に視線を送りつつ、購買で買ったパサパサのパンを冷たい牛乳で喉奥に流し込み、しばらく外を凝視しては、深いため息をつく。

季節はまだ春だというのに、昼頃になれば教室の温度もそれなりに

上がる。男子達の騒ぎ声に加えて、一層俺のやる気を削いでいた。
俺は一人机に頭を伏せて、力なく唸る。
今頃、哲平は何をしているのだろうか。哲平はどうして失踪したのだろうか。
そんなことを考えていると、余計に体に熱が溜まる。
別に俺と哲平は、無二の親友ってワケじゃない。関係を聞かれたら、友達以上親友以下ってところだろうか。ただ、哲平の無茶苦茶な行動に付き合っているのは、やはりお互いの境遇が普通ではないからだろう。
高校に入って、最初の自己紹介で最初に哲平が言った言葉は、俺には親がいません、親はモールドに殺されました、だった。クラス中のテンションが一気に下がったのは覚えている。
俺の番になって、俺にも親がいません、俺はモールドに殺されてます、と言ったら、クラス中のテンションがさらに下がったことも、良く覚えている。オマケに哲平だけが笑っていたのも。
哲平が絡んでくるようになったのは、その後だった。
ふと、アイツは俺なんかと絡んでいて楽しかったのだろうか、と思う。
哲平が失踪する前に言ったあの言葉は、的を射ていると思う。俺と哲平は、似ているようで正反対の人間だ。自身の信念を否定するようなヤツなんかと一緒にいて、哲平は本当に良かったのだろうか。
いつの間にかマサの放送は終わっていた。男子勢がぞろぞろと席や ら廊下目がけて散っていく。思いっきり背伸びをした俺は、食べ終わったパンの袋と牛乳パックを捨てるべく席を立った。重い足取りで、教室の外のゴミ箱を目指す。真新しい教室のドアを開き、ワックスがけされた廊下に足を踏み入れようとした瞬間。
ドンッ、と。
俺の耳が、重く響く音を捉えた。
「？」
今の音は、何だったんだろう。何処か別の教室で、派手に机でも倒

れたのだろうか。
大して問題視はしなかった俺は、近くにあるゴミ箱にパン袋と牛乳パックを捨てる。隣の水道場で手を洗い、濡れた手からハンカチで水分をぬぐい取った。
その直後だった。
ドンッ、ドンッ、ドンッ。
先ほどの音が、連続して聞こえてきた。今度は鳴りやまず、音の聞こえる間隔はどんどん狭まる。しかも時間が経つにつれ音は重みを増していき、ついには耳を塞ぎたくなるほどに膨れあがる。
どうやら他生徒も、この音に疑問を抱いたようだだった。クラスにいた女子は会話を止め、寝ている生徒は起き上がる。校舎全体が、一瞬の静寂に包まれたようだった。
この静寂を破ったのは、短く途切れた人の悲鳴だった。
「な、なんだなんだ?」
今の叫び声をきっかけに、教室が一気にざわめきだす。人の叫び声がしたのは、どうやら窓の外のようだ。
俺がいるのは、3階の校庭側の水道場。方角的には、逆方向の中庭あたりだろうか。その悲鳴の正体を突き止めるべく、次々と生徒がベランダに出て行く。俺も慌てて教室に戻ると、賑わうベランダから強引に頭だけを出して、中庭の様子を見た。
悲鳴の正体は、荒瀬だった。
2週間前と比べて、荒瀬の容姿は随分と変わっていた。まず第一に、痩せた。元々痩せてはいたが、残り少ない無駄な肉を全て落とした感じだ。かつてのガッシリとした体格の面影はどこにも見あたらず、小麦色だった顔の表面は真っ青になっている。髪は伸びた代わりに薄くなり、金髪に黒髪が混ざっていた。全体的にげっそりした、という表現が適切だろうか。
荒瀬は何かから逃げるように、何度も転びながら必死に走っている。そして、息切れした状態で口から漏れていたのは、助けてくれ、という言葉だけだった。掠れた声で何度も何度も叫んでは、必死に走

ろうとするが、足が言うことを聞かないようだ。すぐに転ぶ。
ざわめきの中で、一人の生徒が言った言葉が、俺の耳につく。
「アイツか、小西を自殺に追いやったってヤツ」
なんじゃそりゃ、と心の中で俺。しかし冷静に考えてみると、そんな噂が広まるのも仕方が無いのかもしれない。哲平は荒瀬から暴力を受けた日に失踪しているのだ。大方学校に警察が来て、荒瀬に事情聴取をしているのを目撃したヤツからの適当な憶測だろうが。
荒瀬がげっそりしてしまったのは、哲平を殺してしまったと思いこんでいることから来る罪悪感のせいだろうか。
そんな俺の思考を遮るかのように、他生徒のざわめきが一瞬大きくなる。俺は再び身を乗り出すと、荒瀬とは別に、校舎から新たに人が出てくるのを捉えた。
大杉だ。先日荒瀬に殴られていたのを思い出す。身長は小柄で、横幅がでかい、典型的な肥満体型。適合率は哲平と同程度で、確か２２％だったはず。しかも見るからにひ弱そうだから、荒瀬に狙われるのも無理ないな、と俺は勝手に納得する。
俺の視界の先では、荒瀬がちょうど起き上がったところだった。そして、荒瀬が大杉を視界に捉えた瞬間、目が大きく開かれる。
「うあああああ、来るな、来るなー！！」
再び尻餅をついた荒瀬のすり切れた叫び声が、ざわめきをかき消す。
そんな荒瀬を見た俺は、この状況が大層奇妙なことに気づく。
この状況は、不自然極まり無かった。学年屈指の高適合者である荒瀬にとっては、低適合者である大杉など赤ん坊のようなものだ。だからこそ、苛立ったときはまるでサンドバックかのように扱っていたはず。そんな荒瀬が今、必死に大杉から逃れようとしている。その気になれば片腕だけで地面にねじ伏せられるのに。
溢れる野次馬を押しのけ、何とかベランダの手摺りまで辿りついた。２階、つまり三年生の階のベランダを見てみると、こちらと同じく人で溢れ返っていた。４階の一年生の階も同じく。校庭に生徒の影は見あたらなかったので、いつの間にか全校がこの事態を見守るよ

うな形になっていた。
「うぁ、うぁ、うぁ」
荒瀬の言葉にならない悲痛の声が聞こえる。荒瀬はゆっくり歩いてくる大杉から逃げようと、尻餅をついたまま後ずさる。
校舎全体のざわめきが、いつの間にか消えていた。聞こえるのは、荒瀬の激しい息づかいと、無表情の大杉のゆっくりとした足音だけ。
そしてついに、視界の先で大杉が荒瀬に追いついた。大杉は暫く荒瀬を見下ろすと、乱暴に襟首を掴み上げ、強引に引き起こす。
その行動が引き金になったのだろうか。獰猛な目を大きく見開いた荒瀬は、恐怖を振り払うように叫びながら、大杉を殴ろうと拳を振り上げた。
起伏の大きい荒瀬の右拳が、大杉の顔面を捉えた次の瞬間。
「――――え？」
一瞬、俺は何が起きたのか分からなかった。
大杉が、荒瀬の拳を受け止めたのだ。
左手の人差し指一本で。
「あ、あ、あ」
目の前の光景が信じられないかのように、荒瀬が情けない声を漏らす。
俺の中に確かに存在した不変の現実が、音を立てて崩れていく。
何をしようが、才能の前では無意味。低適合者は高適合者には絶対に勝てない。
そんな、当たり前だと思っていたことが、目の前でいとも容易く否定されてしまった。
俺が放心状態から戻った矢先に。
――荒瀬の右腕が、宙を舞った。
大杉に掴まれた荒瀬の右腕が、肩の付け根辺りからばっさりと切断されたのだ。大杉の手には、刃物などは持たれていない。
大量の血が荒瀬の右肩から吹き出し、ボタボタと地面に垂れる。
その血が頬につくと大杉はようやく、その丸々太った顔の形を崩し

た。
ニヤリ、と。
「がああああああああああああああ！！！」
荒瀬の叫びに一瞬遅れて、全校から悲鳴の渦が巻き起こった。あまりの痛みから地面で転げ回っているようである荒瀬の苦痛の叫びも、その悲鳴でかき消される。
悲鳴の中で、大杉の楽しそうな笑い声が嫌にはっきりと聞こえる。
「ははははははは！！いいよ！いいよぉ！荒瀬君！いつも僕を虐めていた君が、僕の前で這いつくばっている！適合率なんて関係ない！僕はもう、もう嬉しくて嬉しくて！ああ、なんて、なんて気分がいいんだ！！」
その、心の底から嬉しがっている大杉の声を聞いた俺は、全身の鳥肌が立つのを感じた。
混乱する頭を押さえて、今すべきことを必死に考える。俺の中に存在した不変の現実が否定されたことを驚くより、目前の異常な事態を収束させることが先決なのは当然だ。校舎はまだ悲鳴の渦に包まれ、他生徒はあまりに衝撃的な光景から来る恐怖に、目前の状況から目を離せずにいる。誰もこの状況を解決するべく動こうとはしない。
俺は、叫び回る生徒達の間をくぐり抜け、教室を勢い良く出た。長い廊下を全力で走り、階段を目指す。
この事態を収束させるには、まず大人に知らせる必要がある。少年漫画の主人公のように、助けに飛び込むなんてバカな真似をするつもりは微塵もない。最も合理的な方法であるとはいえ、困ればすぐに教師頼りの自分が多少情けなかったが、今はそんなこと言っている場合ではない。
普段使用するエレベータの到着を待っている時間は無い。そう判断した俺は、長年使用されずに寂れている非常用階段を駆け下り、２階に降りた。と同時に、校舎内では新たな悲鳴が生まれる。現在の状況を把握すべく、俺は１階と２階の踊り場の窓から外を覗いた。

血で染まった中庭では、放心状態になっている荒瀬を、大杉が抱きしめていた。少し冷たい風と共に、優しげな大杉の声が入ってくる。
「大丈夫。荒瀬君。君をすぐ楽にするなんて、野暮な真似はしないよ。君が満足するまで、僕がずっとずっと、苦しめてあげるから」
荒瀬の左腕が、激しく潰れた。大杉の右手に、二の腕辺りから握りつぶされたのだ。左腕からも血が噴き出し、再び荒瀬から悲痛の叫びが上がる。
俺は一瞬、強い吐き気を感じた。
コイツは相当、イカレてる。
もう、のんびり状況把握などしていられない。俺は４つ飛びで階段を駆け下りる。不安定な態勢で着地し、危うく転びそうになったのをなんとか堪え、再び足に力を入れる。
職員室は、学校の校舎から大分離れた別館の奥にある。この状況を一切知らないであろう教師に警鐘を鳴らすべく、全力で職員室に向かって走っていると。
「がっ！」
俺は何かに思いっきり足をつまずかせ、勢いよく吹っ飛ぶと、地面に頭を強く打ち付けた。クラクラする頭を持ち上げ、すぐに視界の先の異変を捉える。
「な、なんだこれ・・・・・・？」
１階の廊下や壁に、いくつもの巨大な穴が出来ていた。どうやらさっきの重音は、この穴が出来た時の音のようだ。
大きさは、直径３Ｍくらいだろうか。ほぼ等間隔に、玄関の方へと続いている。
「これ、全部大杉がやったのか・・・・・・？」
俺は、我に返ったように頭を上げる。そして、今自分が呟いた言葉を繰り返す。
全部、大杉がやった？
目の前にあるのは、頑丈なプレートに開いた直径３Ｍもの巨大な穴。しかも穴は相当深い。適合率が５０％を超えてるヤツでも、このプ

レートは貫通できないと聞いていた。
俺はさらに、先ほどの大杉を思い出す。
アイツは一体どうやって、荒瀬の腕を切断した？
大杉は、ナイフなどの刃物を一切持っていなかった。それどころか、荒瀬の拳を押さえた左腕以外、一切体を動かしていない。
いや、そもそも低適合者である大杉に、あんな芸当は出来るはずがない。
現実ばかり考えていた俺の石頭の中で、突如訪れた不可解な現象達が、お互いに激しく衝突する。俺はさらに混乱する。
「と、とにかく、何とかしないと・・・・・・」
取り返しのつかないことになる。頭はそのことだけはしっかりと理解していたようだ。
さっきの転んだ際に頭を強く打ちつけたせいで、視界がぐらつく。不安定な足取りで、何とか俺は玄関を出た。
玄関からの大杉達までの距離は、ざっと１００M前後、といった所だろうか。大杉は荒瀬の首を絞め上げて、気が狂った殺人鬼かの如く笑っている。校舎ではようやく生徒達が落ち着きを取り戻し、警察を呼べだの大杉を止めろだの、この状況を収束させるべく動き始めている。
俺が今すべきことは、教師にこの事態を知らせること。自分の目的を再確認した俺は、ぐらつく頭を押さえ、足に力を入れ、再び駆け出そうとする。
と、その時。
暖かな風が、俺を包んだ。
少しずつその風は密度を増し、高度を下げていくと、最終的には地面で小さな円を描いて徘徊する。
「わっ、わわ！」
地面で渦巻く風に足を捕られ、俺は思わず尻餅をついた。痛む腰をさすりながら、ふと上を見上げると。
一人の少女が、空から落ちてきた。

いや、降りてきた、というのが適切かもしれない。
少女は不思議なくらいゆっくりと落下し、地面間際ではさらに加速度を緩める。
地面に渦巻く風の影響で、チェック模様のスカートや綺麗な黒髪が不規則に揺れる。
そして地面に足が触れるかどうかの辺りで一度空中に静止し、背を向けて俺の目の前に着地した。
「な、な、な」
再び増えた混乱要因に、俺は尻餅をついたまま口をパクパクとさせる。
そんな中、空から落ちてきた黒髪の少女は、ゆっくりと俺の方を振り向いた。
「・・・・・・！」
不覚にも。
こんな状況なのに、俺はその少女に見とれてしまった。
生徒の悲鳴が遠くに聞こえ、その少女以外の視覚的情報が全て遮断される。
容姿端麗とは、まさにこのことを言うのだろう、と俺は混乱状態の頭で思う。黒く澄んだ大きな瞳を初めとする、予め考慮されていたかの如くバランス良く配置された顔のパーツ。
身長は１６０？前後だろうか。すらりと伸びた美しい肢体の上に、この学校の制服を纏っている。同じ制服でも、中身が違うだけでここまで変わるか、と感嘆してしまう。春風に揺れる一本に纏め上げられた黒髪も相まって、まるで一つの完成された芸術品が置かれているようだった。
はっ、と我に返る。俺の後ろにある校舎からは、依然として生徒の騒ぎ声が聞こえる。尻餅をついたまま上を見上げると、大杉の件とは別に、４階の女子達がこの黒髪の少女を指差しながら慌てふためいていた。制服のリボンの色も合わせて考慮すると、この少女はこの学校の一年生で、今は４階から飛び降りたようだ。

確かに、適合率が２０％代の人が飛び降りたらひとたまりもないだろうが、５０％ほどの高適合者となれば、４階程度の高さから飛び降りたとしても大した怪我はしない。予め用意をしてから飛び降りれば、無傷で着地するのもさほど難しくないだろう。
つまりこの少女は、適合率５０％並の超高適合者だということになる。
俺の頭の中での混乱要因が一つ削除された。飛び降りた理由は知らないが、無傷なのは納得できた。
と思ったのだが。
「宮谷さ～ん！大丈夫ですか～！？」
「茜～！大丈夫～！？怪我ない～！？」
校舎の方から、連続して二人の女子の声が聞こえた。どうやら、俺の目の前にいる黒髪の少女は、宮谷茜というらしい。
どこか聞いた名前だなと、俺が脳のデータベースに検索をかけていると、宮谷という少女が上の女子達に笑顔を向けた。
「大丈夫で～す！心配してくれて、ありがとうございま～す！！」
高く、澄んだ声だった。華奢な見かけによらず、意外と大きな声に多少驚く。
そしてその少女は俺を見ると、微笑した。
宮谷茜の微笑を見た瞬間、俺の頭の奥底に眠っていた特定の記憶が、一気に表に引きずり出された。
思い出した。あの、２週間前の日の哲平の言葉が浮かぶ。
宮谷茜、一学年の最低適合者。
適合率は、２１％。

非現実（後書き）

ランキングの方よろしければお願いします。←

ＶＳ　『青』服用者（前書き）

今回は全編バトルです。

ＶＳ『青』服用者

思い出した。あの、２週間前の日の哲平の言葉が浮かぶ。
宮谷茜、一学年の最低適合者。
適合率は、２１％。

バカな、と俺の頭がさらに混乱する。学年一の低適合者が、４階から飛び降りて全くの無傷。ありえない。絶対に、ありえない。
しかし俺はすぐに我に返る。今はこんなことに驚いている場合ではない。物事の優先順位を誤るな、と自分を叱り、起き上がってから職員室を目指して駆け出そうとした。
そして俺の前に立つ宮谷を横切ろうとした際。
足を引っかけられる。
俺は再び吹っ飛び、頭から地面に激突した。再度頭に大きな衝撃を受けた俺は、ユラユラと立ち上がると、背後の宮谷を睨み付ける。
「いったあああああ！！！何すんだよぉ！？」
この状況を分かってんのか、と頭を押さえながら付け足す。
俺の言葉に対し、軽くため息をついた宮谷ははっきりと俺に言う。
「あなたがどこの誰だか全く知らないけど、どうせ教師でも呼びに行こうとしたんでしょ？そんなことしても無駄よ。むしろ迷惑だわ」
さっきの４階の女子達に向けて言った人物とは思えないほど、目の前の黒髪の少女が発する言葉は、口調も内容も激変していた。俺は一瞬言葉を失う。
「ばっ、この状況で助けを呼ばなくてどうすんだよ！このまま荒瀬

を見殺しにしろってか」
荒瀬？と宮谷は首を傾げる。そして誰のことを指しているのか分かった様子で、ああ、と無表情で手を叩く。
「だから、助けを呼ばなくても大丈夫だって言ってるのよ」
今すぐにでも行動を起こすべきなのに、俺は何故か宮谷の言葉に耳を傾けていた。
そして彼女は再び俺に微笑を浮かべると、告げた。
「すぐに終わるから」
「――――あれ？」
突如風を切るような擦れた音が起きると、目の前から宮谷が消えた。
俺は慌てて自分の周辺を見渡すが、彼女の姿は何処にも見あたらない。
「・・・・・・！足音！」
ふと聞こえた足音の方向に顔を向けると、視界の先には宮谷がいた。
そしてまっすぐ。
大杉の方に向かっている。
バカな！と心の中で叫ぶ。どういうワケかは知らないが、今の大杉は超高適合者である荒瀬を軽く捻っているのだ。一学年の最低適合者の華奢な少女がどうにかしようなど、それこそ笑い話では済まなくなる。
俺は思わず駆け出そうとする。こんな混乱したフラフラな状態で、イカレた殺人鬼モドキに突っ込もうなど、普段の冷静で利口な俺が見たらどう思うか。しかし、足に込めた力は分散せず、そのまま一歩目を踏みだそうとすると。
「え？」
俺が宮谷を視野に捉えてから行動を起こす前に、宮谷の回し蹴りが、荒瀬を掴んだ大杉の顔面を直撃していた。その蹴りをモロにくらった大杉は３０Ｍ以上は吹っ飛び、遠くの桜木の幹に激突する。その衝撃で大木は真っ二つに裂け、大きな音と振動を発生させながら荒々しく倒れた。桜の花びらが盛大に拡散する。

「な・・・・・すっ、げぇ」
思わず呟く。と同時に俺は全力で駆け出した。
頭上のベランダで、この異常な事態に生徒達がざわめいている。当然、宮谷茜の異様なまでの力が原因で。
彼女、宮谷茜は一体何者なのか。
最初俺がいた位置から大杉がいた位置まで、１００M前後はあった。しかし宮谷はその距離を僅か1秒前後で移動して見せた。この学校での１００M走の最速タイムが４秒５６である。しかも、ただの蹴りで巨体男子を３０M以上も吹き飛ばしたのだ。尋常な力ではない。
彼女は、学年一の低適合率者では無かったのか。頭の混乱具合は一層激しくなり、頭痛が鳴りやまない。この僅か数分間で、現実と空想が激しく入り乱れ、俺の思考はもはや正しく機能していなかった。
「はぁ、はぁ、・・・・・おい、お前・・・・・・」
たっぷり１０秒以上かけて、宮谷の元に駆けつけた俺は呼びかける。
「あら、アナタも来たのね。ちょうどいいわ、この人お願いね」
笑顔の宮谷は俺の姿を認識すると、彼女の小さな右人差し指を下に向ける。
目の前の光景を見て、俺は再び吐きそうになった。
荒瀬だ。右腕左足を失い、左腕は真ん中から有らぬ方向に折れていた。全身とその周辺の地面一帯が血まみれになっている。辛うじて意識はあるようだが、痛みと出血で、もはや片言も話せない状態だろう。
宮谷は俺に背を向けると、凛とした声で指示を出す。
「さっき救急船を呼んだから。もうすぐ来ると思うから、止血とかできたらお願い」
助かるかもしれないしね、と宮谷は付け足す。
それだけ言うと、彼女はゆっくり大杉の方へ向かって歩き出す。俺は慌てて呼び止める。
「ちょ、ちょっと待てよ！」
宮谷は顔だけ振り向く。俺に一切の興味もないような、無表情。

「お前、一体何者なんだよ。何で低適合者のお前が、こんな力を持ってるんだ？」

そう言いながら、俺は視界の先にある倒れた大木を指差す。俺の言葉に宮谷は目を丸くし、数回瞬きする。そしてすぐにいたずらな笑顔を見せる。

「さぁ？どうしてかしらね。でもどうせすぐ忘れちゃうんだから、教えてあげない」

冷たく俺をあしらうと、彼女は再び背を向ける。すぐに忘れるとは、どういう意味だろうか。俺が彼女の言葉の真意を分かりかねないまま、宮谷は歩き出す。

「お、おい！お前、これからどうするんだよ！」

「お仕事」

そう言い捨てるように言葉を放った宮谷は、足を止めることなく大木の方に向かっていく。

はぁっ？と心の中で俺は首を傾げる。理解不能な出来事が重なり過ぎて、俺の頭はパンク寸前だった。このままだと本当に頭から湯気でもでるんじゃないだろうか。

再来した生徒のざわめき中、俺の耳が擦れた呻き声を捉える。

その呻き声の主は、俺の眼前に倒れている荒瀬だった。荒瀬の存在を一瞬忘れていた俺は、慌てて彼を起こそうと近づき、背中に手を回そうとすると、ベッタリと血が付着した自分の両手の動きを止めた。

――――酷い。

改めて間近で荒瀬の怪我を見た俺は、第一にそう思った。酷い怪我だ。特に腕のついていない右肩と、左足を失った太ももからの出血量が半端じゃない。このままでは、病院からの救急船が到着する前に出血多量で命を落とすだろう。

俺は無意識の内に、これ以上の血の流出を防ぐ為に荒瀬の肩を押さえた。触れた際の痛みからだろうか、荒瀬が短いうめき声を上げる。

「止血するには――――」

縄のような、縛って血流を止められるものが必要だった。保健室にある包帯が全く効果を発揮しないのは目に見えていた。しかし、周りを見渡しても、どこにも縛れそうな代物はない。

俺はとりあえず、学校指定のシャツを脱ぐと、近くの針金で出来たフェンスの先に引っかけた。そして勢い良く引き、シャツを意図的に切り裂く。

俺のシャツはちょうど真ん中から綺麗に裂けた。すぐに俺は荒瀬の傍に戻り、その二つに分断されたシャツの片方を右肩に押し立てると、あらん限りの力で縛る。

そしてすぐに残ったもう片方のシャツを使い、左足の太ももを縛り上げた。これで多少流血が押さえられると思ったが。

「ちっくしょう・・・・・！」

流血の勢いは、ほとんど変わらなかった。シャツのような柔らかい布で縛ったところで、大した圧力にはならなかったようだ。縛ったシャツはじわじわと赤く染まり、荒瀬の顔は確実に青ざめていく。

やはり流血を止めるには、縄のような頑丈な代物が必要だった。しかし、状況からして、この場を離れることはできない。何処にあるかも分からない縄を探している内に、荒瀬は絶命してしまうだろう。

どうする、どうする、どうする。

俺の頭からは、この状況を攻略できるような考えは一切浮かばず、ただ焦りから熱を発している。

他に方法がない俺は、荒瀬の肩と太ももを両手で強く塞いだ。しかし、指と指の隙間からは着実に血が溢れ出てくる。

くそ、止まれ、止まれ。何度も強く願っては、押さえつけている両手にさらに力を込める。しかし、流血の勢いは緩まない。

ふと、どうして俺はこんなに必死になっているのだろう、と思ってしまう。この出血量だ。俺がどうこう足掻いたところで、結果は変わらないだろう。必死になるだけ無駄骨なのだ。

頭の中で、諦める、という俺にもっとも適した言葉が、ゆっくりと浮かび上がってくる。

そうだ、いつもみたいに諦めてしまえばいい。この件だって、別に荒瀬が死んだところで俺が責められるワケではあるまい。完全に大杉の引き起こした事態なのだ。

いつもみたいに成功の見込みが無いことは諦めて、逃避してればいい。そうすれば、絶対に間違った道に足を踏み入れることも無い。

荒瀬の傷を塞いでいた俺の両手から、少しだけ力が抜けた。

次の瞬間。

上から、細長い何かが落ちてきた。それは地面に当たると、小さく跳ねた後動きを止める。

蛇口のホースだ。

思わず上を見上げると、他生徒が俺に呼びかけていた。

「おい、恭司！止血をしたいんだろ、それを使え！俺たちもすぐに行くから！」

俺は、落とされたロープを見る。３Ｍほどの長さがある緑色の物体は、人の手でも千切れられるよう、真ん中に切れ込みが入れてある。

目の前に、助けられる人がいる。助けられる手段がある。

俺は本当に、この状況で諦めるべきなのか。

否。

「うぉおおお！助かった！」

俺はダッシュでそのロープへ駆け出す。掴むとその場で半分に千切った。そしてすぐに荒瀬の傍に戻り、真っ赤に染まった俺のシャツの上からきつく、きつく縛った。

そして少しその場から離れて、傷口を観察する。

流血はほぼ無くなり、多少の血が滲み出る程度になっていた。

「よ、よかった・・・・・・」

助かった。決していい様態とは言えないが、流血が阻止された以上、まず悪化することは無いだろう。後は安静にさせて、救急船が来るのを待てばいい。先ほどの混乱や焦りは嘘のように消え去り、晴れ晴れとした達成感が俺の心を占める。

しかしすぐに、自分の考えを改める。

いや、まだ終わっていない。解決するべき問題が、残っている。
超高適合者である荒瀬を、いとも容易くここまでにしたヤツが。
視線を荒瀬から倒れた大木の方へと向けた次の瞬間。
「！」
凄まじい衝撃波と共に、倒れていたはずの１０Ｍはあろう大木が、まるで小枝の如く勢いよく空に跳ね上げられた。そして、ちょうど一年生がいる４階のベランダ辺りに達したところで、加えられた衝撃に耐えられなかったのか、その大木が内部から盛大に爆散する。
小さな矢の如く降り注ぐ、大木の鋭利な破片の雨に、ベランダ中の生徒から悲鳴があがる。
その破片の雨は四方八方に拡散し、俺の方にまで降り注いできた。
「危ない！」
咄嗟に俺は、荒瀬の上に覆い被さった。背中にいくつかの木の破片が刺さったようで、鋭い痛みが俺の体を走る。
破片の雨は、時間にすれば数秒程度で降り終わった。俺はゆっくり荒瀬から離れ、自分の背中の状態を手探りで確認する。
１０？ほどの木の破片が３本刺さっていたが、どれも浅かった。多少の痛みを覚悟で、背中から引き抜く。
「い！っつ・・・・・・」
少しだけ血が付着したその破片を乱暴に地面に落とすと、俺はすぐに校舎の方を見上げた。
爆散地から大分離れた俺がこの傷だ。大木の間近にいた４階の一年生は、重傷を負っているに違いない。
しかし、そんな俺の予想を裏切るかのように。
「あ・・・・・れ？」
震える一年生達は、全員無事だった。傷一つついている様子がない。
視線を下に降ろすと、ベランダにいた二年生も三年生も、全員が無事だった。
そして視線をさらに下に降ろすと。
「な、なんだこれ・・・・・・」

数千本はあろう鋭利な破片が全て、中庭の地面に突き刺さっていた。
校舎の壁やベランダにいた人には一切刺さっておらず、ベランダから数Ｍ先を境界線に、全てが綺麗に地面に垂直に突き刺さり、校舎と平行に一つの太い直線を描いている。
まるで、ベランダの先に強力な重力場が作られたように。
そしてその数千もの木の破片が突き刺さった場所の左隣りに、黒髪の少女が悠々と立っていた。俺との距離はおよそ２０Ｍ。
「宮谷！」
俺が立ち上がり、少女に駆け寄ろうとすると。
ドンッ、と空気が揺れた。俺の視界前方から押し寄せてくる厚い空気の壁に全身を押され、勢いよく尻餅をつく。そして、大木があった場所から、一人の少年がゆっくりと起き上がる。
大木の下敷きになっていたはずの大杉だ。怪我らしき怪我は全く見あたらず、その代わりシャツとズボンは大きく破れ、そこから肌が露出していた。
大杉の肌の色を見た俺は、鳥肌が立つのを感じる。
そこから伺えた大杉の肌は、人間味ある肌色ではなく、炭のような黒色をしていた。手足を含め胴体全てが黒に染まり、唯一首より上だけが黒色に変化していない。
「ああもう、イタイな～。せっかく人が楽しんでいたのに」
そう言いながら、大杉は蹴られた自分の頬をさする。
にやにやと笑う大杉に、正面１０Ｍの距離に立っていた宮谷が凛とした声で聞く。
「大杉誠さん。少々質問をしたいのですが」
「何？」
「アナタは何処で『青』を手にいれたんですか？誰かに貰ったんですか？」
「そんなの言うわけないじゃん。ダメだよ、この『青』は、僕だけのものなんだから」
頭を掻きながら、面倒臭そうに大杉が答える。

『青』とは、一体なんのことだろうか。
確かに、宮谷と大杉は『青』と言っていた。もしかしたら、二人の並外れた力に関係している何かなのだろうか。
後ろからでは表情は分からなかったが、宮谷は少し俯くとスカートのポケットから透明の液が入った、5?程度のカプセルを取り出す。
カプセルを持った腕を前に伸ばし、それを大杉に見せる。
「今ならまだ、間に合います。コードからの情報がアナタの体を蝕みきる前に、早くこの『緑』を」
その様子を見た大杉は、一瞬目を大きく見開くと、腹を抱えて笑い出す。
「あ、あ、あっはははははははは!!何言ってんの!?バッカじゃねぇの!?せっかく手に入れた力をわざわざ捨てるヤツがいるかよ!あっはははは・・・・・・」
大杉は笑い続ける。そして笑いの最中に。
激しく吐血した。
「がはっ!ゴフッ!ぐ・・・・・・ぁぁあああああああああああああああ!!」
耳を劈くような叫び声と共に大杉は地面に倒れ伏せ、かっ、かっ、と短い音を発しながら、頭を抱える。
そしてついに、首の付け根から大杉の顔全体までもが黒色に変色していく。
大杉の体が完全に黒色に変化した後、全身から煙が出始めた。ジュウウウッといった何かが溶けるような音と共に、大杉の体がみるみるしぼんでいく。野獣のような呻き声を発した大杉は、ゆっくりとその場から立ち上がった。
なんだ、アレは。
大杉が身に纏っていた服は全て溶けて無くなり、その全貌が周囲に晒される。黒一色の肌に、大きく見開かれた白目。体は骨と皮だけを残したかの如くやせ細り、赤色に変色した髪は地面に付くほど伸びて、風にゆらゆらとなびいていた。

俺の目の前にいるのは、果たして大杉なのか。いや、あの状態を人と呼んでもいいのだろうか。その変わり果てた異形の姿を見たベランダの生徒が、再び騒ぎ始める。

「そう、またダメだったのね・・・・・・」

俺の前方にいた宮谷が、通信機らしき物をスカートのポケットから取り出すと、左耳に当てた。

「こちら宮谷。対象の浸食が第3段階に突入したのを確認。対『青』用ワクチンの使用は不可能と断定。対象の殲滅と、イレイサーの使用許可を求む」

何だ、宮谷は誰と会話しているんだ?

視界の先で誰かと通話している宮谷に、俺が声をかけようとすると。突如大杉が、雄叫びを上げた。

近くの大気が全て大杉を中心に集まり、一気に放たれた感じだ。超高圧力に桜の葉が大きく舞い上がり、大地が揺れ、窓ガラスが次々と割れる。短く切れた悲鳴を上げると、ベランダにいた生徒は次々と教室に逃げ込んだ。

「うおおおおおおおっっ!!」

あまりの空気の圧力に、俺は前を見ることが出来ず、体がピリピリと震えるのを感じる。前屈みになり、後ろに吹き飛ばされそうになるのを必死で堪える。

ふいに、俺は荒瀬のことを思い出す。

この状況でケガ人を外に放置しているのはマズイ。超現実主義者かつ合理主義者である俺が、自分の身よりも他人の身を心配しているのが少々驚きだったが。

顔だけ後ろを向くと、そこに荒瀬はいなかった。

一瞬吹き飛ばされたかとも思ったが、既に教室から駆けつけたクラスメイト数名が協力して荒瀬を校内に連れようとしているのを視界に捉える。

安心した俺は吹き飛ばされないように気をつけながら、顔を正面に戻し、後ろに後退しようとすると、僅かに開けた視界に、今度は宮

谷の姿を捉えた。
宮谷は、この超高圧力をものともせず、平然と立っていた。そして、左耳に掌を重ねて、じっとしている。
ふっ、と。この圧力が収まった。俺は思わず前に転びそうになり、足で踏ん張って耐える。
次の瞬間。
雄叫びを終えた大杉が、目の前の宮谷に襲いかかった。１０Ｍもの距離を一瞬で縮め、真っ黒に染まった右拳を荒々しく振り上げる。間一髪で宮谷が横に飛んで避けると、そのまま大杉の拳は地面に叩きつけられた。
衝撃が、俺の足下を走り抜ける。大杉の拳は、大地に直径５Ｍほどの巨大なクレーターを作り、その際、中庭全体に放射状の細い亀裂が走った。
獣の呻き声のような声を発し、横にいる宮谷を視界に捉えた大杉は再び襲いかかる。振り下ろされる拳を宮谷は避けると、大杉から距離をとる。
その時だった。
「対象の殲滅と、イレイサーの使用許可、確認しました」
無表情の宮谷はそう呟くと、耳から通信機を取り外す。両手を後ろに回し。
スカートの中から、二丁の拳銃を取り出す。宮谷は拳銃を大杉に向けると、躊躇い無く引き金を引いた。
二つの銃口が火を噴き、その際に発生した轟音が空気を震わす。
しかし弾丸は、大杉の体を貫通することは無かった。
「え・・・・・？」
俺が驚きのあまり声を漏らす。宮谷が撃った２つの弾丸は、大杉の腹に当たるとそこで進行を止め、力なく地面に落下した。
「皮膚が、弾丸を通さないほど硬質化しているのか・・・・・？」
真っ黒に染まった大杉の体を眺めながら、俺は小さく呟く。
常人なら卒倒してしまいそうな異常事態からすぐに回れ右をして全

力逃走をしたいところであったが、俺の足は驚き7割、恐怖3割で全く言うことを聞かなかった。
まるで瞬間移動をしているかの如く、再び大杉は超高速で宮谷に殴りかかる。宮谷は軽い物腰でその攻撃を跳んでかわしつつ、背後から上下逆さまの状態で銃を連射する。
しかし今度は本体に届くどころか、カッ、という短い咆哮だけで弾丸の勢いが殺される。金属音を鳴らしながら、動きを止められた数発の弾丸が地面に落下した。
空中で一回転して、片膝を着いて着地した宮谷は小さい舌打ちをした後、再び接近した大杉の拳をかわし、身軽なバックステップたった2回で大杉から２０M以上もの距離をとった。
そして、多少震える俺の隣りに並ぶような形になる。
獲物を取り損なった野獣の如く唸った大杉は、真っ黒の左腕で右の二の腕を掴む。流れる風に赤色の長髪がなびく。
俺の視界にさらに信じがたい光景が飛び込んできた。
大杉の黒い右腕が、その形を崩し始める。そしてゴキゴキという、骨が折れるような鈍い音を発しながら、ある一つの形に収束した。
大杉の右腕が、細長い槍にも似た黒色の剣に姿を変えたのだ。
再び雄叫びを上げた大杉が、宮谷と俺に向かって突進する。
いや、目視できたワケではない。気がつくと、いきなり目の前に大杉がいたのだ。俺の左隣りに立っている宮谷の懐に入り込み、右腕が変化した鋭利な剣を一閃するべく構える。
その一連の動きだけは、やけに遅く視界に入ってきた。
宮谷！心の中でそう叫ぶ。しかし宮谷は銃を構えるどころか、その場を動こうとさえしない。
胴体を真っ二つに斬られる宮谷の姿が頭に浮かぶと、ついに大杉の剣が振られた。
次の瞬間。
「ガッ！」
突如大杉が、何らかの圧力によって地面に押し潰された。何らかの

力が継続して働いているのだろうか、大杉は地面から動くことができないようだった。ベキベキッ、という大地が砕ける音を発しながら、大杉もろとも周辺の大地が半球状にくり抜かれていく。

そんな大杉を哀れむような表情を見せた宮谷は、俺の目の前で地面に押し潰されている大杉の近くにしゃがむと、優しい口調で話しかける。

「許してね、大杉君。君はもう、人じゃないのよ」

だから、と宮谷は呟き、目を閉じる。右手の銃を、大杉の後頭部につけると。

引き金を引いた。

バギッ、と。ゼロ距離で放たれた弾丸により、硬質化した皮膚が貫通される音がした。

ＶＳ　『青』服用者（後書き）

応援の方、宜しくお願いします←

イレイサー（前書き）

今回は短めですが、かなりの伏線が散りばめられております。

イレイサー

バギッ、と。ゼロ距離で放たれた弾丸により、硬質化した皮膚が貫通される音がした。

同時に、大杉はその場で完全に動かなくなった。
その真っ黒の全身から、真っ黒の液体が滲み出す。
血、だろうか。
「――――はっ！」
俺は我に返ると、思考を止めていた頭を無理矢理働かせ、目の前で起こった状況を把握する。
宮谷が、野獣のように変わり果てた大杉を、殺した。
間違いない。この黒髪の少女が、こんな華奢な少女が、人を殺した。
多量の混乱要素が頭の中で大戦を始めている中、この揺るがない事実を俺は素直に受け入れようとする。

当然、受け入れられなかった。
「わあああああああああああ！！！」
情けない叫び声を上げて、俺はその場で後ろ向きに転けると、全力で後ずさりする。そして震える指で宮谷を指差す。
「お、おま、お前何、な、何やって、て！ひ、ひと、ひとを、こ、こころ、ころしししし！！！」
言葉が言葉にならなかった。そんな慌てふためく俺を宮谷は無表情のまま一瞥すると、スカートのポケットから何かを取り出す。
ピンク色のボールペンだ。何故この状況下でそんな代物が登場するのかを頭でじっくり考察するほどの余裕は、今の俺には断じて無い。
宮谷は、イレイサーやると独りごちてるみたいで恥ずかしいのよね、とボールペンを顔の前に持ってきた。軽く咳払いをした後、細長い

物体の上端を押しながら、謎の言葉を一気に吐き出す。声量が小さく、何を呟いているのか分からなかったが、最後の一言だけはしっかりと聞き取ることが出来た。

「イレイサー、オン」

直後、ボールペンから激しいフラッシュが3度に渡り発生する。同時にサイレンのような、耳に障る高音が大音量で放たれた。

思わず両耳を塞ぐが、爆音は両手の存在を気にも留めないかの如く、鼓膜を激しく震わす。

耳障りを通り越して、痛いと感じる程の爆音。

時間にして、5秒弱。サイレン音は少しずつフェードアウトしていき、収束を迎える。

「あれ？」

あまりに奇怪な現象に、俺は思わず疑問の声を上げる。

両耳から掌を離すと、世界は全くの無音に包まれていたのだ。

あれだけの騒音を放っていた校舎は、完全に沈黙していた。ふと校舎を見上げると、ベランダに残っていた生徒は全員、気を失ったかの如くその場で倒れ伏せている。壊された窓から見える、荒瀬を校内に引き入れた生徒も同様に。

視線を前方に戻す。

視界の先では、背を向けた宮谷が大きな背伸びをしていた。

両手を上に伸ばし、気の抜けたあくびをし終えた宮谷は体ごとこちらを向き、眠そうな目で俺を視界に捉えると。

固まった。

両者とも固まったまま、数秒が過ぎる。そして最初に口を開いたのは、宮谷だった。

「あ、あああなた、あなたななんで、な、なんで、え？あれ！？どどどどうして！？効いてない！？」

慌ててボールペンを取り出した宮谷は、両手で握りしめるその桜色の物体と、尻餅をついたままの俺を交互に忙しく見る。

「えっと……」

「な、何で?故障?イレイサーが?」
「あ、あの〜」
「でも他の人にはちゃんと効いてるし、雅美への指示内容にも含まれてないはず……」
「お〜い、聞こえてるか?」
完全に状況を把握出来ていない俺が何度も話しかけていると、ようやく俺の存在を再認識したのか、一瞬反応を見せた宮谷が突如早足で接近してきた。目前まで近づくとその場にしゃがみ、怪訝な表情を浮かべながら俺をまじまじ眺め始める。
「な、何でしょうか・・・・・・?」
ハハハ・・・と力なく苦笑いする俺。宮谷との顔の距離、約10?。あまりに端整な顔立ちで直視できず、思わず目を背けたくなるが、宮谷の大きな瞳で見つめられると何故だか視線を逸らすことができない。
互いの吐息が当たるほどの近距離で、俺が先ほどとは別の意味で困惑していると。
「アイタタタタタタ!!」
宮谷に右頬を抓られた。
あにふんだ、とマヌケた声を出して俺は宮谷の手を乱暴に払う。それに一瞬反応した宮谷は小動物のようで、先ほどまでの覇気は完全に失われていた。
「あ、あなた、どうして気を失ってないの?」
「どうして俺が気を失わなければならないんだ?」
立ち上がって不思議そうな表情で眺めてくる宮谷に、俺は頬をさすりながら答える。
しかし放心状態から数秒して、宮谷の表情が一変した。目を大きく見開くと、再び腰から拳銃を取り出す。
「おわっ!」
「動かないで」
宮谷は俺の額に銃口を押しつける。先ほどの抜けた表情とは打って

変わって、鋭い表情を晒しながら凛と言う。
「どういう理由なのか知らないけど、コードに纏わる情報の漏洩を防ぐことがＩＣＤＡの最優先事項」
悪いけど、と宮谷は短く挟む。
「死んで貰うわ」
「え、は！？ちょっ、ちょっと・・・・・・！」
鈍く輝く銃口が目の前に。
その拳銃を掴む宮谷の腕からは震えのような、とにかく殺すことに対する抵抗と呼べるような色は一切伺えなかった。
さて、彼女は一体何をしているのだろう。
彼女が大杉を殺した。その事は確かだ。大杉は荒瀬を殺すことに躊躇いのような素振りは一切見せなかったし、宮谷が殺してでも大杉を止めようとしたことは、納得は出来なくても、まだ理解は出来る。
だが、俺が一体何をした。
荒瀬を助けようとした。大杉に向かった宮谷の身を案じた。
この状況下で、少なからず賞賛されるべき行動をしていたではないか。
それに対する対価が、死？
理不尽を通り越して、最早失笑しか無かった。
俺の視界の先で、宮谷の引き金に乗った人差し指に力が入る。
「なんなんだよ・・・・・ホントに撃つ気かよ・・・・・・」
何故こんなことになったのか。ただの日常から、いきなりワケの分からない非日常に巻き込まれて。
俺は両目を瞑ることさえ出来ない。そしてあまりに唐突な、静かな死への覚悟も出来ぬまま――――。

スチャッ、と。

「――――？」
宮谷は銃を降ろし、俺に背を向けた。

――――その際に、俺に送られる哀れむような視線。

「――――」

何か言いたそうな、けど躊躇うような雰囲気を滲ませ、宮谷は数秒ほど俺に背を向けたまま立ち止まっていた。

そして小さなため息をきっかけに、そのまま早足で歩き出す。

「お、おい」

恐怖で震える声で、何故か俺は宮谷を呼び止めようとする。

本当に死を免れたのか、まだ彼女は俺を殺す気なのではないのか。

そういった疑問が全身を絡め取り、俺は震えることしか出来ないのに。呼び止めてしまったからには、俺の身に降りかかる危険も増す。

願わくば彼女が俺の呼び止めを無視してくれれば。

という期待を裏切り。

宮谷は足を止めると、少しだけこちらを振り向く。それだけで俺はビクッと体を震わせる。

「命拾いしたわね。死にたくなかったら、後で私の所に来なさい。話があるの」

「は！？話って……」

宮谷が俺に背を向け歩き始めたと同時に、ベランダで倒れていた生徒達が一斉に意識を取り戻した。校舎の中を見ると、荒瀬の周辺の生徒も同じく。皆この場に混乱した様子で周囲を見渡している。

俺は再び視線を前方へ戻す。

しかし、そこに宮谷の後ろ姿は無かった。

遠くでは救急船のサイレン音が鳴り響き、後ろを振り向くと教師達が騒ぎながらこちらに走ってきていた。

イレイサー（後書き）

第1章、『Fの出会い』編、完結です。次から物語が本格的に動き出します。
ランキングの方登録しました。気に入って頂けましたら、投票の方宜しくお願いします。←

会いに来い（前書き）

タイトル『Fの軌跡』通り、こっから内容を掘り下げていきます。

会いに来い

―第２章―

1

その日、予定されていた時刻よりも大幅に早く放課後が到来した。
それはそうだ。学校のど真ん中で、あんな事件が起きてしまったのだから。今日は生徒を家に帰し、以後３日間を休みにする。これが、事件でショックを受けた生徒達への学校側からの措置だった。
その後駆けつけた救急隊員によって荒瀬は病院へと搬送された。救急船内からの連絡では、衰弱してはいるが命に別状は無く、切り取られた右腕と左足もくっつくとのことだった。
そして今は早すぎる放課後。太陽はまだ大地を神々と照らしている。普段ならば午後の授業の時間帯なのだ。保健室で背中の傷を手当してもらい、体中に付着した荒瀬の血を落としてから予備のシャツに着替えた俺は、学校の正門前で壁に背を着いて呆然と空を見上げている。学校側からはすぐに家へ帰るよう指示が出ており、事件発生後１時間以内に全生徒が学校外に追い出されたが、今は呑気に寮などに戻っている場合ではない。
俺はまず混乱する頭を押さえて、それから現在の混乱要素を全て脳裏に書き出す。
混乱要素その１。大杉。超人的な力を与える、モールドの恩恵をあまり受けられない彼が、どうやって高適合者の荒瀬に勝る結果となったか。
混乱要素その２。大杉。あの変わり果てた、真っ黒の獣のような姿はなんなのか。
混乱要素その３。宮谷。大杉に同じく学年屈指の低適合者である。そんな少女が何故あんな異様じみた力を発揮したのか。

混乱要素その４。複数回に渡って発生した、あの謎の圧力。鋭利な破片の雨から生徒を守り、最後は大杉を地面に押さえつけた、あの力。あれは一体何なのか。

混乱要素その５。宮谷。人を殺しちゃったよ。

混乱要素その６。大杉と宮谷。二人の言葉に含まれていた、『青』、『イレイサー』、『コード』、『緑』、『ＩＣＤＡ』。これらの謎の単語が指す物とは？

そして、混乱要素その７。

俺を除くその場にいた全ての人物が、記憶を書き換えられている。彼らは今日の事件を、全て学校に侵入した通り魔の仕業と思っている。その通り魔は『荒瀬と大杉を襲い、ご丁寧に校舎の窓ガラスを全て割って桜の木を切り倒し、小型爆弾で大量のクレーターを造ってから逃走した』そうで。もし本当に存在するなら、何とも意味不明な殺人鬼ではあるが。

それに加え、ベランダで真実を目撃していない生徒と教師の記憶まで書き換えられ、全員がそのことを納得しているのだ。

そして、どうして俺だけ記憶が書き換えられていないのか。

これまでの話から推測すると、恐らく宮谷はあの『イレイサー』と呼ばれた、ボールペン状の物体を使用して他者の記憶を改竄していた。だが彼女は俺が意識を失わない、つまり『イレイサー』の影響を受けていないことを大層驚いていたのだ。それはつまるところ、俺という人間が彼女にとって想定外だったということになる。俺の記憶が書き換えられていないのは、宮谷の意志では断じて無いのだ。

「どうしたもんかな・・・・・」

分からないことだらけで今にも頭がパンクしそうだったが、この場でこれ以上思考を巡らせても、良い結果はあまり期待できそうに無い。太陽からの恩恵を存分に受け、俺は背伸びをする。そして。

「アイタタタタタタ！！！」

背中に鋭い痛みが走り、俺はその場にうずくまる。浅いとはいえ、一応傷と呼べる傷を作っていたことを完全に忘れていた。

うずくまった際に保健室で巻かれた包帯が傷口からズレた感触を感じつつも、俺はその場にゆっくりと起き上がってから次の行動を考える。といっても、何をするかは決まっていたが。

「宮谷はどこに行ったか」

俺は自分の周囲を見回す。が、俺の周囲には人一人いなかった。俺は当然、宮谷を捜している。別れ際、死にたくなければ会いに来い、と宮谷が言っていたのを思い出したのだ。とは言っても。

「どうやって会いに行けばいいのだろうか」

俺はつい数時間前まで、宮谷という存在を全く気にしていなかった。知っていたのは、宮谷茜という名前と、彼女が一学年の最低適合者であるということだけ。しかもその記憶すら、脳の奥深くに沈んでいたのだ。だから当然、彼女の自宅はおろか、帰り道さえ知らないのである。

大体会いに来いって、俺に用があるなら自分で来いよな、と少女への不平を鳴らしつつも、何とか宮谷と接触するための手段を考える。まず一つ目は、学校の事務室に行き、宮谷茜の自宅の電話番号を聞くという方法がある。

「けどな・・・・・」

俺は正門の隙間から校舎の中を覗く。中庭辺りでいつの間にか集まってきた警察数十名が、鑑識やら何やら忙しく動いていた。学校の事務員も偽りの事件の後処理に追われているのだ。自宅に帰れ、の指示も相まって、まず俺の要求など聞かないに違いない。ならいっそのこと、学校のシステムをハッキングして、宮谷茜の個人情報を盗みだすか、とも考えたが、第一俺はそんな高度な技術を持ち合わせていない。その上仮に成功したとしても、すぐに目の前の方々のお世話になるのは目に見えていた。

二つ目は、このまま会いに行かず宮谷を待つ、という方法だ。これならば確実に宮谷に会えるし、わざわざこちらから出向く手間も省ける。そして、俺の命も確実に奪われる――。

「本末転倒じゃないか！」

自分で自分にツッコミを入れる。何故俺は、観客ゼロの中で一人コントをしているのだか。
しばらく考えてもいい方法は浮かばず、俺はある覚悟を決める。
「こうなったら・・・・・・」
右手に持った学校指定鞄から、俺は携帯電話を取り出す。約５０名がアドレス帳登録されたこのケータイで、宮谷茜に行き着くまでメールアドレスを聞いて行くのだ。
理想としては、５０名の中で一年生女子のメアドを持ってそうな人↓一年生女子↓一年生の女子で宮谷茜の友達↓宮谷茜といった感じだが、これはあくまで理想。完全に運任せなのだから、実際に実行すれば聞く人数は十人を超えるだろう。最初の人物はともかく２人目以降は当然、見ず知らずの人に他人のメアドを譲渡するのを嫌がるはず。その点については、『宮谷茜に告白したいから、教えてください』とでも書けば大丈夫だろう。俺の平凡な学校生活を引き替えに。恋人禁止令を破った罰として、ほぼ間違いなく野生児達から制裁が下される。
俺はこの覚悟が薄れない内に、自らのケータイを開く、と。
「あれ？」
俺の携帯に、差出人不明のメールが一通届いていた。送られてきた時刻は今から１時間程前。
俺は迷わずそのメールを開く。
メールの内容は、以下のようなものだった。
『宮谷です。３時半までに、第２５管区エリア１の駅のホーム前に集合。１秒でも遅刻した場合は処刑』
宮谷が示す場所までは、公共の飛行船を利用すれば３時間はかかるほど距離が開いていた。
俺は左腕のデジタル時計を見る。現在時刻は２時５分を回ったところだった。約束の時間まで１時間半もない。
これは。
「死ぬかもしれないなぁ・・・・・・」

そう悟ったように呟いた俺は、次の瞬間全力で駆け出していた。

会いに来い（後書き）

ランキングの方、宜しければクリックお願いします←

会いに来た

2

そして経つこと約８０分。俺は必死に第２５管区エリア１の駅内を走っていた。時計を見ると、現在時刻は３時２９分１３秒。約束の時間まで残り１分を切っていた。

「うあぁあ！！どいてどいて！」

混み合う人を避けるようにしながら俺は走る。

人とぶつかりそうになっては避け、逆流に押されまいと必死に抗う。不特定多数の他者に睨まれるが、そんなもの気にしている場合ではない。

モールドが登場した際、世界中の地名が一斉に廃止され、代わりに各国に１から１９８までのナンバーが割り振られた。日本のナンバーは１５だ。ただ、１５年が経った今でも、ナンバー１５と呼ぶ人はあまりいない。俺もそうだが、大抵の人は普通に日本と呼んでいる。

さらに日本では北から南まですべての土地が、３８個の管区に再分割され、それぞれの管区では平均４２個のエリアにさらに細かく分割されている。

例えば、俺の学校は第２１管区のエリア１２から１３にまたがって存在している。俺と哲平がいた寮は、同じ２１管区のエリア３２だ。第２０管区から２５管区までは、昔は関東地方と呼ばれており、今では日本でもっとも経済活動が活発な場所となっている。

また、エリアの数字が若い方が、より都会的であると言ってもよい。例え第２０管区から２５管区の中であっても、一番数字がデカいエリアに行くと視界に入るのは荒れた山だけで、民家なんてものは一切見あたらない。

逆にエリア１などの都会では、人目につかない場所が存在しないほ

ど、日中の人口密度が高い。
つまり日中まっただ中の今、第２５管区のエリア１にいる俺は、日本で一番混雑した場所に立っていることになる。
「うぉおおおおおおおお！！！」
俺の目指す方向とは正反対の方角に流れる人混みに捕まり、俺は危うくエリア２行きの飛行船に乗ってしまいそうになった。全員が俺よりも適合率が高いワケで、当然適合率が０％の俺がその流れを押し戻せるハズがなく、あらん限りの力で横に脱出する。
モールドの登場から５年後を機に、交通面での技術が大幅に向上し、それからさらに１０年経った今となっては、全てのエリアに公共の飛行船が通っている。とくにエリア１では、２０秒置きに新しい飛行船が来たりもする。しかし、俺は約束の時間に間に合わないとのことから、専用空路を持つタクシーを利用してここまで来たのだ。そのおかげで月の食費の半分を失うことになったが、自分の命には代えられない。
低い態勢で人混みをかき分け、なんとか駅のホームに出ることができた。荒く息をしながら、時計で現在時刻を確認する。
３時２９分４８秒。約束の時間まで残り１２秒。
良かった、間に合った。俺は思わず安堵のため息を漏らす。
そして時計から視線を目の前に戻すと。ニッコリ笑顔の宮谷が、目の前にいた。
「うひゃあ！」
情けない声と共に尻餅をつく。俺と宮谷の周りでは、スーツ姿の人々が忙しく行き交っており、俺たちの様子を気にする者はいない。
「どうしたんですか？変な声だして」
宮谷は昼間と同じく制服姿だった。纏め上げられていたポニーテール状は解かれ、美しい黒髪は肩の下辺りまで垂れ下がっていた。満面の笑顔を見せる宮谷は、右腕につけられたピンク色の腕時計を確認する。
「ずいぶんとギリギリですね。何処かで道草でも食ってたんですか

？」

んなワケねーだろ、と立ち上がる。俺はようやく落ち着くと、宮谷にはっきりと言った。

「ていうか、そのクラスの女子と話すときの猫被った話し方止めろって」

なんか鳥肌が立つ、と口で言ったら殺されそうだったので、心の中で呟く。俺の言葉に対して、宮谷は直視できないほどの満面の笑顔で答える。

「え～、猫被ってるって、どういうことですか～？私はいつもこんな感じですよ？」

「・・・・・そっすか」

どうやらコイツはいつも表面では、この優しいお嬢様キャラで押し通しているようだ。しかし裏では、記憶を書き換える装置を使って、今日のようなことをしているのかもしれない。

今日のようなこと――。

とそこで俺は今日の出来事を思い出すと、酷く寒気を感じた。慌てて話題を変える。

「で、でさ、話って何だよ？」

諦めモード発動の俺は、目を背けて頭を掻きながら、ニコニコの宮谷に聞く。そんな俺に対して宮谷はいきなり俺の右手を掴むと、俺をひっぱりだした。

「まあまあそう焦らず、恭司君。それじゃ、行きましょうか！」

「はい？何処へ？」

一拍置いて、笑顔の宮谷は言う。

「ひ・み・つ♪です！」

ピキッと。

世界が割れる音がして。

どうしてだろう。こんな可愛い女の子に手を引っ張られて急かされるなんて夢みたいな出来事が起きてるのに、鳥肌が収まらないや。

固まったままの俺は、笑顔の宮谷に引きずられながら駅のホームを

出た。

会いに来た（後書き）

気に入って頂けましたら、ランキングの方宜しくお願いします。←

Ｄａｔｅ　ｏｒ　Ｄｅａｄ　？　～デートか死か～（前書き）

話の構造上、本日は２本更新します。２本目は番外編となります。
更新は夜８時頃を予定しております。お時間よろしければ是非ご覧下さい。シリーズを通して、最重要キャラである２人が登場します。

Ｄａｔｅ　ｏｒ　Ｄｅａｄ　？　～デートか死か～

３

しばらく都会の街を歩いていると、少なからず俺が注目を浴びているのが分かる。時刻は現在４時前後。この時間帯になれば、下校時刻が早い学校の生徒はちらほらとその姿を街の中に見せ、高層ビルが立ち並ぶ景色の下にいる街の人々の服も、スーツ一色からカジュアルな物に変化しつつあった。

よって俺や宮谷のような高校生がいても大して目立たないはずなのだが。

街ゆく男子学生共には恨みと羨望の眼差しで見られ、通りかかった女子高生達からは憧れのような視線を頂戴する。原因は、俺の右手に笑顔でしがみついている宮谷だった。眩い笑顔で楽しそうに鼻歌を歌っている。端から見れば、ちょうど二人で仲良く並んで歩くバカップルだった。しかも片方は黒髪の超絶美少女で、片やそのお相手はイケメンでもブサイクでも無い普通の高校男児である。注目を浴びるのも仕方がなかった。

俺はため息をつきながら、右腕にしがみついて離さない宮谷に言う。

「おい、３回目だ。俺から離れてくれ。傍を歩くなとは言わない。頼むから俺の手を解放してくれ」

腕が壊死するから、と小さな声で付け足す。俺の右腕は３０分近く笑顔の宮谷にぎゅーっと握られ、崩壊を来そうとしていた。握力が尋常じゃない。一体この華奢な体の何処からそんな力が生まれるのか、不思議でならなかった。

右隣から３回目の同じ返事が返ってくる。

「え～、いいじゃないですか。私達、恋人なんですよ？昨晩はあんなに私を押し倒したクセに」

近くでコーヒーを飲んでいた４０代独身と思われるオジさんが、宮

谷の言葉を聞くや否や盛大に吹き出した。俺は頭の中で、３回目の同じツッコミを入れる。
俺たちいつから付き合ってるんですか。後宮谷を押し倒した記憶は神に誓って微塵も無い。
「４回目だ。腕を解放してくれ」
俺の言葉を聞いた宮谷は瞳をウルウルとさせ、俺に上目遣いで話しかけてくる。
「恭司君、わたしのこと・・・・・嫌いですか？」
「現時点ではね」
いくら絶世の美少女だとしても、宮谷が人一人を殺していることは紛れもない事実。超現実主義者かつ合理主義者の俺が、血で汚れた笑顔を見せる美少女と一緒に町中を歩きたいとでも思っているのだろうか。
そんな俺の言葉を無視するかの如く、宮谷はいきなり自分の右を見ると、あ～！と可愛らしい声を上げた。
「クレープです！恭司君、クレープ屋ですよ！」
宮谷が右で停船しているクレープ屋を指差し、興奮している。
「そうだね」
俺は適当に答える。というか、腕の痛みでそれどころではない。
「私、実は甘い物大好きなんですよ」
「そうだったのか」
「私、食べたいですよ」
「買えばいいじゃないか」
「恭司君。彼氏として奢ってください」
「色々ツッコミたいところだけど、敢えて嫌だと言っておく」
ゴキッ。
「是非とも私目に奢らせてください」
「わー、ありがとうございます、恭司君！」
たかだか数百円の出費で右腕の命を救えるのならば安いものだ、と内心で俺。

宮谷は俺の右腕を解放すると、綺麗な黒髪を揺らしながらクレープ屋へ駆けていき、前屈みになってサンプル品を眺める。俺は少し遅れて、なるべく宮谷から距離を取ってクレープ屋に着いた。

「ここのメニュー、全部ください」

笑顔の宮谷から、恐怖を具現化したかのような言葉が発せられる。

俺は思わずメニューのカバーガラスに頭をぶつけた。かしこまりました、少々お待ちください、と宮谷の言葉に対して律儀に応答した店員は、船内の奥の方へ駆けていくと、クレープの作成準備に取りかかる。

「ちょちょちょい、待ち！おい、宮谷！お前ここの店のクレープ何種類あると思ってるんだ！」

慌てて宮谷に駆け寄り、店のメニューを横から一瞥してから俺は文句を言った。

ゴキゴキッ。

何処の部位の骨かは、お察しください。

「たったこれだけの注文でいいのかい？」

「はい、恭司君の気持ちでもうお腹いっぱいです！」

だったら頼むなよ、と右腕を押さえながら俺。クレープの生地を焼く音が船内から聞こえる。もう後にひけない俺は、今月最後のバイト代とのお別れの準備をする。俺が自分のケータイを取り出し、支払い用のボタンを押してアプリを起動していると、その様子を見ていたようである宮谷が話しかけてきた。

「ずいぶん警戒してるわね、私のこと」

「……！」

化けの皮が剥がれた、宮谷本来の大人びた口調だ。横目で様子を伺うと、先ほどの笑顔は消え、何処か寂しそうな表情で俺を見ている。

「べっつに。警戒してなんか……」

「嘘。一見自然な風に振る舞ってるけど」

「……」

宮谷が俺の顔をのぞき込んでくる。俺は声が届く範囲に人がいない

ことを確認してから、顔を宮谷から背けたままなるべく小さな声で返す。
「まあな。何せ殺人者が自分のすぐ横にいるんだ、警戒しないほうがおかしいだろ？」
「まあ、そういうものかしらね」
淡々とした声が返ってくる。でもね、と短く区切ってから宮谷は続けた。
「ＩＣＤＡに着くまでの道程が支倉恭司の最後の日常だから、今くらいは警戒しないで楽しみなさい。別にこんな一般人の往来が多い場所で、あなたをどうこうするつもりは全く無いから」
そう宮谷が言い終わると、お待たせしました～、と店員が巨大な袋に詰めたクレープの山を運んできた。さすが最新鋭のクレープ作成機だから早いな、と密かに感心しながら、俺がケータイを支払いのパネルに触れさせようとする。しかし、どういう風の吹き回しか、宮谷は俺の手を制すると、自らのポケットから黒一色のシンプルなケータイを取り出す。
「やっぱり今日は私が払います。恭司君」
再び華奢な少女に戻った宮谷は、俺に眩い笑顔を見せると、ケータイをピッ、とパネルに触れさせる。お支払いが完了しました、とパネルから文字が浮かび上がった後、店員からクレープを受け取った。その際に見えた残り残高の０の数は見なかったことにする。
店員のありがとうございました～、という律儀な挨拶を受けながら、俺の方を振り向くと、袋からクレープを２個取り出して俺に投げてきた。
「おっ？」
キャッチしたクレープ２個を見てみると、それらはこの店で一番高価なヤツだった。
「食べなさい。支倉恭司の最後の晩餐よ。夜じゃないけどね」
そう言って、宮谷はそそくさと俺の前を通り過ぎていく。俺は慌ててその後を追いかけた。

彼女との会話で、俺達の向かっている場所がＩＣＤＡだということが分かった。またそこに行ったら最後、俺は今までの日常を失うことも、良く理解していた。最悪死ぬことも。
これまでの日常を壊したくないなら、彼女に付いて行かなければいい。今すぐにでも回れ右して、全力で逃げ出せばいい。宮谷に命を狙われることになっても、警察に頼んで保護してもらえばいい。
昨日までの俺だったら、わざわざ自ら危険な場所に飛び込むなどしない。
しかし、今の俺は違う。
知ってしまったのだ。非日常を。忘れられなかったのだ。非日常を。この時点で、俺は心身共に非日常に染められた気がした。そして、その非日常から抜け出すことを諦めた。
今までは、日常を生きるために諦めてきた。今は、日常を生きることを諦めた。
そんな矛盾を意識下から砕くように、俺は宮谷を追いかけながらクレープにかぶりつく。

Ｄａｔｅ　ｏｒ　Ｄｅａｄ　？　～デートか死か～（後書き）

ランキングサイトに登録しました。気に入って頂けましたら、是非これからも応援をお願い致します。←

番外編1 ~Another View~（前書き）

こちらは番外編の扱いとなりますが、ここで登場するキャラクターは今後本編でも重要な存在となります。

番外編1 ~Another View~

「お、お！よっしゃーーー！やっっっとアイツラくっついたな！これでフェーズ1のノルマは達成っと」
「ひっぐひぐ。あぶないよ～クロくん。早くおりよ～よ～。あとこれ、私の望遠鏡だよ～。ひっぐ、自分の使ってよ～」
「あーうっせーな！泣くなよな、シロ！俺達『ボス』から所持物は共有するよう言われてんだろ！」
「シロこわいよ～。ひっぐ、クロくん～」
「だーーーー！うっさい！」

心地よい春風を全身で味わう。これは、地上にいる者だけの特権だ。この少年少女、『クロ』と『シロ』と呼ばれる二人の子供に、その暖かな風というものは存在しない。
今クロとシロがいる場所、それは高さ３３３Ｍを誇る、かつては日本で一番高かったタワー、その先端部だ。
このタワーが建設されてから1世紀近く。かつては東京と呼ばれていた日本の首都には、今では５００Ｍを悠に超えるビルが幾つも建っている。自身の象徴を否定された東京タワーは完全に過去の遺産となり、その姿は哀れなほどに寂れていた。最早ただの巨大な鉄の塊と化したこのタワーでは、来月にも取り壊し作業が開始される。
３００Ｍ上空からの景色というものは、時に人を竦み上がらせる。もし仮に落ちれば、例え高適合者でも即死。
遙か下方を運行する巡回船が米の粒ほどの大きさに見え、それが死に瀕している状況であることをより一層強調する。
ましてや、ここは寂れたタワーの天辺。春風とは思えないほど冷気を帯びた寒風が頬を撫で、振動一つで命綱である鉄筋が大きく揺れるとくれば、高さに耐性のある大人でも、生唾を飲まざるを得ないだろう。

だが、３３３M上空からいつ転落してもおかしくない、この状況に立たされた二人の子供の行動からは、恐怖といった感情が全く感じ取れない。

少なくとも、片方を除いては。

「うえええええええん！クロく～ん！早くおりよ～よ～！高いのこわいよ～！」

切な声で泣き叫ぶのは、小柄な体に不釣り合いな程大きい、真っ白なロングコートを羽織った『シロ』と呼ばれる少女だ。無理矢理大人用の服を着ました、と言わんばかりに、コートの中にすっぽり埋まっているが、姿形は小学校低学年の少女そのもの。

年相応に美しい純白の髪は、ツインテールに仕立てられている。普段は物大人しい彼女の精一杯のチャームポイントとなっていた髪型も、今では死際のウサギ耳の如く垂れ下がっていた。

身に纏った純白色のコートと比較し得るほどに、色素の薄い肌の持ち主だが、タワー天辺の鉄筋にしがみついている今は、白く滑らかな頬を紅色に染めて、大粒の涙を流している。

「だーーーーもう！だからうっさい、シロ！少しは黙ってろ！」

そう泣きわめく少女の隣りで、片手で鉄筋にしがみつき、片手で望遠鏡を覗きながら罵声を上げるのは、これまた小柄な『クロ』と呼ばれる黒髪ショートカットの少年だ。

同じく見てくれは、そこらの小学校低学年のやんちゃ少年と変わりない。こちらはシロと呼ばれる少女とは対照的に、漆黒のロングコートを身に纏っており、襟から覗くその顔は、実に健康的な小麦色をしている。

少年の罵声にビクッと大きく肩を振るわせた少女はしかし、嗚咽は漏らすものの、泣き止みはした。しばらくの沈黙を挟んでから、ゆっくりとしゃべり出す。

「クロくん、もういいよね？『恭司』お兄ちゃんと、茜お姉ちゃ…

…じゃなくて、『志穂』お姉ちゃんをくっつけろ、ていうノルマは達成できたんだよね？『大杉』っていう太ったお兄ちゃんに『青』を渡して、正解だったんだよね？恭司お兄ちゃんと、志穂お姉ちゃんのくっついた確認も、今できたんだよね？なら、早くおりよ？」

少女の精一杯な虚勢に対し、クロと呼ばれる少年は短く唸る。

「いや、こっちの件はいいんだけどよー。まだ『青』の配布、１００人に到達してないじゃん？これくらいの高さなら、ターゲットになりそうな連中、そうだな～、ビルから投身自殺しようとしてるヤツとか、見つけやすそうじゃん」

「私はいいもん。もう５００人配り終えたもん。後１００人は全員クロくんのノルマだよ」

だー、うっさいうっさい！と少女に罵声を掛けながら、クロと呼ばれる少年は足を鉄筋に巻き付けぶら下がり、すぐ真下の鉄筋に両手両足で必死でしがみついている少女の頭をグリグリする。

「わーーー！痛い痛い！クロくんごめん！分かったよぅ～！後１００人はシロも手伝うよぅ～！だからグリグリやめてよぅー」

ふん、と鼻を鳴らした少年は両手を少女の頭から離すと、足だけでぶら下がったまま目を閉じて腕組みをする。どうやら彼にしてみれば、怒ったという意味らしいが。

その時、一際大きな風が吹く。それに共鳴するかのように鉄筋が揺れ、振り子運動を開始した。

「きゃあああああああああ！」

「ぎゃあああああああああ！！！！止めてくれーーーー！死ぬーーー！」

子羊の如く震える少女の発した悲鳴を掻き消したのは、やんちゃ少年の絶叫だった。揺れる鉄筋から振り落とされないよう、クロは足でしがみつきながら叫び続ける。

「やっぱり～！クロくんも怖いんだね～！うえええええええん！」

「うりさあああああああああい！！別にこわかあああああねえええええええええ！」

大粒の涙と、伸びる鼻水をまき散らしながら振り回される少年の言葉にはしかし、説得力というものが欠片も感じられない。
彼らにしてみれば恐らく生きた心地がしなかったであろう数秒が経過した後、ようやく風が緩やかなものとなる。
少年は涙と鼻水を垂れ流し、少女はさらにきつく鉄筋にしがみつき、ぶるぶる震えている。
「は、ははは。楽しいアトラクションだったぜぃ」
「説得力の欠片もないよぅ、クロくん」
「何だと～!?シロ!」
「後、涙と鼻水でパウダーも落ちちゃってるよぅ～」
「――――は!」
少女の指摘を受けた少年は慌てて自身の頬に触れる。
そこにたっぷりと塗られていたはずの小麦色パウダーは綺麗に流れ落ちており、代わりに少女と同じ真っ白な素肌を外界に晒している事実を認識した彼は、今までにないほど慌てた姿を見せた。
「うんぎゃあああああ!!シロ!早く早く!早く俺様スペシャルパウダーを!」
「誰も見てないのにぃ。だってクロくんと私、双子みたいなものだよね。茶色のパウダーなんか塗らないで、普通に素肌晒してもいいと思うんだけどなぁ。
私、クロくんの雪みたいにきれーな肌、好きだよ?」
「『クロ』って名前で、肌が真っ白だったら、俺様の格好がつかないだろおおおおおお!!」
早く早く!と喚く少年に対し、少女は恐る恐るポケットに手を伸ばそうとする。片手両足だけで鉄筋にしがみつくのは、どうも少女には心許ないようだ。
そして再び、恐怖の寒風。
再びの振り子運動。
「ぎゃあああああああぁぁぁぁぁ!しろおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」

「くーーーーろーーーーくーーーーーーん！」

大きく揺れた鉄筋から振り落とされた少年は、叫びも虚しく、大粒の涙を空中に残しながら大地に吸い込まれていった。

「うえええええええん！クロくーーーん！置いてかないでよおおおおおお～！」

少女の叫びも、虚しいものとなった。

ＩＣＤＡ（１）

４

驚くべきは、宮谷のその食欲だ。クレープ屋から目的地に到着するまでのおよそ１時間で、２０個はあったであろう大小のクレープを全て平らげたのだ。俺には宮谷の異様な力よりも、どうしてこれだけ食た上で、この抜群のスタイルを維持できるかが不思議でならなかった。

目的地、ＩＣＤＡまでの道中、俺たち二人は相当道草を食った。ゲームセンターがあれば迷わず寄るし、本屋があれば少し立ち読みをする。俺に気を遣っていたのだろうか。

そして、最終的に俺たちの足が止まったのは、一つの円柱の形をした超高層ビルの目の前だった。１フロア辺り、半径２００Ｍはあるだろうか。それが２５０個以上は重なっている。最新のフロートシステムを使用したエレベータ数十個が、その超巨大ビルの窓側を囲むように配置され、滑るように上下運動を繰り返す。

「あれ？このビルって・・・・・・」

ビルの手前に掲げてある会社名に視線を送る。アルファベットでＢＡＲＩＮＧと書かれいる。ベアリング、だろうか。確か、日本から発足した世界的な総合家電ブランドだったと思われる。

「こ、ここが、ＩＣＤＡ？」

もしそうであるならば、俺の立てた仮説は大きな間違いということになる。まさか、家電を専門としている会社が超人薬の作成に力を入れているはずもあるまい。

そして、この少女は本当に一体何者なのだろうか。

「入るわよ」

そう短く言った宮谷の後を追いかけるように、俺は付いていく。日本最大級の超大手会社だ。当然適合率０％の俺が、このような場所

に足を踏み入れた事はない。多少の緊張を伴いながら、俺は宮谷と共に巨大なエントランス口に入る。
ビルの第1フロアに入ると、俺の視界の先ではまるで超高級ホテルのような、広大なロビーが広がっていた。そのロビーを囲むように多数のエレベータが配置されており、ロビーの中心では広さに見合わない小さな受付台が配置され、笑顔の美人お姉さん二人が座っている。足下は大理石、上を見上げれば、遥上に1フロアの天井が存在した。
大抵はこういった場所こそ物静かで閑散としているものだが、1フロアのロビーでは人が激しく出入りしている。その9割がスーツ姿のサラリーマンで、皆ケータイを片手に誰かと通話しながら、腕の時計で時間を確認しつつ早歩きで移動していた。
宮谷はその流れに逆らうように、この場から一番遠いエレベータを目指して歩いていく。俺は慌てて追いかける。通り過ぎていくスーツ姿の男性達が、この場に見合わない格好の俺達に怪訝な視線を送る。思わず怖じ気づいた俺は、耐えかねて宮谷に小声で聞いた。
「なぁ、ベアリング社員の適合率の下限って、どれくらいだっけ？」
う～ん、とその場で唸った宮谷は、確か、と短く区切る。
「４９％だったハズよ」
「よんっ・・・・・・！」
驚きのあまり、大きな声を漏らす。怪訝な視線が、一層俺達に集中してきた。
４９％といえば、５０％と能力的には大差ない。適合率が５０％を超えている人数は全人口の５％程だったのを思い出す。
因みに世界最高適合者は、ナンバー８、過去ではイギリスと呼ばれていた国にいる青年で、無く子も黙る６１％だったはずだ。
じゃあ、と短く俺は区切って、前を歩く宮谷に聞く。
「ここにいる人達って、ほぼ全員適合率５０％以上の人？」
「そういうことになるわね」
俺達に集まるこの視線が、全て適合率５０％以上の人から。小猫が

ライオンの飼育場に放り投げられたようなものだ。
世界のトップ集団の前に、適合率０％という俺の抱える最大のコンプレックスが否応なく浮かび上がる。
俺と宮谷は、一番奥に存在するエレベータにたどり着くと、上階から本体が降りてくるのを待つ。
ドア上の液晶パネルは、現在エレベータが最上フロアである２７８フロアに存在して、こちらめがけて降りてきているという情報を示している。
俺は再び宮谷に聞く。
「なぁ、本当にこの場所でいいのか？なんか、低適合者の俺たちとは全く無縁そうな場所だし」
「低適合者？」
宮谷が不思議そうに聞く。
「ああ、確か私、学校では２１％ってことになってたわね」
「えっ、じゃあ実際は違うのか？」
モールドが浸透した現代では、産まれてくると同時にこの液状薬品の摂取を受ける。そして、摂取を受けた後、専用の機械を通して適合率を測定され、出てきた数字は国のデータベースに個人情報として登録される。入社の際は当然、高校に入学する際も国のデータベースからその情報を引き取ってくるのだ。国の管理するコンピュータにハックを掛けるという最難関の道を乗り越えて、ようやく情報の改竄ができるワケだが、今まで成功した輩はいない。つまり、学校側に提示される個人情報が偽物というのはあり得ないはずなのだが。
不思議そうな顔をする俺を、横からまじまじと眺めた宮谷は、まるで俺の心を見透かしたようなことを言う。
「さては、国が提示する情報が間違っているはず無いから、私が適合率を偽造するなんて不可能だ、なんて思ってる？」
「ま、まあな」
内心を完全に見透かされた俺は、少しだけ動揺する。

宮谷はエレベータ上部のパネルに視線を送る。周りは騒音だらけで、よほど近くにでも来ない限り、俺たちの会話が聞かれる心配はない。
「じゃあ逆に聞くけど、その国から学校に提示される個人情報が正しいっていう保証はどこから？」
「い、いや、それは国の言うことだし……」
「そこよ。そこなのよ」
いつの間にか俺の顔をのぞき込んでいた宮谷が、真剣な表情で俺を見つめる。
「何も知らない一般人は、国が自分達に絶対の信頼を置いていると思っている。そして一般人は国を信頼している。それは大きな間違い」
顔を正面に戻して宮谷は続ける。
「実際この世界で、絶対なんてものが存在すると思う？そんなバカげた物は存在しないわ。教科書もメディアも何もかも、私達に提供される全ての情報に人の手が加えられている。例えば、人間の体に心臓があるのは当たり前ってなっているけど、アナタはそれを自分の目で確かめた？違うでしょう？もしかしたら、心臓が無いまま生きている人だって、この世の中にはいるかもしれない。他人を介さず自分の五感で物事を捉えなければ、それは必ず正しいとは言えないの」
つまり、と俺が区切る。
「世の中には絶対なんてものは存在しない。だから、国の情報が絶対に正しいとは言い切れない。そう言いたいんだな？」
俺の言葉に宮谷は振り向くと、黙って頷く。
「何も知らない一般人だったアナタに教えといてあげるわ。アナタが思っている以上に、この世界は黒く、深い闇で閉ざされている。上辺に住む一般人は提示される情報を鵜呑みにし、いつしか自ら真実を暴くことを諦めた。どんなことにも先達がいて、そこから自分に来る情報は必ず正しいと思いこんでいる。本当はその情報は違うかもしれない。でも彼らは疑わない。真実は闇の中へ放り込まれて、

それを知っているのはごく少数」

エレベータが到着した。中は全くの無人だった。そのエレベータに乗り込んでから、俺は正面の鏡に背を持たれる。宮谷はエレベータの入り口を向き、階のボタンを押さないまま、俺に背を向けた状態で立った。ドアが完全に閉まると、宮谷は続ける。

「そして、私たちが今から向かう場所は、おそらくこの地球上で最も深く、真っ暗な闇に閉ざされた場所。設立されて8年。一度も一般人の前に晒されたことのない、世界第一級のトップシークレットの組織」

1回区切って俺の方を向く。エレベータの入り口を背にする形になると、宮谷は笑顔を見せた。

「ようこそ、Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ｃｏｄｅ　Ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ&Ｄｅｌｅｔｅ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ、通称ＩＣＤＡへ。私たちＩＣＤＡは、この世界の真実を受け入れる覚悟と勇気があるのならば、アナタを歓迎するわ」

ＩＣＤＡ（２）（前書き）

ここからは世界観の解説と設定になります。

ＩＣＤＡ（２）

「ようこそ、Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ｃｏｄｅ　Ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ&Ｄｅｌｅｔｅ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ、通称ＩＣＤＡへ。私たちＩＣＤＡは、この世界の真実を受け入れる覚悟と勇気があるのならば、アナタを歓迎するわ」

宮谷は俺の方を見たまま、左手の掌を後ろのフロア表示のパネルに重ねた。そして、スカートのポケットから、昼間使用した、ボールペン状のイレイサーと呼ばれるピンク色の物体を取り出すと、パネルの方へ振り向き、今度はそれを押し当てる。

「生体番号、２３４６５２１。宮谷志穂」

そして宮谷は続けた。

「適合率、８７％」

「は、はちじゅう・・・・・！？おわっ！」

宮谷の言葉が発せられた直後、突如エレベータが動き出したのだ。感覚的には、上層フロアへと向かっているようだったが、パネルのフロア数表示は１フロアのままだった。

エレベータ内部の震え方からして、尋常な速度ではない。俺はエレベータ内の手摺りにしがみつき、ただ宮谷の背中だけに視線を集中して、こみ上げてくる恐怖をごまかす。

そして僅か数秒後には、エレベータは上昇運動を止めた。間抜けたチンッ、という音と共に、ドアが勢い良く開いていく。

「さっ、どうぞ降りて」

呆然としている俺に、宮谷はエレベータから降りるよう勧めてくる。

俺はようやく我に返ると、宮谷に恐る恐る質問をする。

「あの～、宮谷、茜さん？」
「？違うわよ、私の本名は宮谷志穂。宮谷茜は一般人と接する際の偽名」
へぇ～と、俺が納得する素振りを見せて、その後数秒の沈黙。
「・・・・・どうしたの？」
この謎の沈黙を疑問に思ったか、不思議そうな顔をする宮谷。
「あの、では宮谷志穂さん。アナタは、適合率が２１％では無く？」
コイツは何を聞いているのだろうか、といった表情の宮谷は、さも当たり前かのように言う。
「８７％だけど」
「何で！？」
次の瞬間、俺は激しくツッコミを入れていた。
「何で世界記録を超えちゃってるんだよ！いやまあ、これで昼間の超人的な力は納得できたけどさ！」
慌てふためく俺に対し、宮谷はため息をついてから呆れたように言う。
「支倉恭司、アナタは理解力が無さ過ぎるわよ。さっきも言ったでしょ、この世界の真実は闇に葬られてるって。一見華奢な少女が、実は謎の組織の謎の超人でした。それだけのことじゃない」
「そんな簡単に片付けていい問題！？」
普段は諦めのいい俺だったが、この件に関しては納得することが出来なかった。
そんな俺に対して、宮谷は軽く睨んでくる。
「それとも何？こんなささやかな真実を知った程度で、アナタはもう耐えられないの？ならこの程度の覚悟と勇気と見なして、私が直々にこの場で首を切り落としてあげてもいいけど」
「いやあ、適合率が８７％なんてすごい！僕はこれからどんな真実が待ち受けているのか、楽しみでタノシミデシカタナイナ」
語尾が少々おかしくなってしまった。冗談よ、と宮谷は小さく笑うと、俺にエレベータから降りるよう促した。俺は今度は素直に従う。

エレベータを降りると、そこには広々とした円状の、閑散とした空間が広がっていた。物体は一切存在せず、俺達以外に人はいない。俺達が使ったエレベータの入り口を除いて、周囲が全てガラス張りになっており、都会の広大な風景が伺える。足下は大理石で出来ており、歩く度に足音が響く。中央に太い柱が通っており、その周りがさらに8個のエレベータになっている。

「なぁ、宮谷。ここって第何フロア？」

「２４３フロア」

かつかつと足音を立てながら、宮谷は中央のエレベータに向かう。

俺は慌てて追いかけた。

俺の前を歩く宮谷が、無感情な声で俺に話しかけてくる。

「アナタにまず、ＩＣＤＡ本部の構造を教えるわ。面倒だから、質問は私が話し終えた後にお願いね」

「了解」

俺達はエレベータの前まで到着すると、宮谷はエレベータのパネルを2、6、4の順に押していく。俺達は今から、２６４フロアに向かうのだろうか。

ガゴンッという乾いた音がした後、フロートシステムの作動音が聞こえる。エレベータの到着を待ちながら、俺の右隣にいる宮谷は解説を始めた。

「この建物は、外から見ても分かるように円柱の形をしているわ。そしてこの建物の中心に、ＩＣＤＡの本部が存在するの」

ほら、と宮谷が左手の人差し指を上に向ける。

「この建物全体をトイレットペーパーに見立てると、トイレットペーパーのペーパー部分がベアリングという会社で、芯より内側がＩＣＤＡ本部になっているようなものね。当然ＩＣＤＡという組織を、一般人の目に付かないようにするためよ。ＩＣＤＡは、２フロアから、２７８フロアまであって、私達が今いるこの２４３フロアからでしか、ＩＣＤＡ本部に入ることは出来ない。いわば、このフロアがＩＣＤＡ本部の入り口のようなものね。そしてこの２４３フロア

にたどり着くためには、１階の一番奥のエレベータでＩＣＤＡの一員であることを証明しなくちゃいけない」
これを使ってね、と宮谷が俺に、先ほどのボールペン状の物体を見せる。
「これはイレイサーって言ってね、詳しい説明は後でゆっくりするけど、大まかな役割はＩＣＤＡの一員であることの証明と、秘密を知った人々の記憶の改竄で……」
「話が逸れてないか？今はＩＣＤＡ本部の構造説明だろ？」
そうだったわね、と俺の右足を踏みつけながら宮谷。今のだけで十分足の骨が折れた気がする。
「さっきも言った通り、ＩＣＤＡ本部は、このビルの２フロアから２７８フロアまで、合計２７７フロアあるわ。どのフロアも半径１００Ｍほどの円状になっていて、２～４フロア分を使った大きな場所も存在する。大まかに各フロアの説明をすると、２～１０フロアが収監場。主に、組織で重大な失態を犯した人や、コードに纏わる犯罪者を収監する場所よ」
俺もそこに収監されるのだろうか。
「１１～１００フロアが、コードに関する薬品などを研究する研究部の本拠地」
俺の仮説が多少掠ったようだ。コードが何なのか、未だに分からないが。
「１０１～２００フロアが、コードに関する事件を取り締まる実行部の本拠地。２０１～２４２フロアが、２００以下のフロアの統制と管理をする司令部の本拠地。上層フロアへの報告もここでしているわ。そして２４３フロアが……」
宮谷が大理石の床を指差す。俺はとりあえず頷く。
「で、２４４～２５０フロアまでが、組織やコードの秘密を知ってしまったなど、何かしらの罪を抱えた人を裁く、ＩＣＤＡの審問会会場とその待機室」
ここにも俺はお世話になるのだろう。

「そして２５１～２７０までが、実行部や研究部、司令部の高ポスト、またはＩＣＤＡの重要役員に与えられる特別待遇の個室。因みに私は実行部の高ポストよ、高ポスト」
何故にそこを強調する。
「ちょっといいか？大体構造は分かったんだけど、ＩＣＤＡ本部の周りで働いているベアリングの社員は、このＩＣＤＡの一員なのか？それとも彼らは全く関係無いのか？」
質問は後で、って言ったじゃない、と宮谷が口を尖らせる。
「ベアリングの社員とＩＣＤＡは全く無関係よ。私達ＩＣＤＡが、ベアリングの人々に隠れてこの建物を使わせてもらっているワケ。日本じゃトップクラスに大きいビルだし、何より交通の便がいいしね」
はい、と宮谷が手を叩く。同時に呼び寄せていたエレベータが到着し、俺達の目前のドアが開かれていく。
「何か質問は？」
「今の説明で逆に混乱要素が増えたから、質問したいことが多すぎて困るんだよ。まだＩＣＤＡがどんな組織なのかも分からないしな」
唸る俺に対し、質問は構造についてだけよ、と宮谷が言う。先ほどの指摘を根に持っているのだろうか。
「あのさ、これだけの規模の組織がビルの内部にあったら、絶対にベアリングの社員に気づかれるでしょ、普通。何でばれてないの？」
いい質問ね、と笑顔の宮谷。宮谷は自分の天井を指差す。
「知っての通り、このビルは２７８フロアということになっているわよね。でも実際は、２７９フロア存在するの」
「設計を間違えたのか？」
俺の言葉に、宮谷はバカね、と軽く笑う。
「当然、ＩＣＤＡをベアリングの社員から隠すためよ。私達がいるこの２４３フロア、つまり、ＩＣＤＡへの入り口専用のフロアを作るために、ビルを建てる段階でわざと一つフロアをズラしたの。これだけ大きいビルになると、２４２フロアから２４３フロアまでの

エレベータでかかる時間が他より少し長いなんて、普通気にならないでしょ？だからベアリングの社員達は、実は隠れた２４３階が存在するなんて知らずに、毎日のようにエレベータを利用しているワケね。他にも音や光、匂いを完全に吸収する特殊なコーティングを全フロアに施してあるし、私達が使用する特殊なヤツ以外は、一切外部からの電波は通らないようになっているわ」

一通り宮谷が解説を終えたところで、俺は感嘆のため息をついた。

そしてエレベータに乗り込む。

中で落ち着いてから気がついたが、先ほど利用したエレベータに比べると、このエレベータは随分と小さい。ベアリングの社員達が利用していたエレベータは、最新型のフロートシステムを使用していたので、悠に３０人は乗れるような広さだった。それに比べ、今俺が乗っているエレベータもフロートシステムを使用しているようだが、広さ的に乗れる人数は、せいぜい５人といったところだろうか。

俺と宮谷が乗って暫くすると、自動でドアが閉まった。そして静かに上昇運動を始める。俺の左隣の宮谷は、顔をエレベータ正面に向けたまま呟くように言う。

「まあ、今こんなこと言われてもワケ分からないわよね。まだコードとか、そもそもＩＣＤＡがどんな組織かも知らないんだし。上のフロアに行ったらそれらも含めて詳しく教えてあげるから」

はいはい、と俺。

「今から行くフロアって、２６４フロアだよな。そこって、この組織のお偉いさん達の個室があるんだろ？」

「そうよ、今から行くのは、私の部屋」

お前の部屋？と俺は思わず聞き返しつつ、怪訝な視線を送る。その送られてくる視線に気がついた宮谷は、頬を膨らます。

「何よ。さっきも言ったでしょ。私はＩＣＤＡの中では、結構上位のポストにいるのよ。言っておくけど、私は実行部ではナンバー４なんだからね」

つまり、コードと呼ばれる物に関与した事件を取り締まる、実行部

という場所で４番目に偉いということか、と俺は自分で脳内補正する。
「でも、何で教えてくれるのがお前の部屋でなんだ？普通はこう、取調室とかに半ば監禁状態でやるものだろ」
刑事ドラマの見過ぎ、と呆れたような宮谷。
「アナタが落ち着いて話を聞けるようにするために決まってるじゃない。別に今すぐフロアを2階に変更して、目が血走った囚人達に囲まれた取り調べ室の中でもいいのよ」
「いや、やっぱり宮谷志穂様の部屋がいいです」
そう、と宮谷が呟いた後、すぐにエレベータは２６４フロアに到着した。
「さ、ついたわよ」
今度は宮谷から先にエレベータを降りた。俺も続いて降りる。俺の視界のすぐ先にあったのは、乗ってきたエレベータと柱を一周囲むように重く構えた、真っ白な壁だった。そして、その壁には７２度をきっかりに、高級感漂う巨大な扉が円状に５つ付いている。
「２５１～２７０フロアまでの各フロアには、それぞれ５個の個室があるわ。正確に言うと、２５１～２５８フロアに研究部、２５９～２６６フロアに実行部の高ポストの部屋が配置されていて、２６７～２７０には司令部の部屋があるの」
つまり、研究部、実行部のそれぞれトップ４０に個室が与えられるわけか、と俺は自分一人で納得する。
２６４―２、と書かれた扉の前に立つと、宮谷は再びイレイサーを取り出し、扉の横に付いている真っ黒なパネルに押し当てた。
「生体番号、２３４６５２１。宮谷志穂。適合率、８７％」
第１フロアのエレベータの時と全く同じセリフを言った後、パネルから手を離した宮谷が一歩後ろへ下がると、重音を発しながら巨大な扉がゆっくりと開いた。
そして俺達は、扉の中へと入る。
「すっげぇ・・・・・・」

部屋の内部を見た俺は、思わず呟く。広々とした空間に、正面には超高級ブランドと思われる半円状のキングサイズソファに長方形のクリアテーブル、白色ソファの先には１０Ｍはあろう超巨大なスクリーンが置かれていた。赤一色のカーペットが床を敷き詰めており、視線を上に上げると宝石の如く輝くシャンデリアが映り込んでくる。俺のすぐ隣には、老母メーカー製の巨大なグランドピアノが置かれ、奥に存在する複数の部屋からは、これまたキングサイズのベッドや浴槽が伺えた。宮谷に支給されたというこの部屋は、俺に超高級ホテルのスイートルームを想像させる。

部屋に入った宮谷は、俺にソファに座るように勧める。鞄を置いてから遠慮気味に座った俺に、一区切り息継ぎをしてから宮谷は聞く。

「何か飲む？そこに置いてあるのがメニューよ」

両腕両足を組むようにして座った宮谷の視線を追うと、その先にはソファの前のクリアテーブルに埋め込まれた超薄型のパネルがあった。そこに登録されているメニューを眺め、絶望。

「宮谷。このパネルに表示されている飲み物の金額は、高校生の俺にとっては０が２つほど多い気がする」

「別に気にしなくていいわよ。料金は私が払うから」

「はぁ」

笑顔の宮谷に、注文をするよう勧められる。せっかくの厚意だから、と俺はメニューの中で一番安いコーヒーの注文マークを押した。それでも俺が買う飲み物と比べて桁が違ったが。宮谷も俺の後に注文をする。

「さて。少しは落ち着いたかしら」

「まあ。別に慌てちゃいない」

注文を終え、ソファに腰掛けている俺に、正面の宮谷が切り出す。

「それじゃあ、注文を待ちつつアナタに教えましょうか。この世界の真実を」

その言葉に、一瞬だけの静寂が部屋を包む。この広々とした部屋に、向かい合うようにして二人。話の重要度も相まって、俺は結構緊張

していた。
少し長くなるわよ、と宮谷が足を組み直す。
「アナタに世界の真実を理解してもらうためには、全ての根源である、『少年Ｆ』について話す必要があるわ」

ＩＣＤＡ（２）（後書き）

重要なお知らせ

連載開始当初は問題無いと判断しておりましたが、自分の仕事が佳境に入ったため、今後毎日更新の形を維持していくのが困難となりました。

また、次からのエピソードに関して、自分の中でも大分悩んだのですが、今後の物語を運んでいく上で前提となる重要な内容ですので、毎日少しずつ読んで頂くよりも、まとめて一気に読んで頂いた方がいいという結論に至りました。

そこで大変申し訳無いのですが、本日の更新を持って、一時毎日更新の形を終え、数日おきの更新という形にさせて頂きたいと考えております。その分、１回の更新の分量も長くなります。

大変身勝手な理由で申し訳ありませんが、どうかご理解の程を宜しくお願い致します。

３月中旬からは、再び毎日更新の形に戻れると思いますので、引き続きの継読をお願い致します。

次回更新日は、１２月２８日を予定しております。

Fコード（前書き）

この物語の核心部、その第一幕です。
次回更新は、1／2です。

Fコード

「アナタに世界の真実を理解してもらうためには、全ての根源である、『少年F』について話す必要があるわ」

宮谷の重く放った言葉を、俺はすぐに聞き返す。

「少年F？名前は？」

「分からないのよ。データが無いから」

少年F。一体、誰のことだろうか。そして、何故今回の話に関連が。俺の疑問をよそに、真剣な表情の宮谷は話し始める。

「今から約２５年前。まだ人類を飛躍的に進化させる、モールドと呼ばれる薬品が登場する前ね。少年Fは、ごく普通の子供として、ある発展途上国の小さな村で生活していたわ。彼の両親は農業を営んでいて、別段貧しかったわけでも無く、ごく一般的な環境下に少年Fはいたの。普通の学校に行き、普通の物を食べて、普通の子として育ったわ」

でもね、と宮谷は短く区切る。

「異変は、少しずつ現れ始めたの。１０歳を過ぎた頃から、彼の頭脳は進化し始めた。その勢いは異常と言ってもいい。１１歳になる頃には、少年Fは村で一番の秀才になっていた。当然すぐに、少年Fの才能は、小さな村では抱えきれなくなったわ。彼自身は反対したけど、両親からの強い勧めで、最終的に少年Fは都会の大きい学校に行くことになったの」

モールドが登場する前から、そんな人間もいたんだなぁ、と俺は心の中で呟く。

「そこでも、彼の才能の伸びは止まらなかった。むしろ加速した。彼にとって、先達の知識を教わることは退屈そのものだった。彼はまた、物事を自分の五感で感じなければ信じようとはしなかった。

そして段々と、少年Ｆは事象を知ることより、事象を創り出すことに夢中になった」

支倉恭司、と宮谷は突如俺の名前を呼ぶ。俺は思わず、教師に注意された学生の如く姿勢を正す。

「アナタは、フロートシステムについて知っているわよね？」

当然、と俺は答える。

フロートシステム。

１１年前に開発された、世界を大きく変えることになった最重要技術。簡単に言えば、空中で物体の静止状態を作り出すシステムのことだ。なおかつそれに必要なエネルギーがごく僅かで、そのシステム本体だけなら大気汚染物質も排出しない。フロートエンジンも低コストで大量生産が可能で、地面に接していない分、より少ない動力で長距離を移動することが出来る。このシステムによって自動車が粗大ゴミと化し、急遽世界中で飛行船用の通路が整備されたのだ。それが今から１０年前の出来事。最近ではエレベータや、子供の玩具にまで利用されている。

「実はね、このフロートシステムの原理は、少年Ｆが１２歳の頃に提唱していたの。それが１１年前に、能力を底上げされた科学者達によって実用化されただけ」

「え？」

刹那の驚きが俺を包む。

「少年Ｆはフロートシステムだけで無く、今の現代社会を支える様々な技術を創り上げていったわ。その内少年Ｆは、医療面や、経済面、果てには形の無い精神面にまで介入するようになった。それが、彼が１２歳の時」

「ちょ、ちょっと待って！」

両手を前に突き出す。一拍置いてから、俺は宮谷に聞いた。

「その話が本当だとして、でも俺はその少年Ｆのことなんてこれっぽっちも知らなかったぞ。それだけ天才なら、普通はあっという間に世界中に知れ渡るだろ？」

俺の質問に対して、宮谷は無表情のまま答える。
「少年Ｆの住んでいた国が、情報操作で隠蔽していたのよ。こんな天才がいると知ったら、世界中からその頭脳を利用しようと悪い連中が来るに決まってるじゃない」
１２歳で、フロートシステムの原理を提唱。
そんな化物がこの世に存在したなんて、俺は聞いたことも無かった。
「少年Ｆのことは、今となってはＩＣＤＡのメンバーしか知らないわ。だから、アナタが知らなくて当然」
俺の心を読んだかのように、宮谷は続ける。
「そう、まさに言葉の通り、少年Ｆは化物よ。人間じゃない。何千年と人類が抱えてきた問題を、１２歳の子供がたかだか数十分で解決していく。天才と呼ばれてきた大人達は、指を咥えてそれを見ているだけ」
でもね、と宮谷は少しだけ表情を曇らせた。
「その内科学者達は、ある一つの疑問を感じるようになる。その疑問は、当然といえば当然かもしれない。けど、この疑問が世界を変えた、変えてしまった」
宮谷は一拍置く。俺は唾を飲込んだ。
「『この少年は、一体何者なんだろう？』ってね」
宮谷は立ち上がった。そして壁に近づくと、傍にあった小さなパネルを指で押す。途端に部屋が暗くなり、壁一面が透けたかの如く外の都会の景色が映し出された。どうやらこのビルの外にあるカメラの映像を利用しているようだ。
宮谷は特殊素材の壁に背を持たれると、腕を組んだまま続ける。
「ここから見える景色」
「え？」
「この景色内に存在する物全ては、人が過去の自分を超えた際の産物を利用しているわよね」
「ま、まあ、そう考えられなくは無いけど」
少々無理矢理な気もするが、確かにそうだ。新たな技術が産まれる

ということは、昨日まで不可能だったことが可能になったということ。その点では過去の自分を超えたといっても、まあ強ち間違いではないだろう。ただ、新たな技術が産まれたことの方が重要だとは思うが。

「今から２０年程前は、ちょうど人類が限界を感じていた時期でもあったの。いくら足掻いても、昨日の人類は今日の人類。既存の技術は極限まで高められ、新発見なんてものは空想になりかけていた。そんな中で、その人間の限界をいとも容易く乗り越えた少年Ｆは、一体何者なのか。そう疑問に感じて当然でしょ？」

宮谷は再びパネルを押す。部屋に光が戻り、風景は壁に戻った。

「そして彼ら科学者は、そんな少年Ｆを心の何処かで恐れていたのかもね。自分達の主張していることが支離滅裂であることを理解した上で、たった１２歳の少年を陥れるために詭弁ばかりを弄した。そして終いには、少年Ｆは人間では無い、と無理矢理に断言して、ついに人道を踏み外した行動に出た」

どんな？と俺は生唾を飲みながら聞く。再び正面のソファに座った宮谷は無表情だった。

「少年Ｆと関わってきた人間全てをこの世から抹消した上で、彼を実験体、つまりモルモットとして拘束したの」

「！？」

目前の少女は続ける。

「科学者達の出したバカな結論は、『少年Ｆは人間を超越した存在。彼を調べることで、人類はさらなる進化を遂げられるはず』というものだったわ。少年Ｆの両親は当然、彼の故郷の人から、通っていた学校の教師、生徒、その第２段階までの関係者。これらの人全てを、過去の形跡が一切残らないようにしてこの世から消し去った上で、少年Ｆは、熱帯の森林奥深くに極秘で建設されていた超巨大研究施設に監禁されたのよ」

俺は一瞬言葉を失うが、すぐに疑問に感じて口にした。

「でも待てよ、そんな大規模な事件を、国が見落とすなんてことは

無いだろ？」
「協力したのよ、国も。いや、それどころか世界中がね」
俺の質問に、宮谷は即座に返す。
「人間がさらに進化を遂げる。その魅力溢れる言葉に、少年Ｆに関与した人間の抹消に協力した上で、世界中の国から資金が集中。各国のトップの科学者達が、赤道近くの熱帯雨林、その奥深くに建設された超巨大研究施設に集まって、日々彼をベースに研究を進めた。この時、少年Ｆはまだ１３歳」
このことを話している宮谷は、全くの無表情だった。ただ淡々と語られる彼女の言葉に、俺は黙って耳を傾ける。
「それはそれは、常識のタガが外れた非道い研究ばかりだったそうよ。聞くところによると、命に関わる実験以外は何でもしたらしいわ。両親を殺され、友達を殺され、そして有る意味で実験動物よりも非道い扱いに、少しずつ精神をすり減らしていった少年Ｆは、科学者達への憎しみを確実に募らせていった。
そして、彼が１４歳になった誕生日の日。全ての始まりを告げる、人類史上最悪の事件が起こった」
宮谷は一度息を大きく吸ってから、俺に言う。
「その超巨大研究施設にいた科学者、警備員、物資輸送者、外界連絡者。総勢１０２４名全員が、その日一日だけで殺害されたの。どのような手段を用いてかは分からないけど、一人残らずよ。そして、非常事態宣言を受けて特殊部隊が駆けつけた時には、既に少年Ｆは施設から消え去っていた」
１０２４名もの人が、殺された。たった一日で。
「一体誰が、施設の人達を・・・・・？」
俺は、半ば答えが分かっていた。だが、信じたくない気持ちも含めて、敢えて聞いた。宮谷は無表情のまま答える。
「恐らくは、何処かに消えた少年Ｆに」

口から漏れそうな声を抑えて、宮谷の続く言葉の消化活動に努める。
「しかも、彼らはただ殺害されただけじゃない。彼らの体が、骨、内臓、血、肉、皮膚、とにかくありとあらゆるものに分解された上で、１０２４人分のそれら全てが、少年Ｆが過ごしていた部屋に所狭しと並べられていたの」
「ど、どうしてそんなこと・・・・・・」
俺は、腹の奥からこみ上げてくる何かを必死で抑圧しつつ、宮谷に恐る恐る聞く。
「文字よ」
「？」

「ある、一連の文字を形作るため。一つの『式』を書くために、彼らの死体は利用されたの」

宮谷は続ける。
「事件発生当初は、並べられた死体に意味があるなんて、誰も思っても無かった。けど、偶然研究施設の様子見に来ていた一人の科学者が、その存在に気がついたの」
宮谷は、表情を曇らせる。
「その科学者の名前は、宮谷郷一郎。私の父よ。彼が現ベアリングの社長で、ＩＣＤＡという組織のトップ」
「宮谷の、父さん？」
宮谷の発した新たな事実を消化しようと、必死で脳を回転させる。
「まあ、確かに宮谷の父さんがベアリングの社長兼ＩＣＤＡのトップなら、組織の隠蔽も可能だよな。ビル建設の段階でわざと階をズラせたのも納得でき・・・・・・」
今はそんなことどうでもいいでしょ、と宮谷は曇った表情のまま返す。
「とにかく、私の父、宮谷郷一郎がその存在に気がついた。気がついた、というよりは、不自然に感じたそうよ。『どうして死体を分

解した上で、並べる必要があったのだろうか。少年Fは、何かメッセージを残そうとしたのではないか』ってね。そして、彼は動いた。彼は、その並べられた死体が意味を持つ可能性があるということを他の科学者に知らせた上で、独自の研究チームを結成、その後、死体の配列の解析に移った。そして、研究を始めてから丁度2年が経過した日に、一見不規則に見られたその死体の山が、ある一つの『コード』に収束した」

今日の事件で、宮谷が頻繁に発していた言葉、コード。俺は自分が手汗握っていることに気がつく。

「そのコードは、少年Fの名を冠して『Fコード』と呼ばれているわ。Fコードは、697個の主要コードと、そこから枝分かれした7000個の小規模コードによって構成されている。つまり、合計で4879000個のコードで、一つのFコードになる。そして研究者達は、この世に誕生したFコードの驚異的な力を、重く、深く思い知ることになる」

無表情の宮谷は、大きな瞳をまっすぐ俺に向ける。

「Fコードの力、未知の可能性は、その特性にある」

「特性？」

俺の声に宮谷は頷く。

「Fコードは、言わば手動の回答生成機。ある事柄の『答え』が欲しいと思い、その事柄に関連する全ての『要素』をFコードに投下すると、その事柄の『答え』が導き出される」

「そ、それはつまり、どういうこと？」

俺の疑問は解消されない。宮谷は、少しだけ笑った後、例えば、と右人差し指を上に上げる。

「支倉恭司が、ファミレスに夕食を食べに行ったとする。そこで、彼が夕食に何を食べるか、という『答え』が欲しくなったとしましょう。支倉恭司の精神状態、周りの雰囲気、店のメニュー、彼の財政状態、時間帯、注文を採る店員、店の仕入れ具合。こういった、支倉恭司の夕食に関わりそうな『要素』を全て数値化した上で、そ

のFコードに当てはめると、支倉恭司が食べる夕食が何か、という『答え』が得られる」

なんじゃそりゃ、と俺。

「言葉の通りよ。つまり、周囲の環境などの情報から正しい答えを導き出すことができる、超便利な恒等式だと思ってもらえればいいわ。複数の『要素』から、『答え』を導きだすために利用する道具。まず、最重要『要素』、さっきの例だとアナタの財政状態かしら。最も重要な『要素』を数値化した上で、６９７個の主要コードの中から属するコードに投下。そして、残った『要素』を７０００個の小規模コードに投下することで、莫大な計算をした後、最終的には必ず正しい『答え』が導き出せる。これだけでも、数多くの謎が解決されたわ。今まで絶対に解けなかった数学界の超難問もあっという間に解決されたし、環境面だと、深海や地球内部の構造を完全に把握できた。Ｆコードを利用することで、ある種の未来予知もできた」

でもね、と宮谷は少しだけ声のトーンを下げる。

「こんな代物に頼らなくても、多少の未来予知くらいは人類にもできた。その当時世界最大規模の量子コンピュータ『クラージェ』は、８２、４％で当たる未来予知ができたそうよ。そうね、帰納的って言えばいいかしら。色んな要素から、一つの答えが導き出される。規模は違っても、私達は普段から帰納的に答えを出してきた。だから誕生すぐには、Ｆコードは大して重宝されなかった」

言われてみれば確かにそうだ。人は普段から周囲の環境、状況を把握し、それを行動の原点としている。ただ、そんなことを一々考えている人間は中々いないだろうが。些細な事であればあるほど、普通は無意識下で処理される。

でもね、と宮谷は続ける。

「Ｆコードの本当の力は、そんな程度じゃないの。Ｆコードには、もう一つの超絶的な機能が備わっていた」

俺は思わず生唾を飲込む。

「さっき、Fコードは恒等式だ、て言ったわよね。それはつまり、『要素』の集合と『答え』が同価値であるということを言っている」
「ああ」
宮谷は、何か恐ろしいことでも話すかのように、告げた。
「Fコードのもう一つの特性。それは、『答え』にたどり着くために必要な『要素』の集合、つまり『過程』すら、導出することができるの」
『答え』にたどり着く『過程』。宮谷の言葉を自分の中で何度か反復再生したが、良く分からない。宮谷は続ける。
「演繹的って言えばいいかしら。そうね・・・・・例えば、支倉恭司が２０年後にベアリングの副社長になるという『答え』を用意するとします」
それは絶対に無理だ、と心の中で俺はツッコミを入れる。
「そして、その『答え』をFコードに投下すると、何が起こると思う？」
宮谷は身を乗り出し、クリアテーブルに両手をついて、俺をのぞき込むような態勢になる。突然の動きに困惑しつつ、視線を逸らして答える。
「そ、それは、その『過程』が出るんじゃないのか？」
「そうよ」
宮谷は一度区切ってから言う。
「支倉恭司が、何年の何月何日何時何分何秒に、何処何処の場所で何々をする。ベアリングの副社長になる２０年後までの行動が、一つ残らず導出されるの。１１時２１分２３秒、自宅近くの公園で息を吸った、３時４５分２３秒、学校の机で人差し指を上に２？動かした、みたいなどんなに些細な行動もよ。そして、その行動の際に起こる感情や周囲への影響までもが、完全に導出される」
目の前で語られる宮谷の言葉に一瞬、俺は鳥肌めいたものを感じた。
それじゃ、まるで。
「そう、まるで、私達人間が神に操られているみたいよね。私達人

間の未来に起こす行動が、全て神によって構築済みであるかのように。他にも、例えば誰かを殺したいという願いがあれば、Fコードはその殺人の手段と手順を教えてくれる。それにそって行動すれば、必ず望んだ『答え』にたどり着ける」

俺の心を読んだかのように、宮谷はソファに座りながら言う。そして無表情のまま続ける。

「そして愚かな科学者達、当然私の父もよ。彼らは、このFコードの誕生を、ポジティブに考えてしまった。このFコードは、我々人類のさらなる進化を神が望んでいることの証だってね。科学者らしくない考えよ。このFコードが、人間を超えた存在である少年Fからの、人類への最悪のプレゼントとも知らずにね」

俺は、再び生唾を飲込む。部屋がやけに寒く感じられた。

ねぇ、と宮谷。

「仮にアナタがFコードから『過程』を教えてもらって、それを完璧に実行できると思う？」

「無理だな」

俺は断言する。そんな毎秒毎秒、指定された行動を取るなんてできやしない。

「そう。だから、例え『答え』に必要な『過程』が出たとしても、それを実行できないのだから意味がない。しかし科学者達は『進化』という言葉に囚われすぎた結果、このFコードを最大限に活かす、ある無謀な計画を立てるに至った」

「計画？」

俺が聞き返すと、宮谷は無表情のまま頷く。

「さっき話した、世界最大規模の量子コンピュータ『クラージェ』があるわよね。実はこのハイパーコンピュータは、少年Fが監禁されていた超巨大施設内部に存在していて、地球そのものと情報的リンクをしていたの。地球の事象を細かく数値に置き換えて、深海、地中、空中など、地球上のありとあらゆる場所に配置された『リファポット』と呼ばれる、球形型特殊情報干渉装置を使用して人間独

自の情報を混ぜ加える。簡単に言うと、ある程度は人間の手で、地球の制約や動きに干渉出来るって事ね。局部的な質量操作で一部の重力を弱めたり、大気の流れを変えたり、プレートの動きを加速させたり。莫大な数の『リファポット』を全て制御、統括しているクラージェを通して、これらの干渉をすることができた。でも、いくら技術的に可能でも、地球上の複雑な事象を完全に把握するための頭脳が、人間には無かった。何の規則性も見出ず、加えて配分も未解明のまま地球に独自情報を混ぜ込んだら、期待の結果所か、下手すれば惑星の命運に関わる事態になってしまう。でも仮に地球の事象情報という『答え』と、混ぜ加え方、配分という『過程』が分かれば、地球の環境を一変させることができる。未来永劫、環境問題の心配が取り払われる。そこで、科学者達はどうしたと思う?」

あっ、と俺は思わず声を上げる。

「その、Fコードとかっていうヤツを、頭脳代わりに使用した?Fコードを利用して、複雑怪奇な地球上の現象全てを数値に置換して、混ぜ加える情報の配分までも導出した?」

「そう」

宮谷は頷く。

「クラージェとFコード。両者の相性は、科学者達の愚行を引き起こすには十分な物だった。。彼らの計画は、まずFコードをクラージェの中枢に読み込ませる。そして森羅万象を余すことなくFコードで解析。もちろん解析演算はクラージェね。そして莫大なデータを入手したら、再びFコードを使用して、混入情報の配分を導出。後はサルでも出来るわ。どんな難題だって『回答の手順』と『答え』が分かれば、問題ですら無くなるでしょ。Fコードから得た『過程』と『答え』を元に、リファポットを経由して大地に情報を流し込むだけ。万一地球が吹っ飛びそうになったって、すぐに修正案がFコードによって導出、クラージェに統帥されるのだから」

でもね、と宮谷はため息をつく。

「彼らのこの馬鹿げた計画が、今の世界を大きく変えてしまったの

よ。Fコードはそれまで、形の無い抽象的な、単なる一連の『式』として存在していた。人間だってそうでしょ？『精神』があっても、それを載せる『肉体』が無ければ、一つの個体としては完成されない。そして科学者達は・・・・・・」

「Fコードという『精神』に、クラージェという『肉体』を与えてしまった・・・・・・のか？」

「理解が早くて何よりだわ」

宮谷は俺に微笑を見せる。

「そして、Fコードという得体の知れない代物に、クラージェという自由に動かせる肉体を渡した結果。最悪の事態が引き起こされたわ。クラージェが、Fコードに完全に乗っ取られたのよ。そして今すぐこの研究施設から、関係者を含む人間全員が退却しなければ、秘密漏洩防止の為に組まれていたA－1ラインの自爆プログラムを起動させて、この研究施設全体を吹き飛ばす、という脅しすらかかった。世界最高峰の量子コンピュータと自分の命惜しさに、研究者達は我先にと逃げ出したわ。一度内部から離れたら、二度とその愛しいコンピュータを取り返せないことにも気づかないままね」

「その言い方だと、そのFコードが生きてるみたいじゃないか」

「そう、生きているの」

俺の指摘に、宮谷は人差し指を立てる。

「どういう原理でかは知らない。クラージェの内部構成を理解していた少年Fによって、意図的に組み込まれていたプログラムだったかもしれないし、それこそFコードは神の所有物だったのかもしれない。とにかく、Fコードを世界最大級の量子コンピュータに読み込ませた結果、メインからサブまで、全てのシステムが操作不能に陥った。そして、Fコードが乗っ取ったクラージェから、まんまと逃げ出した愚かな科学者達に向けて、外部の世界に向けて、ある要求が出された」

「要求？」

俺の疑問の声に対し、宮谷はからかいの笑顔を浮かべる。

「これでようやく、現代と話が繋がるわ。アナタもやっと、混乱から逃れられるわよ」
「いいから早く言えよ」
俺に急かされた宮谷は、真剣な表情を見せて、はっきりと言った。

「Fコード、クラージュからの第一にして絶対の要求。それは、特殊情報処理補助液状薬品、通称『モールド』を、5年以内に全人類が摂取すること」

番外編2　～Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｖｉｅｗ～（前書き）

本日は2本更新致します。次回更新は追って連絡させて頂きます。
まず1本目は、番外編となります。久々にあの2人の登場です。2本目も合わせて、少しずつ世界観が通っていきます。

勝手ランキングの方、まさかの一位になってしまいました……。
これも皆さんのおかげです！ありがとうございます！よろしければ、引き続きランキングの投票の方も、一日一度お願いします。

番外編2 ～Another View～

夕暮れ時の裏路地で、一匹の黒獣が咆えた。

世界を染める太陽の輝きは薄れ初め、近未来的な景色はその姿を茜色に変えていた。

ここは、第２５管区のエリア３。上位エリア２つには及ばないものの、全国で稀に見る大都市であることに相違は無い。

そんな、仕事帰りで賑わう表通りから外れた裏路地で、今この瞬間新たな『青』服用者が誕生した。

寂れた世界を震わすように、黒獣は雄叫びを上げる。これまで自身の身に降りかかった不幸を、体一杯に溜め込んだ悲しみを、吐き出すかのように叫びを上げる。

実際のところ、先ほどまでは何処にでも居そうな普通のサラリーマンであった男はしかし、黒色の化物へと姿を変えてしまった。

そして咆える黒獣の足下に、無惨にも散りばめられた通勤鞄と書類の中に、一枚の小さな通知書があった。

いわゆる、リストラ通知だ。

今こそ姿を変えてしまったが、元々のこの男性の適合率は、３７％。決して低い値では無い。しかし、世界中の大企業と渡り歩く企業の一社員としては、その数値はいささか不満な物だった。

世間一般で見れば、化物へと姿を変えた彼は、よく努力した部類の人間だろう。

彼は能力の差を、注ぎ込む時間によって埋め合わせてきた。大企業を支える一員であらんとするがため、休日という概念を頭の奥底に埋め込み、体を酷使して年中無休で働いてきた。

しかし時間だけで能力差が埋まらない世界が、モールドが浸透した

差別的な社会なのである。
彼の会社での首は、昨夜まで親のスネを噛っていたような若造に容易く奪われた。その遊び人の適合率は４６％で、この会社には暇潰しで働きに来た、という。
しかし、彼のいた会社の社長は踊って喜んだ。遊び人のポストを確保するために、骨を粉にして働いてきた彼を、何の躊躇いも無くはね除けた。
そして職を失うという、これまで経験したことも無かったような失意の底にいた彼に、優しく囁きかけて来た者達がいた。

クロと、シロ。

名乗られた名前の通り、全身黒尽くめの少年と、白尽くめの少女は彼に『青』色の液体が揺れるカプセルを渡してきたのだ。
心の底から、この世界に絶望した時に使うように、と。
通常危険物と思われる物は、受け取ったとしてもすぐに処分する彼であったが、心の内に流れ込んでくるかのような少年少女の言葉に囚われ、どうしても捨てることができずにいた。そして自暴自棄になり、貰って数分もしない内に、その青色の液体を体内に注ぎ込んでしまった。

そして、人で無くなった。

悲しみを消し去るように雄叫びを上げて、彼はその解放されたかのような感覚に大きく震えた。
感情が全て解き放たれ、一介の操り人形となっている事実をしかし、彼は知る由も無ければ、考えるだけの思考力さえ無かった。
ふと。
黒獣の見開いた白目に、表路地からある人物の姿が映る。
――――あの、遊び人。俺から全てを奪った。

帰社途中なのか、ヘッドホンを被って軽快なステップを踏んでいるその遊び人へ、黒獣は一切の感情を持たなかった。

怒りも。嫉妬も。悔しさも。

全ては最早、失われた感情。

再び雄叫びを上げた黒獣は、Ｆコードからの破壊衝動に身を任せたまま、表通りへと飛び出した。

＊

「ふぅ～、これで残るは３２人っと」

そう満足気に呟いたクロは、望遠鏡から目を離すと、う～ん、と背伸びをする。リンゴ一つ入ってしまいそうな大きな欠伸をしてから、コンクリートの上に寝転がった。

今彼がいるのは、これまた何処かのビルの屋上だ。昼間３００Ｍを越えるタワーに登った際、相方から猛ブーイングを喰らって、オマケに彼自身大きなゲンコツを作る羽目になったのだから、今度はきちんと足場のある場所を選んでいるのだった。

しかし、クロがタワーから落下し地面に頭から激突した際、周囲の人々が何の心配もしてくれなかったことに、彼はいささかの不満を感じていた。泣きながら鉄筋を伝って降りてきたシロが、周囲の大人達から過保護なまでの関心を頂戴したことも、不満を起こす原因の一つではあった。

実際大人達は、クロが３００Ｍ上空から落ちてきたという事実を知らず、恐らくは近場の木から滑り落ちたとでも勘違いしていたのだろうが、そんなことは彼の意識下では関係の無いことだった。いつものことではあるが、道行く先でシロへの待遇ばかりが分厚い物になっていくのは、やはり彼女が女の子だからだろうか。

「いつの世も、男は辛いね～」

などと実にオヤジ臭いセリフを吐いた少年は、既に沈みかけの太陽に視線を送った。
クロが先ほどまで覗いていた望遠鏡の先では、突如現れた『青』服用者に、表通りの人々がパニックを起こしている。ヘッドホンを被った金髪のチャラそうな男が、黒獣によってその身を引き千切られていたが、クロの興味の対象では無かったようだ。彼としては、とにかく『青』の配布人数がノルマを越えればいいという事らしい。
「ま、どーせＩＣＤＡの連中が始末しに来るしよー」
と投げやりに呟いたクロは、何かを思い出したかのように飛び上がった。すぐに自身の背後へ視線を送る。
その先にいたのは、先ほどからずっと動かずに目を閉じている相方こと、シロだった。
「そうだった！シロ、フェーズ２の方はどうなった！？」
焦りを含んだ少年の言葉に、目を瞑ったまま少女はゆっくりと答えた。
「今確認中。クロ君慌てすぎだよ」
「ちぇっ、分かったよ」
このツインテールの白銀少女は現在、端から見れば非常に奇妙な状況下にいる。
宙に張られたロープに立っているわけでもなく、しかしまるでバランスを取るかように、か細い両腕を精一杯広げている。そしてその垂直姿勢を維持したまま、瞳を閉じて眉間に皺を寄せていた。
そんな一見可愛らしくも思える彼女の姿を、実のところ奇怪たらしめているのが、少女の両肘辺りから手の甲にかけて沿うように浮かぶ、二対の巨大な盾だった。彼女の純白の容姿とは好対照に黒色をした２枚の巨盾は、沈みかけの太陽の光を浴びてなおその身を漆黒に染め上げている。見る人全員が、違和感を感じてもおかしくない光景だった。
暫くの沈黙が挟む。遠くからは定期的に飛行船の飛行音が響き、少しずつ冷気を帯び始めた春風がクロを僅かに擽ったかと思うと、彼

の視界の先にいる彼女は、ゆっくりとその大きな瞳を開けた。
「うん、どうやら恭司お兄ちゃんは、全てを知ったみたいだね」
「おしっ！」
とクロがニッ、と生意気そうな笑顔を見せる。右拳と左掌を合わせて小気味よい音を出してから、右腕を小柄な胴体と垂直になるよう、勢い良く横に伸ばす。
途端に、限界まで広げられた彼の右掌周囲に、バチバチッと紫電が走った。
「――――――はっ！」
威勢良く放たれたクロのかけ声に、彼を中心として屋上全域に亀裂が走る。次の瞬間、眩い輝きと共に、一本の巨剣が空間をねじ曲げ、その姿を現す。
透き通っているのかと錯覚してしまうほど、剣身が磨き上げられた純白のロングソードだった。自身の背丈に迫らんばかりの剣の柄を、クロはきつく握った。途端に巨剣を纏っていた光の粒子が空中に溶け消え、辺りは再び茜色に飲まれた。
「コイツを使うのは、久しぶりだなぁ」
そう笑顔を溢すクロは、ブンブンとその巨大な剣を容易く振り回す。空中に浮かんだ二対の巨盾を従えた白銀の少女に、得意げな視線を送った。
少女は頷く。
「それじゃ、クロ君。作戦をフェーズ3に移行するね」
そう頑なな表情を見せた少女に対して、頷いて応えたクロは、その場にしゃがみ込んだ。
これから走り出す陸上選手のような態勢を取ったクロは、再び生意気そうな笑顔を見せた。
「ひっさびさに、暴れるぜっ！！」
そう言い切ったと同時に、少年は足下のコンクリートを蹴った。爆発的な衝撃波を身に纏いながら、茜色に染まる空を翔け、目的とする場所を目指して消えていった。

＊

「ふぅ」

少年の消え去った後の屋上で、少女は初めて疲れから来るため息を漏らした。

しかし、今彼女の心持ちは、どうしようもないくらいに昂ぶっていた。

これから、長年捜し求めていたあの少年に、再びまみえることができるのだから。

「それじゃ、私も会いに行ってきますね、マスター……」

いいえ、と白銀の少女は言い直す。

「マスターと呼ぶと、アナタは怒るんですよね。言い直します」

一息置いて。

「行ってきます、哲平様」

モールド（1）（前書き）

感想欄で、色々物語に関する重要なことをぶっちゃけちゃってます。

この物語を想起する、つまり制作過程なども結構偉そうに言っちゃってますので、ついでに寄って頂けると嬉しいです。

そしてついでに感想貰えると泣いて喜びます。『面白い』『ツマラナイ』みたいに一言でもいいので……。

感想クダサーイ！

モールド（1）

「Fコード、クラージュからの第一にして絶対の要求。それは、特殊情報処理補助液状薬品、通称『モールド』を、5年以内に全人類が摂取すること。要求に従わないのならば、今すぐにでもクラージュと地球のリンクを開始して、地球上全ての環境を激変。世界規模の災害を引き起こすという脅しもかかったのよ」

「……」

言葉を失った。というか、宮谷の言っていることが良く分からなかった。そんな俺を置いて宮谷は解説を続ける。

「アナタも、モールドは良く知っているでしょう？」

「……」

「……ちょっと？話聞いてる？」

ぼーっとしている俺に、宮谷が話しかけてくる。顔の前で手を振ったり、頬を叩いたり、頭を殴ったり。

「ってイテェよ！！」

我に返った俺は、前にのめりだし頭部に攻撃を加えていた宮谷の手を振り払った。

モールド。俺にとっては悪魔のような薬品の名称。それが、この現実から大幅に離れたような話に関わっている。

俺が再び深い思考に没頭していると、突如この部屋の巨大な扉が開く音がした。すぐに我に返る。頼んでいた飲み物が来たのだろうか。俺が視線を扉の方に向けると、スーツ姿の長身男性が、料理を運ぶ銀製カートと共に入ってきた。見た目は30代前半といったところだろうか。ピシッとした黒のスーツに、まっすぐに伸びた背筋。顔も大分ハンサムで、ヒゲなどは綺麗に剃られている。全身から清潔

感が溢れていた。普通こういった給仕をするのは、メイド服姿のおばさんなんだけどな、と心の中で俺は疑問に感じる。
スーツ姿の長身男性は俺と宮谷の前に立つと、カートから注文した飲み物の準備をし始めた。
「それで？」
金属質な音が鳴る中、ふと正面を見ると、宮谷がジト目でその男性を睨んでいた。
「どうして研究部でナンバー６の浦田さんが、私の前でコーヒーと紅茶の準備に勤しんでいるのかしら」
「ナンバー６？研究部のか？」
俺は宮谷に聞く。確かに、何故そんな高ポストの人が給仕などしているのだろう。宮谷の言葉を受けたその浦田と呼ばれる男性が、ゆっくりと口を開く。
「いやね、僕はこれでもコーヒーをよく自分で淹れていてね。君の部屋に今度の任務の件で話しに来ていた所、偶然給仕の方と会ったんだ。それでついでにと、僕に任せてもらったんだよ」
「任務？ああそう言えば、５日後からだったかしら」
浦田と呼ばれる男性の優しげな口調に対して、宮谷が何かを思い出したように呟く。
「仕事と薬しか興味が無いから、浦田さんは結婚できないのよ。職場でも結構モテるのに」
「ハハハ、僕は結婚には興味ないよ。一人の方が気が楽だからね。それにまだ三十代前半だから大丈夫」
ふと、その男性の視線が、一瞬だけ俺の方へと向けられた。すぐに視線を戻したが、コーヒーの準備をしたままの彼は口を開く。
「君。見かけない顔だけど、新入りかな？」
「あ、いえ・・・・・」
俺が返事に困っていると、横から助け船が登場する。
「私が入学した高校の生徒よ。今日『青』使用者との戦闘があってね、その場を目撃していた生徒の記憶は全て改竄したんだけど、こ

の人の記憶だけどうしても消せなかったのよ。それで、仕方なくココに連れてきて、世の中の真実を教えているワケ」

ふ～ん、と宮谷の言葉に唸った浦田と呼ばれる男性は、カップにコーヒーを注ぎながら、笑顔で俺に声を掛けてくる。

「君、名前は？」

「あ、支倉恭司です。えっと、宮谷の通っている高校の２年生で、彼女に拉致されてきました」

俺の前で少女が短く騒ぐ。浦田さんと呼ばれる男性は、俺の前に淹れたてのコーヒーを置きつつ苦笑する。

「そうか、支倉恭司君か。恭司君と呼ぶよ。僕の名前は、浦田勝也。呼ぶときは、浦田さんでいい。年齢は３２歳で、普段は証券マンだ。さっき志穂君も言っていた通り、ＩＣＤＡ研究部のナンバー６。適合率は７８％だ。よろしく」

それだけ一気に言った浦田さんが、右手を差し伸べてくる。俺は慌てて自分の右手を出して互いに握手。思ったよりも手はゴツゴツとしていた。

「せっかくの淹れたてだ。冷めない内に飲むといい」

「あ、はい」

冷静で笑顔の浦田さんに対し、俺は慌ててコーヒーカップを掴む。破格の値段からだろうか、普段飲むコーヒーとはひと風味違った香りが俺を包みこむ。

「ところで、彼にはどこまで説明をしたのかな」

コーヒーを飲む俺の目の前に座っている無表情の宮谷に、浦田さんは彼女の紅茶を用意しながら聞いた。

「Ｆコードの説明までしたわ。これからモールドと、ＩＣＤＡについて話すところだった」

無表情の宮谷の前に、薄紅茶色の紅茶が置かれる。湯気と共に漂う香りを味わった後、上品に飲む宮谷。どうすればいいのか分からず、とりあえずコーヒーを啜る俺。一方で、俺達の隣りにいる浦田さんはその場で腕を組むと、フム、と考える素振りを見せる。

「それじゃ、次期かわいい後輩に、僕が直々に教えようかな。モールドについて」
先ほどと違って、明らかに浦田さんの目が輝く。どうやらモールドは、彼にとって興味の対象ではあるようだ。次期後輩という言葉が少々気になったが、とりあえずそのことは置いといて。俺の前で、宮谷が、お願いのジェスチャー。
「では、恭司君。君は、モールドとは何か、知っているかい？可能な限り詳しく言ってごらん」
学校で嫌というほど教わりましたよ、と心の中で俺はため息をつく。
「今から約１５年前に開発された、人間に備わっている潜在能力を引き出す液状薬品のことですよね。１０年前に全人類が摂取を終えたって言う、超有名な薬です。一度摂取したら、死ぬまでずっと体内に残留して、少しずつ服用者の潜在能力を引き出していく。摂取する際は、注射でも、食薬でも、とにかく体内に入れればいいはず。国の補助で一切料金はかからず、今では、産まれたらすぐに摂取しますよね」
俺の言葉に、浦田さんは軽く頷く。
「うん。一般人への説明なら十分かな。でも僕らにしてみれば、６０点ってところだね」
「え？違うんですか？」
俺は思わず聞き返す。
「そうだね。モールドは君達一般人が思っているほど、素晴らしい薬じゃないんだよ」
浦田さんは、近くの壁に背を持たれる。腕を組んだまま真剣な表情で語り出した。
「恭司君。君は、Ｆコードが乗っ取ったクラージェからの第一要求について、聞いた？」
俺は頷く。
「５年以内に、全人類がモールドを摂取することですよね。要求に従わない場合は、地球規模の大災害を引き起こすと」

「そう。その要求と同時に、クラージェから科学者達の元に、モールドという薬品の作成方法と、その効能が伝えられた。クラージェ曰く、『人間の潜在能力を高める薬。副作用は一切無い』だそうだった。地球規模の災害を恐れて、仕方なく国の援助の元、科学者達は半信半疑のままその薬品を開発。世間に公開した」

やはり、と俺は心の中で頷く。開発の経緯が大きく違っていても、薬の効能は変わらなかったようだ。

そんな俺の考えを砕くかのように、浦田さんは続けた。

「公開直後から存分に効果を発揮したそのモールドという薬品に、最初は科学者達も多少の安心感を抱いていた。しかし、公開されてから5年後。そのモールドという薬のメカニズムが解析され、彼らは驚愕する。そして、そのモールドという薬の恐ろしさを思い知ることになるんだ」

正面で紅茶を飲んでいた宮谷が、ティーカップをテーブルに置いた後、浦田さんに代わり口を開く。

「いい？支倉恭司。モールドは、確かに人間の潜在能力を引き出すわ。でも、モールドが引き出すんじゃないの。Fコード、クラージェが、人間の潜在能力を引き出すのよ」

「それは……」

一体どういうことなのだろうか。混乱する俺に、今度は浦田さんが解説をする。

「実はね、モールド自体に、人間の潜在能力を引き出す力は無いんだ。モールドの本当の役割、それは、密かに地球と情報的リンクを行っていたクラージェからの情報を吸収、蓄積する、言わば受信機のようなものだったんだ」

浦田さんは続ける。

「クラージェは、地球と情報的リンクを果たしていた。それがどういうことを示しているかと言うと、僕達が吸う空気、見る光、聞く音、触った際の感触。それら全てに、クラージェから発信される情報が含まれているということなんだ。その情報を、僕達の体内に残

留しているモールドという液体が受信して、体内にその情報を蓄積する」

つまり、と混乱状態の頭を振り絞って、俺は声を発する。

「クラージェが発信していた、『潜在能力を引き出す』という情報を、人々の体内に残留しているモールドが受信。そして体内にその情報を蓄積していった結果、眠っていた潜在能力が引き出された……？」

俺の言葉に、宮谷、浦田さん両名が頷く。宮谷が続けた。

「適合率っていうのはね、そのクラージェから発信される情報を、いかに吸収しやすいかを数値化したものなの。だから当然適合率が大きい方が、より多くの情報を体内に蓄積するから、能力が高くなる」

はぁー、と俺は感嘆のため息。と同時に俺は疑問を感じる。

「でも、それじゃあ別に、デメリットなんて無いじゃないですか。いずれにせよ、個人の能力は高くなるんですし」

違うんだよね、と苦笑いの浦田さん。

「恭司君。君は、人間に眠っている潜在能力が、どれほどの物か分かるかい？まさか、人間には無限の可能性がある、なんては言うまい」

俺はコーヒーを一口飲んでから答える。

「そりゃ、限界はあると思いますよ。でも、何でそんなことを？」

いいかい、と表情を引き締めた浦田さんは告げる。

「はっきり言おう。個人差はあるけど、人間の潜在能力なんてものはたかが知れてる。本来ならば、例え高適合者でも、能力的には普通の人間に毛が生えたようなものなんだ。ではどうして、僕や志穂君のような高適合者が、信じられないほどの異様な力を発揮できるのか。恭司君も、彼女の力を見たんだろう？」

俺は、昼間の宮谷を思い出す。生身の人間である俺にとって、あの力は異常と言っていい程のものだった。

確かに、と今度はティーカップを持った宮谷が呟く。浦田さんは定

位置の壁に戻った。
「モールド、いや、クラージェが、人間の潜在能力を引き出しているのは事実。でもね、問題は、その引き出し方なのよ」
「ど、どんな？」
俺は生唾を飲む。宮谷は紅茶を一口含んで飲込んでから、俺に告げた。

「クラージェはね。人間の潜在能力を引き出す際に、人間の感情を喰らうのよ」

モールド（2）（前書き）

ついにこの日がやって来てしまいました。
活動報告や感想欄で色々暴走しているので、知っている方は知っていると思われますが、私はこの度の更新を恐れてなりません。どれくらい恐れているかと言うと、地理の参考書片手に逆立ちしているくらいです。

さて、意味不明な導入はいいとして、つまりこの度の更新で何が起きているかと言いますと。

まず、連載史上ブッチギリの最高文字数。
加えて、息つく間も無い程の文字のギッシリさ。
オマケに、全編説明のみ。

ヒィィィィィ、と奇声を上げずに、何をしろというのですか。逆立ち参考書片手のまま学校へ行けというのですか。
度重なる幸運に恵まれ、３週間で１５万ＰＶに到達（！）、お気に入り８３０人、勝手にランキング総合１位に到達した拙作ですが、今回で見限られるのでは、と不安でなりません。どれ位不安かというと、地理に代わって化学の参考書を片手に逆立ちしているくらいです。

というわけで、流石に2回に分けました。
よって本日も2本更新となります。

長い長い物語の中で、このような暴走は今回と次回だけになりますので、皆さんどうか継続を！2話に分けてもなお、読むのが辛かったら、しおり機能などを利用して数日に分けるという手もあります。

その方が、私としてもアクセス数が増え……

ゲフンゲフン。失礼、本音を口走りました。

とにかく！文字ビッシリ最高に読みづらい、というご指摘への反省の色も見せず、またやらかしました。そして恐らく次回もやらかします。

ですが、どうかご容赦下さい！ここは、有る意味で一番力を入れた所なので……！

それでは、本編をどうぞ……。（ヒィィィィィ）

＊次回更新は、一番下に書いてあります。

「クラージェはね。人間の潜在能力を引き出す際に、人間の感情を喰らうのよ」

「喰らう？」

「そう、利用すると言ってもいいわね。怒り、悲しみ、喜び、驚き。人間の感情ほど、個性豊かで、複雑なものは無い。しかもどんどん新たに産まれてくる。そうなると当然、人間の感情は途轍もなく莫大な情報量を持っているってことになるわよね？クラージェは人間のその感情の一部を情報に変換して、人間の身体的、頭脳的な能力に変換していたの」

浦田さんが、説明を加える。

「君達一般人が思っている情報と、僕達が指している情報は全く違う物なんだ。今のこの世界で情報というのはね、単に実態の無い抽象的な物を指しているんじゃない。この世の事象と変換された情報は全く同価値だと思って貰って構わない。同価値ならば、当然違う類の情報も別の事象に変換できる。つまり、感情から人間の能力、みたいにね」

俺は少し考えてから、言葉を返す。

「つまり、人間の潜在能力はたかが知れている。クラージェは人間の感情を情報に変換した後、肉体的、精神的な能力に再変換して、加算していた。だから、あんな化物みたいな力が発揮出来る。そう言いたいんですか？」

「そういうことになるね」

ゆっくり頷いた浦田さんは、そのまま続けた。

「感情が情報に変換される。実は、これほど恐ろしいことは無いん

だ。感情を失うということは、どんな物事に対しても、全く同じ状態でいるということだよね。何をしても、別段特別に感じない。何が起きようとも、それを受け入れてしまう。こんな状態で、人と呼べるのかな？」

俺は、再び寒気を感じる。半分ほど残った目前のコーヒーは、暖かみを失いつつある。

「それじゃまるで、動く人形じゃないですか」

そう、と無表情の宮谷。

「まさに、動く人形よ。全人類が、モールドという名の受信機を摂取してしまった今、彼らの感情は、少しずつ少しずつ削り取られて、能力に変換されている。そして、適合率が大きい人間ほど、その感情が失われる速度が速い。ＩＣＤＡが計算した結果、今から約４７年後、全人類の感情が失われることが分かった。そうなると、何が起こると思う？例えば、Ｆコード、クラージェが『死ね』という命令を含んだ情報を発信したとしたら？私達人類は、何の躊躇いも疑問も持たずに、一瞬にして滅び去るでしょうね。これこそが、人間を超越した少年Ｆからの最悪のプレゼント。人類に対して憎しみを抱いたであろう彼の、最後の復讐」

「な、そんなこと・・・・・・」

とても、信じがたい話だった。非現実的極まりない点と、あまりの衝撃から。

「お前は・・・・・・」

「？」

「お前は、どうなるんだよ、宮谷。お前は、超高適合者なんだろ？一体後何年で・・・・・・」

一度目を丸くした宮谷は、次の瞬間には苦笑していた。

「私の場合は、あと１６年くらいらしいわよ。よぼよぼのおばあさんになる前に、もう感情なんてものは消えるみたい」

俺には、宮谷が何故そこまで笑顔でいられるかが分からなかった。

ひょっとして、彼女はもう抗うことを諦めたのだろうか。いや、違

うだろう。もしそうなら、彼女はＩＣＤＡなんて組織には加入していないはず。

「話を戻すわよ。とにかく、その真実を知った科学者は、最悪地球規模の災害を起こされようとも、すぐにでも薬の使用を停止させる必要があった。でも、時既に遅しってね。彼らが薬のメカニズムを解析し終わった時には、既に5年が経過していて、全人類が薬を服用し終わっていたのよ。一度堪能してしまった力や名声を、欲望にまみれた一般人がむざむざ捨てると思う？」

壁に背を持たれていた浦田さんが、無表情のまま口を開く。

「そこで彼らが最初に考えた解決策は、Ｆコードの破壊。すなわち、爆弾でも何でもいいから、とにかくクラージェごとＦコードを葬り去ろうというものだった。しかし、大量の戦闘機をクラージェが存在する熱帯雨林の中の施設に送りこんだ結果、失敗に終わった」

「ど、どうして？」

俺の聞き返しに、浦田さんは無表情のまま答える。

「Ｆコードはね、人類がモールドの秘密に気づき、破壊しに来ると予測していたんだ。全ての『答え』を導き出す、自身の特性を利用してね。そこで、Ｆコードは対策を打っていた。クラージェが存在する施設の周囲３００ＫＭの環境を激変させ、侵入者が入れないようにしたんだ。荒れ狂う大気の流れに、大量の戦闘機は一機も残らず墜落。そしてその下の熱帯雨林の中に、大量の改造生物を放っていた」

改造生物？と俺が疑問に感じていると、宮谷が補足を入れる。

「地球との情報的リンクを利用して、大地に住む生物の身体的情報を書き換えたのよ。つまり、原子レベルで生物の構成を組み替えて、凶悪な改造生物を創り上げた。最強クラスの個体になれば人間なんかじゃ相手にならないわ」

確か宮谷の適合率が８７％で、浦田さんが７８％だったはず。この二人ほどの適合率を持ってしても、その改造生物とやらは止められないのだろうか。

「パイロット達も随分な高適合者だったそうだけど、そんな奴らが溢れかえっている地獄の空間に飛び込んだんだから、誰一人帰ってこなかったわ」

「ちょっと待てよ。それじゃ、何で俺達人間は、身体情報を書き換えられないんだ？俺達人間だって、その改造された生物と同じように、クラージェと情報的リンクした地球と接してるじゃないか？そもそも、何で俺達人間はモールドが無ければ、クラージェからの情報を吸収できないんだ？」

いい質問だね、と浦田さん。

「人間が他の生物と違うことは、情報の取捨選択を行っていることなんだ。他の生物は、自分が得た情報を、そのまま全て受け入れる。何故なら、その情報を吟味するだけの発達した脳を持ち合わせていないから。けど、人間はどうだい？入ってきた情報を認識して、それが有益ならば取り入れる。例えば、人間は嫌なことはすぐに忘れるって言うだろう？それは、人間に悪影響を及ぼさないため、人間が生きていく上で必ず必要なことなんだ。だから、『原子構造の組み替え』なんて人間にとって利益の無い情報は、全て無意識の内に遮断されるんだよ。そしてその無意識下で機能しているフィルターは、感情が消えた際に全て消失する。モールドと言うクラージェからの情報を体内に直接取り込ませる装置を使ってやっと、『潜在能力を引き出す』という、一見有益に思える情報を少しずつ採用することができてるんだ。それでも大部分が削られるけどね」

話を続けるわよ、と無表情の宮谷。

「でも、水泡に帰したと思われた作戦は、完全に失敗というワケでは無かったのよ。彼らは一矢報いることができたの」

恭司君、と浦田さんに声を掛けられる。

「君は、一日食事を採らないで生きていられるかい？」

なんのこっちゃ。

というツッコミは飲込んで、素直に返答する。

「え、まあ普通に生きていられるでしょうけど」

俺の答えに浦田さんは頷く。
「では、2日間は？」
「まあ、大丈夫です。お腹は空くでしょうけど」
「3日」
「まあ」
「5日」
「うーん……」
「2週間」
「いや、ちょっと……」
そういうことだ、と満足気な浦田さん。一体何を言いたかったのか、申し訳ない気もするがさっぱり分からない。
そんな俺に、宮谷が解説を加えてくれる。
「つまり、人間が肉体を維持するのに食事が必要不可欠であるのと同じように、Fコードも、クラージェという肉体を維持していく上で、無くてはならない物があるでしょ？」
宮谷の言葉の指すところ、その意味をようやく理解した俺は、思わず声を張る。
「そうか、電力か。クラージェだって、規模は違うにせよ電子器機だもんな。電気が流れなければ、当然機能しない。恐らくクラージェへの送電をストップしたんだろ」
「2割正解」
と冷徹な声色で俺の答えを砕いたのは、宮谷だった。苦笑いを浮かべる浦田さんが続ける。
「考えてみなよ、恭司君。世界最大規模の量子コンピュータだよ。オマケに外部には秘密で建設された施設。隠しておきたい相手である外部の世界から、こっそりと電力を分けて貰って、いつ切れるかも分からない送電線で送電して、莫大な消費電力の全てを賄えると思うのかい？」
「すいません、思ってました」
はぁ、と目の前の宮谷が、わざとらしい大きなため息をする。浦田

さんも咳払い。
「ま、まあそれはいいや。つまりだね、クラージェを含んだ研究施設には自家発電用のシステムが幾つも存在していたんだ。近くには巨大な河も流れているから、原子力も利用できたしね」
続きよろしく、と手振りを受けて、宮谷が続ける。
「Fコードの創り出した地獄世界で戦闘機が次々と撃墜されていく中、最後の一機のパイロットが咄嗟に撃った多段ミサイルの一つが、本当に偶然、施設の発電所の一つを捉えたの」
「！」
宮谷は続ける。
「幸運なことに、着弾した発電所はメインの一つ。二次的な爆発、崩落も含めて、全発電施設へ7割以上の損害を与えた」
「ちょ、ちょっと待って」
その言葉を受けて、俺は感じた疑問を口にする。
「それだけの損害を与えたなら、クラージェの消費電力はもうほとんど維持できないんじゃないのか。だったら止まってもおかしくないだろ」
宮谷はゆっくり頷くと、机にあった、先ほどの飲み物を注文する際に利用したパネルを操作した。そして部屋の照明が消えると同時に、青白く光るモニターが机の上に浮かび上がる。慣れた手つきによる数回のタッチの後、2枚の写真が映し出された。
一枚は、倒壊した巨大ビルの残骸写真。ナンバー50に存在していた、当時世界一の高さを誇っていた高層ビルだったはず。
このビルの事を、俺は良く知っていた。10年前に発生した未曾有の大災害を象徴する写真として、教科書やメディアを通して何度か見ている。
だが、もう一枚の写真のことは知らない。
荒れたノイズが走る、一枚の航空写真。現代の写影技術からしてみると、えらく低画質だ。となりの崩壊ビルの写真がやたらと高画質だから、細かな荒れがなお目立つ。下に広がっているのは、森林だ

ろうか。境界線に届きそうなほど奥まで敷き詰められた木々の中心、丁度写真の中心に、一本の柱のような物が建っている。いや、ちょうど写真に油絵具のホワイトで塗りつぶしたかのような、天地を貫く一本の太いラインが走っていると言ったほうが相応しいかもしれない。

「本来ならあのミサイル１発で、クラージェの莫大な消費電力が賄えなくなって施設は沈黙、Ｆコードも停止。作戦も成功のはずだった。でも流石はＦコード。機能停止に追いやられる寸前で、その状況下で、クラージェには最善な、人類には最悪な『答え』を出した」

そう言った宮谷は、親指以外の右指を４本立てる。

「機能停止間際。Ｆコードが残した『答え』は４つある」

宮谷の人差し指が折られる。

「一つ。先ほど言った発電所の一部を切り離した」

「切り離した？」

俺の言葉に、今度は浦田さんが反応する。

「墜落寸前の戦闘機からの通信曰く、やはりＦコード、人間離れな判断だったらしいよ。メインとして使用していた原子力発電機７個の内、２つが大破、３つが中破。無傷だった２つをシャッターで隔離して、推定１割弱のエネルギーを無傷のまま確保するに至った」

「でも一割だけ残したところで、もう何が出来るってワケでもないんじゃ？」

俺の言葉に首を振ると、宮谷は二本目の指を折る。

「確かにＦコードは、クラージェを利用した大規模な地殻変動は起こせなくなった。その後はね」

「その後？」

支倉恭司、と再び名前を呼ばれ、とっさに反応した俺は背筋を伸ばす。満足げな宮谷はスクリーン上に映された、倒壊ビルの写真を拡大した。

「今から１０年前に、ナンバー４５からナンバー９８の国々に渡って発生した、今世紀最大の地震を覚えているわよね？」

「ああ」
ちょうど俺が施設に入居する年に発生した、今世紀最大の大地震。
後から聞いた話によると、その被害は甚大で、死傷者は数千万人にも上ったそうだ。ナンバー４５からナンバー９８までの国の復興作業は、１０年経った今でも完全には終わっていない。
「実はね、その大地震は、Ｆコード、クラージェが引き起こした物だったの」
「・・・・・え？」
戸惑う俺に、無表情の宮谷は続ける。
「さっきも言ったでしょ？クラージェは、地球上の様々な場所に配置されているリファポットを使用して、地球と情報的リンクをしていたって。だから、地球のプレートの動きを加速させるなんてことは、Ｆコードにとっては造作も無かったのよ。Ｆコードはクラージェを通してプレートの移動速度を何万倍にも加速させて、歴史的な大地震を引き起こした。ただし、これだけの規模の震災を起こすには、クラージェと地球間のリンクの最大出力が必要なはずだから、相当な電力が必要。作戦時の攻撃が、地震を起こされるほんのちょっと前に届いていれば、回避できたはずだったんだけどね」
再び浮かび上がった真実に、俺は生唾を飲込む。宮谷の言葉を浦田さんが繋ぐ。
「恐らくＦコード側としては、我々に対する牽制だろうね。こういった大災害によって、国としても僕達としても、暫くの間は復興に労力を注がねばならない。実際にこの震災さえ止められていれば、ＩＣＤＡの規模は、今とは比較にならない物となっていたんだが」
残念だよ、と言葉通り心底残念がっている浦田さんを一瞥し、宮谷は言う。
「過ぎた事はいいとして。Ｆコードが出した『答え』の残り二つ。その内１つが、これよ」
宮谷は、ノイズが混じったもう一枚の写真を拡大。俺に示す。
「支倉恭司。アナタには、これが何に見える？」

何に見えるかを問われているということは、これは物の類に含まれるのだろうか。騙されれば、写真の処理ミスと言われても信じてしまいそうな程、景色に不釣り合いな形だが。

「タワー、かな」

「正解」

俺の言葉を一瞬で肯定した宮谷はしかし、次の瞬間には想像の斜め上を行く補足をした。

「不安定情報素による、空間隔離用のタワー。それがクラージェの存在する周囲3?を囲うように、成層圏付近まで展開されている」

「く、空間隔離?不安定、え、何?」

再び此処で登場した謎の言葉に、宮谷はさらなる補足を加える。

「さっきも説明したけど、私達の感情も含めた全ての事象は、一度情報に置換できるわよね?」

「ああ」

宮谷は続ける。

「不安定情報素、って言うのはその一度置換された情報が、確固とした形式情報を持たないまま、現実に不安定物質として具現化した物なの」

「つまり……?」

「一度情報として置換された物が、肉体だとか拳銃だとか、とにかく具体的なモノに変わる一歩手前の物質、て言えばいいのかしらね。物質であると同時に、物質では無い。未だに謎が多くて、研究部の重要テーマにもなっているんだけど、とにかく非常に不安定な存在なの。外界からある形式情報が加わるだけで、それに沿った現象、もしくは物質が発生してしまう」

実例もあるわよ、と宮谷が言うと、浦田さんが考える素振りを見せる。

「確かその作戦のすぐ後にも、施設を守る情報素の壁にミサイル攻撃を敢行したんだ。その時はまだ、天にそびえる白色のタワーの正体が分からず、結果として太平洋のど真ん中でC5クラスの爆発が

起きたらしいよ」
「!?」
C5クラスの爆発というと、小さなエリアなら丸々10個は消し飛ぶ程の破壊力だ。それが一体何故太平洋上で。
「どういうことかっていうとね、恭司君。この情報素っていうのは、あと一歩で物質なり現象として現れうる物だろう。既に完成した武器なり、エネルギー状態の高い物をぶつけると、その高エネルギー物質の含んだ様々な情報が情報素にも伝達され、様々な物に具現化されるんだ。加えて厄介なのが、位置情報も含まないから、最悪エリア1のど真ん中でボンッていうこともあり得たわけだ。あの時の科学者達は生きた心地がしなかっただろうね」
「じゃ、じゃあ!」
宮谷は頷く。
「恐らくFコードは、ロクでも無いことの為に、その不安定情報素を周囲にため込んでいたようね。それが襲撃の際、今後の電力不足を考慮して、どうせ使えないなら、と自身を守る最強の檻としたのよ。この情報素は、人でも物でも接触一つで大災害になりかねない。それがぐるっと一周、施設3?を囲んで、成層圏まで展開されてるんだもの。おかげで私達人類は本格的にクラージェに近づけなくなった」
宮谷は続ける。
「そして、これらの出来事から科学者が分かったこと。クラージェと地球とのリンクは、最早リンクでは無かったってね。攻撃を敢行していた段階でFコードは既に、地球という超莫大な情報量を、全て統括していたのよ。後一歩の所で、地球全てが吹き飛んでいてもおかしくなかった」
俺は、再び全身から鳥肌が立つのを感じた。誤魔化すように、先に進むよう急かす。
「そ、それで、残りの一つの答えは?」
俺の言葉に浦田さんは頷く。

「最後の一つは、君の予想通りだよ。Ｆコード、クラージェは、メインシステム以外は全て凍結。残った1割の電力を使って、限られた2つの情報を世界に流し続ける。『感情を使って潜在能力を引き出せ』と、改造生物に向けた『原子構造の組み替え』だ。
今、Ｆコードは浅い、本当に浅い眠りについている。だからこうして僕達が、Ｆコードに背くような行動を起こしても、クラージェは情報の蔓延に忙しくて制裁を加えられない。リファポットを通じて僕達のことを知って、ＩＣＤＡに制裁を加えたくても、そのために必要な食料、電力が足らない」
宮谷が続けた。
「そのパイロットの一撃が、人類の未来を大きく変えた。取り敢えずの、当面の危機は去ったの。でも半睡眠状態のクラージェから流され続けるその情報によって、４７年後に人類が滅びさることに変わりはない。その後、科学者達は必死に解決法を模索したけど、どれも決定打にはならず、リスクが高まるばかり。そして、人類が選ぶべき道は二つに一つ、という結論に至った」
浦田さんは壁に背を持たれたまま、右の人差し指をピッ、と上げる。
「一つ。僅かな期待に懸けて、玉砕覚悟でＦコードの破壊を試みること。しかし例え成功したとしても、クラージェに到達するまでに反応を起こす莫大な不安定情報素によって、恐らく人類は壊滅的な被害を受ける。二つ。このまま何もせず、残り４７年間を過ごして、全人類がＦコードの操り人形になるということ。どちらも、人類はただでは済まない。こんな究極の二択を迫られた科学者達の中に、第３の可能性を示した者がいた」
そう、と浦田さんは続ける。
「志穂君のお父さん、つまり、宮谷郷一郎だ。彼が示した第３の可能性、それは『人類が無事なまま、Ｆコードを葬る』。他に選択肢が無いならば、４７年以内に作り出せ、というものだった。そして、今僕達がいる、Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ Ｃｏｄｅ Ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ&Ｄｅｌｅｔｅ Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ、通称ＩＣＤ

Aが、宮谷郷一郎をトップに設立された。それが、今から8年前の出来事」

モールド（2）（後書き）

このまま、次のエピソードへどうぞ。
余裕の無い方は、此処で1回休憩だ！

＊次回更新は、1／9です。宜しくお願いします。
また、これから非常に忙しくなるため、感想の返信が1／16までできないと思われます。でも、感想は歓迎しますので、是非一言でも下さい！

モールド（3）（前書き）

本日1／6、2本更新の2本目です。

ようやくＩＣＤＡの話が出来るわね、と深いため息をついた宮谷。
「では、私達ＩＣＤＡについての説明をしますか」
混乱状態の俺を無視し、宮谷が説明を始める。
「もう今までの話を聞いて分かると思うけど、私達ＩＣＤＡの最終目的は、Ｆコードの抹消にあるわ。ＩＣＤＡは、８年前に設立されて、現在人員が、全世界合わせて１０万人くらい。ここは日本の本部だけど、世界中にＩＣＤＡの施設があるわ。日本にもあと８個ほどの中規模施設と、２０個ほどの小規模施設がある。ＩＣＤＡの人員は大まかに、研究部、実行部、司令部、上層部に分かれていて、どれもが独立して、けど協力しながら行動している。まず、研究部は・・・・・・」
説明お願い、と宮谷がジェスチャー。はいはい、と苦笑いの浦田さん。
「僕達研究部はね、主に、Ｆコードに纏わる器機や薬品なんかを研究しているんだ。当然クラージェやモールド、リファポットも研究しているし、今世の中に出回っている『青』についての研究も、先日始めた」
『青』。これも、今日一日で宮谷達が何度も発していた言葉だ。『青』についての説明は後でするわ、と俺の心を読んだかのような宮谷が口を開く。
「じゃあ、次は実行部ね。私達実行部は、実際に外に出ての活動をしているわ。行動目的は色々有るけど、主な目的は、Ｆコードに纏わる情報の隠蔽、消去。そしてＦコードに纏わる犯罪の取り締まりよ」
「Ｆコードに関する情報流出を抑えるってのは分かるけど、犯罪って何？」
う～ん、と宮谷が唸る。

「色々あるんだけどね。例えば今日、アナタが見た化物状態の大杉」
数時間前の映像を脳内再生する。血まみれの荒瀬と大杉を殺害した宮谷を思い出し、すぐに映像をかき消す。
「あの大杉が化物になったのも、実はFコードの影響なの。それには、『青』が大きく関わっているんだけどね。さっきも言ったけど、後で説明するわ」
続けるわよ、と無表情の宮谷。
「そして、司令部。ここの仕事は、私達実行部や研究部の管理。それからFコードに纏わる情報の管理に加えて、コード査問会や上層部への報告もしている。ああ、コード査問会って言うのは、Fコードに纏わる犯罪者を裁くところね」
付け加えた後、一度息を吸い直してから、宮谷は続けた。
「そして、最後に上層部。ここは、未だにどうなっているのか、実行部の高ポストである私も分からないの。ただ、上層部の連中は各国の本部にしかいなくて、全人員の1%だけ」
「宮谷の父さんも?」
「ええ」
即答した宮谷。その表情が少しだけ曇った。やはり、父親との間で何かあったのだろうか。浦田さんも少しだけ顔を歪めている。
宮谷は、無理に表情を明るくすると、話を続けた。
「それじゃ、ようやく今日の話に移れるわね」
宮谷は空のティーカップを浦田さんに渡す。俺もついでに渡した。
「最初に、見せたいものがあるんだけど」
宮谷が、片付けをしている浦田さんに視線を送る。浦田さんはその手を止めると、スーツの内側から何やらカプセル状の物体を取り出した。直径5?程のカプセルの中は、黄色の液体で満たされている。
「これが何か、分かる?」
バカにすんな、と心の中で俺。
「モールドじゃないのか?話の流れ的にそれしかないだろ?」
「正解」

宮谷が軽く流す。そして薄笑いを浮かべながら、俺に聞いてきた。
「じゃあ、モールドが一種類だけじゃないのは、知ってた？」
「・・・・・はい？」
彼女の口からさらりと出た新事実に、俺は気の抜けた声を出す。そして慌てモード発動。
「ちょっ、ちょっと待てよ！えっ！？モールドって、複数あるの！？」
慌てる俺に、浦田さんが苦笑いを浮かべる。
「知らなくて当然だよ、恭司君。君達一般人にしてみれば、モールドは一種類で正解。けど、実際にはもう一つ」
言葉は冷静。しかし、その瞳を子供のように輝かせている浦田さんは、スーツの中からもう一つカプセルを取り出した。
「いいかい、恭司君。君達が知っているモールドは、この黄色い色をした液体だ。僕達の間では、この純黄色から『黄』と呼んでいる」
そして、と浦田さんは続けながら、テーブルにそのカプセルを置く。揺れる液体は、純粋な橙色。透き通った印象を受ける色合いだ。
「そしてこれが、僕達研究部が開発した、新型モールドだ。もう２年前に開発済みだけどね」
すごく役立ってるわ、と俺の正面で微笑を浮かべる宮谷。
「その新型モールドには、どんな役割が？」
その質問に、浦田さんがさらに目を輝かせる。しかし言葉は至って普通。
「この橙色をしたモールドは、言わば人間が創り出したモールドだ。君達が知っているモールドとは大分違ってね。今までのモールドが、クラージェからの一方的な受信だったのに対して、このモールドは、クラージェが発信する情報そのものに干渉するんだ」
「？」
自慢気に話す浦田さんに対して、いまいち意味が分からない俺。浦田さんは続ける。
「つまりどういう仕組みかって言うとだね。僕達の感情の一部を情

報に変換して、そしてその情報をリファポットに伝達。つまり僕達自身が、僅かながらだけど、結果的には地球に干渉することになるんだ」

まだ意味が分からない俺。浦田さんの説明が少々抽象的なのだろうか。そんな俺の様子を見かねたのか、複雑そうな顔の浦田さんが少々唸る。

「う～ん、そうだね。じゃあもう少し具体的に説明しようか」

ポンッ、と手を叩く浦田さん。

「例えば、僕がこの橙色のモールドを摂取したとしようか。すると、僕にはどんなことが出来るようになるかっていうと。まず、簡単な重力操作ができる。それから、周囲の風向と風圧を変更できるし、電力操作もできる。空気を集中させて自然発火を起こすことも出来るし、空気の鎌鼬を作ることも出来る。水を操ることもできれば、本当に小さな地震も起こすことが出来る」

「な、なんですかそれ・・・・・・」

それこそ、本当に超能力者じゃないか。俺は未だに理解しきれていないままだが、浦田さんは続ける。

「つまりだね、Fコード、クラージェは地球を支配していただろう？どうやって支配していたかっていうと、さっきも言ったと思うけど、水、大気、重力などの、地球の事象を全て情報に置き換えて、それにリファポットという装置を利用して独自の情報を混ぜ加えていたんだ。そこで僕達研究部は、規模は違うにしても、本質的にはそれと同等のことが出来ないか、と考えた。僕達がこの橙のモールドを摂取した場合、自分の感情から創った情報を、体内のこのモールドを媒介としてリファポットへ発信。そのリファポットの中に自分の情報を追加して、地球に送ることが出来るようになるんだ。だから、例えば『A点で何Gの重力場を発生』という情報を発信することで、地球がリファポットに載せられたその情報を受信。その結果、A点で本当に重力場が発生する」

「な、なるほど」

ここで、昼間のあの不可解な現象を思い出す。ベランダにいた生徒を破片の雨から守り、変わり果てた大杉を地面に押さえつけた、あの謎の圧力。あれは、宮谷が『橙』を摂取して、彼女の周囲の重力を変化させたのか、と俺は一人で理解する。

「でも、それだったら無敵じゃないですか。だって例えば、地球全体の重力を数万倍、とかいったこともできるんですよね？」

いや、と浦田さんは左右に首を振る。

「残念ながら、それは出来ないんだ」

「どうしてですか？」

俺の質問に対し、浦田さんは右の人差し指と中指を上げる。

「理由は二つある。まず一つ目の理由として、この地球へ送られる情報の源は、人間の感情だ。確かに感情の情報量は莫大だけど、安定した自然の情報を強引に書き換える、もしくは一部を改竄するには、それを遥上にいく、途方も無い情報量が必要なんだ。とても人一人が産み出せる情報量では無い」

加えてだ、と浦田さんは挟んで。

「このモールドは、人によってその特性を変える」

「人によって……モールドの効果が変わるんですか？」

俺の問い返しに対して、浦田さんはゆっくりと頷く。

「これは言葉で説明するよりも、実際に能力を使うところを見せた方がいいかもしれないな。少しだけ、実践してみせようか」

そう言った浦田さんは、内ポケットから『橙』色のカプセルをもう一つ取り出し、ソファに座っていた宮谷に目配せした。同じく目配せで返した宮谷はポケットから同じ『橙』のカプセルを取り出すと、カプセル先端の小さな針を自身の腕に刺した。隣では浦田さんも自身の腕に刺している。

「あの、このモールドを使うのにも感情を使うんですよね？こんなことの為に無駄遣いしちゃっていいんですか」

俺の心配を感じ取った浦田さんは少しだけ目を丸くするが、すぐに優しげな笑顔を戻す。

「大丈夫。この際説明しちゃうと、そうだね、大分昔使われていた乾電池で、アルカリ電池とマンガン乾電池があったろう？それを思い出してごらん。
マンガン乾電池は、少しずつ起電力が低下していくけど、アルカリ電池は起電力がずっと一定に保たれていて、末期になると急激に低下しただろう？それと同じさ。別に普段感情を減らしたところで、人格には大した影響は無い。明確な症状が現れるのは相当末期だ。それに、感情に大きな損害を与えるほど、大仰なことはしないからね」
浦田さんは空になったカプセルをポケットにしまうと、給仕用の、お茶の準備をしていたカートからリンゴを2つ取り出した。そして、目の前のテーブルに置く。
「それじゃ、いいかい恭司君。今から僕と志穂君、両方が重力操作の能力を使って、それぞれ別のリンゴを持ち上げるから」
よく見てるんだよ、と浦田さんが言い、両者がそれぞれのリンゴを見つめた次の瞬間。
「おお！」
俺の目の前で物大人しそうにしていた2つのリンゴは、机の上で僅かにその実を振るわせた後、すうー、と実に滑らかな動きで浮かび上がった。そしてそのまま空中で停止しているのだから、マジックショーか何かを見ている気分になる。
「ふぅ」
そう浦田さんがため息をついた後、2つのリンゴは力なく机に落ちる。
「どうだったかな？」
「すごいです！ホントにこんな超能力が使えるんですね。でも、個人によって変わる、というのは？」
それはだね、と浦田さん。代わって宮谷が話し出す。
「なら次は、ソファごとアナタを持ち上げるわ」
そう言うや否や、宮谷は無表情のまま右手を俺に向ける。俺が座っ

たソファが突如震えだしたかと思うと、俺を乗せたまま空中に上昇し始めた。
「うわ、うわわ」
空中に浮かぶソファに座ったことなど無い。いつ落ちるやもしれぬ不安から、俺は背もたれ部にしがみつく。
「じゃ、後は浦田さん、お願いね」
「了解だ」
そう返答した浦田さんは目を閉じて、俺が座る空中ソファ目がけて右腕を伸ばす。そして左腕で二の腕を掴み、力を込める素振りを見せた。
悠々としていた宮谷とは違い、こちらの表情は険しい。目を瞑って精神を統一し、必死に能力を振り絞っているかのような。

そして、浦田さんの全力に応えて。

――――――僅かに、数？ほどソファが再上昇する。

あれ、これだけ？と俺が疑問に感じていると。
「じゃ、私は能力を切るわね」
その宮谷の言葉をきっかけに。
次の瞬間、俺はソファごと落下した。
ソファはカーペットが掛かったフロアに垂直姿勢のまま激突し、綺麗なほど垂直姿勢だった俺は、ソファから伝わった衝撃を全身に受ける。その際、ウギッ、とまるで尻尾を踏まれた猿のような声を出してしまったが、落下からの地響きによって掻き消された。
「何を……するんですか……浦田さん……」
ジーン、と背骨から滲むような痛みが広がり、そのため痛みを堪えた声で、ぷるぷる震えながら俺は聞く。浦田さんは腰を低くして、両手を合わせて謝りのポーズ。
「ごめんね。でもね、これでも僕は一生懸命能力を発動させて、精

一杯ソファを支えていたんだ」
「……え？」
浦田さんは再び壁に背を持たせてから話し始める。
「今ので身を持って分かって貰えたと思うけど、同じ能力が使えるとはいえ、個人によってその能力レベルに、差はある」
「――――！」
その言葉に、俺は痛みも忘れて食いついた。
やはりそうだ。超能力者になれる薬とは言っても、モールドであることに変わりは無いのだ。
個人によって残酷なまでに能力に差が開く、多くの人を不幸にし、それ以上に多くの人を幸せにした薬品。
「ただ、君達一般人は忘れてしまったかもしれないけど、こういった所で個人の特徴、個人の長所というものは活きている」
そう言った浦田さんは、再び宮谷に目配せする。
「じゃ、今度はこの机の上に転がったリンゴを、私の精一杯の力で風力操作をして、風の力だけで机から落としてみせるわ」
そう言った宮谷は、目を閉じる。先ほどのソファを持ち上げた時の悠々とした様子は無く、ムムム、と唸りながら集中している。
宮谷の唸りを聞きながら待つこと数秒。俺の肌を、僅かに冷たい風が撫でたかと思うと、机の上に置いてあったリンゴの一つがゆっくりと転がりだした。微風に押されて転がり転がり、そしてたっぷり数秒かけて、最後には机の下に落ちる。
「これが……私の限界よ……」
そう言う宮谷は、息も絶え絶えの様子だった。それを端から見ていた浦田さんは満足そうな微笑を浮かべると、机に残ったもう一つのリンゴに、自身の右手の掌をかざした。
「それじゃ、僕の番だ」
浦田さんがそう言った、次の瞬間。
「――――――！」
風の槍、とでも表現しようか。

高密度に圧縮された空気の小槍が、机の上で鎮座していたリンゴの胴体を一瞬にして貫いた。
貫通されたリンゴは弾丸の如きスピードで吹き飛ばされ、壁に激突してその身を四散させた。この一瞬の出来事の間、浦田さんは特に苦にする様子も無く、壁に背中を預けたままだった。
「……へ？」
一瞬にして起こった奇怪な現象に、俺が目を丸くし言葉を失っていると、そんな様子を見かねたのか浦田さんが解説を始める。
「つまり、重力操作に関しては志穂君の方が上、風力操作に関しては僕の方が勝っている、ということだ」
浦田さんは続ける。
「君達一般人にとってのモールド『黄』と比べて、新たに誕生した『橙』のモールドが決定的に違う点。それは、クラージェによって流されている情報によって自身を強化するのではなく、僕達自身が自分で感情を削り取り、感情を情報に変換し、情報をリファポットに流し、そして地球に通すことで強化している、ということだ。自身の感情を情報に置換して、地球に流し込む。未解の情報を事象に変える行為がどれだけ危険かは、先ほどの説明で理解してくれているよね？」
その言葉に、俺はその先ほどの説明を思い出す。一度情報に置換された物である不安定情報素にミサイルをぶつけた結果、エリア数個分を一瞬にして消しかねない規模の爆発が起こった。
「もし仮にクラージェをFコードに乗っ取られずに、地球上の事象情報と人間の感情情報の解析を終えて、その結果を持って帰ってくることができていたならば、誰でもどんな能力でも使えるようになる超薬ができあがっただろう。だが残念なことに、クラージェはFコードを読み込ませた段階でアクセス拒否状態に陥っていた。だから僕達研究部は、Fコードの力無しで人間の感情情報、地球の事象情報の解析は不可能と断定して、個人の感情の波長パターンに注目した薬品として、『橙』のモールドを生み出した」

「個人の感情……その波長パターン？」
俺が繰り返すと、浦田さんは頷く。
「そう。人は誰でも、生まれてからの時間の大部分を、地球という環境の中で生活しているよね？そして、成長していく過程で培われていく感情も、その周りの環境によって大きく姿を変える。つまり、育つ環境は人それぞれだから、一人一人違う波長パターンを持った感情が出来上がるワケだ。そして、人それぞれの感情の波長パターンは、周囲の環境の影響を多分に受けているから、その周囲の環境情報と似通った物になってくる。
逆を言うと、僕達が育ってきた地球上には、必ず個人の波長パターンと似通った情報を持つ事象が存在することになる」
「――――――！」
浦田さんの言葉の意味する所をようやく理解した俺は、必死に頭を回転させる。
「つまり、こういうことですか。人の持つ感情の形は全員がそれぞれ違っていて、その感情の形を『橙』のモールドで変換した情報が、地球での何らかの事象情報に似ている。だから、その自分だけの感情の形から生み出された情報を、リファポットを通じて地球に流せば、その情報に似通った情報を持つ事象が現実として現れる。それがさっき見せて貰った、宮谷で言えば『重力』であり、浦田さんで言えば『風力』だった」
俺の言葉に、宮谷と浦田さんの両方が頷く。
「感情パターンの形成は、完全に人それぞれ。生まれてから触れたことのある全ての事象が、具現化する可能性がある。私の感情の形は、風には似ていない。だから、まともにリンゴを飛ばすこともできない。浦田さんの感情の形は、重力には似ていない。だから、まともにソファを持ち上げられない。分かった？」
「分かりました」
ならよし、と宮谷は続ける。
「そして、この感情の形と似通った地球上の事象は大抵一つ。だか

ら、『橙』のモールドを使用した際、大抵の人がまともに発動出来る能力は一つだけ。私は重力操作で、浦田さんは風力操作。どっちもＩＣＤＡの中じゃトップクラスに優れた能力よ。酷い人だと、現れた事象がムズかゆくなる効果だった、なんてこともあるから。まあそれも神経操作の一種でレアだけどね」

確かにそれは笑えない、と俺は心の内で頷く。せっかく手に入れた超能力がそんな酷い物だったら、神様に見捨てられているとしか思えない。適合率が０％の俺は、人のことは言えないが。

「もちろん、似たような境遇で育ってきた人には似たような能力が現れる場合もある。そういった時は両者とも同じ能力が具現化するけど、当然差は出てくるわ。そこで、アナタ達一般人が親しみのある『黄』のモールドのように、『橙』のモールドの超能力も、その強さや利便性に応じてランク付けされている」

ふうっ、と一息で話し終えた宮谷に変わって、浦田さんが解説を続ける。

「『黄』のモールドはパーセンテージによって評価されてるけど、この『橙』のモールドによる超能力はそこまで厳密に評価する必要が無いから、Ｅ、Ｄ、Ｃ、Ｂ、Ａ、ＡＡ、ＡＡＡ、Ｓ、ＳＳ、そしてＳＳＳまでの１０段階に分けられている」

例えば、と浦田さんは言葉を繋ぐ。

「僕の風力操作の能力は、ＩＣＤＡ内部ではＡＡＡ、志穂君の重力操作はＳＳとされている。因みにオーバーＳランクは、一人の例外を除いて全員がナンバー１０以内の高ポストの者だ。ＳＳＳランクまで到達した者は、現在２人しかいない」

全員が高適合者であるはずのＩＣＤＡでも、こういった格差は存在するのか、とまるで他人事のように俺は思う。非現実的な話の中でも、きちんと上下社会の構造が読み取れるのは、俺としてはあまり楽しいものではない。当然、諦めが身に染みた状態では大してショックは受けていないが、この社会の構図が否定されることを期待していなかったと言えば、それは嘘になる。

そして、そんな俺の考えを読んだかのように、浦田さんが言う。
「君達一般人の世界では、適合率一つで価値が決まる。ＩＣＤＡでも、基本は変わらない。『橙』モールドのランクと、『黄』モールドの適合率。つまり、『橙』による超能力と、『黄』による基礎能力だね。この二つの総合評価によって、ＩＣＤＡ内部での序列が決まる。もちろん、両ステータスが均衡している者同士でならば、多少の融通は利くかも知れないが、基本的に上下の例外は無い。そしてこの世界で唯一個性を示す超能力によって、どの部に所属するか決まる場合が多い。重力操作のような、戦闘に特化した能力を得た者が実行部に収まるのは、理解できるだろう？」
「え、ええまあ……」
一般人レベルでの高適合者すら、俺には霞んで見えるのだ。ましてや、その高適合者を遙かに超越する力を持ったＩＣＤＡの人達の話題など、正直おとぎ話程度にしか聞こえない。
俺のいい加減な返答を受けた浦田さんは、ゆっくりと頷く。
そして、ポケットから新たな物体を取り出した。一見どこにでも売っていそうな、普通のボールペンだが。
「！」
イレイサーだ。宮谷が使った、あのボールペン型の謎の装置。
「この際説明しちゃうと、イレイサーは他者の記憶への干渉をする装置なんだ。場所、時、対象の情報をイレイサーに音声入力することで、それに沿った記憶の改竄ができる。原理は簡単で、モールドに干渉して偽造の記憶情報を送るだけだ。人間の言語情報や意識は共通する部分が多いから、情報を流し込んでも危険は無い。君も、志穂君がこれを使うのは見ただろう？」
「はい。見ました」
宮谷がイレイサーを使用した直後に、ベランダ中の生徒が倒れた。
あれは、記憶に干渉された際のショックからだろうか。
「あの、仕組みとか良く理解したんですけど、どうして『橙』のような、新たなモールドが必要なんですか？だって宮谷にしたって、

適合率８７％の超人ですよね」
俺の質問に、正面で座っている宮谷が否定の表情を見せる。
「確かにＩＣＤＡには、私ほどでは無いけど、適合率が７０％を超えるような人が溢れる程いるわ。けど、力だけじゃ解決出来ない問題もあるのよ。それに何より、今回のような事件もね」
そう言った宮谷は、微笑を浮かべながら浦田さんに視線を送る。その視線を感じた浦田さんは、再びスーツから一つのカプセルを取り出した。中の純青色の液体が不規則に揺れる。

「志穂君の話からすると、そうだね。これが、君が知りたかった『青』だ」

モールド（3）（後書き）

お疲れ様でした！そして、ここまで読んで頂いてありがとうございました！第２章、Ｆの軌跡編、次回の更新を持って終了となります！そして、いよいよ物語は第３章、Ｆの覚醒編へ突入します。こうご期待！

ランキングの方←、よろしければお願いします。

決意、そして疑念（前書き）

はい、どうも作者です。現在数学の過去問解きながら奇声を上げております。数日後に人生が決まっちゃったりします。
皆さん、たくさんの感想ありがとうございます！休憩でふと感想欄を見てみて、とある方のコメントで舞い上がったり、とある方のコメントで冷や汗掻いたり、とある方のコメントでまた奇声をあげたりしております。
恐らく今後の私の人生を通しても、ほぼ間違いなく最長であろう学習時間によって、頭のネジが数本外れております。
と言うわけで、現在私がいかにパニック状態であるかは、読者の皆様にもご理解頂けたかと思います。返信が溜まっているのも、きっと許してくれるはずです。

……え？じゃあ何でこんな忙しい時期に連載を始めたかって？

そりゃあ、奥さん。決まってるじゃないですか。息抜きですよ。
膨大な学習量から来るストレスを少しでも解放しようと、『まあ、ネットにでも出してみようかな』『２桁くらいの読者ができれば大満足』といった具合が。
あれ、どういうことでしょう。
なんか、お気に入り登録数がもうすぐ４桁行くような……。
恐らく私の目の錯覚ですね。きっとネジが数本外れたからだと思います。

とうわけで、結局この作者は何が言いたいかと言うと。

すいません！感想への返信の方、１／１６までできません！
ですが、頂いたコメントには必ず返信を致しますので、許してくだ

さい。

そして感想ください。↑懲りない作者。

みたいな感じです。では、本編どうぞ。

決意、そして疑念

「志穂君の話からすると、そうだね。これが、君が知りたかった『青』だ」

「！」

青。今回の事件の鍵。先ほどからこの存在を気に掛けていた俺は、思わず生唾を飲込む。

「その『青』って、何なんですか？」

「これもね、モールドの一種なんだ。けど、その効果は僕達が使用している物とは次元が違う」

浦田さんは少しだけ考える素振りを見せたが、いい言葉が見つかったのか顔を明るくする。

「そうだね、分かりやすく説明すると、これはクラージェからの情報を吸収するんじゃない。回収するんだ」

「回収？」

一体どういうことだろうか。吸収と回収の違い。

「本来、君達が知っているモールド『黄』は、地面、大気、光、これらの地球の事象に含まれるクラージェが発信した『潜在能力を引き出せ』という情報に体が触れた際に、この情報を吸収していた。つまり、体に触れていないクラージェの情報は吸収できないよね」

だけど、と浦田さんは短く区切る。

「この『青』は違う。触れた情報だけでなく、使用者の半径3？のクラージェの情報を、可能な限り掻き集めるんだ。しかもそれは、半永久的に続けられる。まさに回収だろう？」

「え、ちょっ、ちょっと待ってください！」

気になったところがあったので、浦田さんの言葉に割り込む。

「あの、それはいいんですけど、でも回収したところでどうせ無意識の内にその情報は削られるんじゃ……？確か人間には、無意識の内に余分な情報を掃き出すフィルターのような物が存在しているんですよね？だから、半睡眠状態のFコードから流される2つの情報の内の『原子構造の組み替え』を完全に排除して、もう一つの『潜在能力を引き出す』を、モールドを使って少しずつ溜め込んでいると。それでも大部分は削られてしまう、って言ってたじゃないですか」

俺の意見に、浦田さんは首を横に振る。

「違うんだ。この『青』にはもう一つ効果があってね、その効果とは、使用者に存在する無意識の情報処理能力、つまりフィルターの効果を、極限まで低下させること」

「……！」

今までは、クラージェからの情報は体内で削られるから、モールドという受信機を使用して体内に蓄積させていた。けど、それでも少しずつ。何故なら、無意識の情報処理で大部分が消されていたから。

だがしかし、仮にそのリミットが無くなったら。

「そう、分かったみたいだね」

俺の思考を読んだかの如く、浦田さんは頷く。

「無意識下でフィルターが作動せず、当然意識下での情報処理などできやしない。そんな状態で、クラージェの莫大な情報が『回収』されて、一気に体内に入ってきたらどうなるかな。志穂君ら高適合者を遥に超える力を手に入れる代わりに、感情を一気に浪費し、そして……」

「Fコードの命令に抗う全ての手段を失って、４７年後の人類の姿になる……」

俺の言葉に、浦田さんと宮谷が同時に頷く。
「分かったかしら、支倉恭司。今日アナタが見たあの大杉が、人類の最終的な姿形よ」
大杉。全身の皮膚が真っ黒に硬質化し、髪が一気に伸びて赤色へと変化。高適合者の宮谷の力を圧倒し、野獣の如く破壊行動を繰り返す。
「そう、最早人間ではない。フィルターが消え去るから、『原子構造の組み替え』によって肉体のほとんどが再構築され、感情も無く、ただクラージェの発信する情報のみに従う操り人形」
俺はゴクリッ、と唾を飲込む。背中に嫌な汗が伝った。
「『青』には三段階あってね。まず第一段階として、摂取直後から体に力がみなぎる。これは能力のリミットを外した際の反動だと思って貰っていい。そして摂取してから１０分後、第二段階へと突入」
宮谷が説明を代わる。
「第二段階は、恐らく3段階の中で一番力が発揮できる段階よ。信じられない程の速度で感情を失う代わりに、そうね、私の数倍の力は発揮できるわ」
適合率８７％の宮谷の数倍の力。ただの蹴りで人を数十Ｍ吹き飛ばしたあの力の上をいく。とても想像出来ない。
「そして、第二段階に突入してから5分後には、最終段階へと移行する。感情を完全に失い、Ｆコード、クラージェの忠実な操り人形になるわ。この最終段階は最早恐ろしいの段階を超えている」
宮谷は指を立てる。
「さて、ここで問題。最終段階になると感情を全て失っているから、感情から能力への加算が無くなる。では、大杉はどうしてあんな化物じみた力を発揮できた？」
「それは……」
確かに大杉は化物に姿を変えてからも、尋常でない力を発揮していた。しかし、感情を失っている状態で一体どうやって？迷った様子の俺に満足したようで、宮谷は口元を少しだけ緩める。

「簡単よ。感情の代わりに、もっと具体的な物を情報に変換して、能力に加算すればいいのよ」
「……何を？」
宮谷が指を数える。
「骨とか、血とか、肉とか、内臓とか、脳とか。つまり、感情の次は、人間の肉体」
「……おいおい」
宮谷の言いたいことは、世界一知能が低い俺にも良く分かる。
「別にあのままほっといても、大杉は自身の肉体すら失って消えて無くなっていたわ。最終段階、４７年後の人類は、感情を失うと同時に無意識下でのフィルターを失う。そして『原子構造の組み替え』指令を受信するようになり、改造生物のように己の体を変えてしまう。他者を殺戮し尽くすまで互いに殺し合い、最終的には自身の身を滅ぼす。この地球に沸いた人類を一掃するには的確な命令よね」
鳥肌と共に、俺に一つの疑問が浮かんだ。
「なぁ、大杉のヤツ、右腕を剣みたいに変形させてたんだけど、あれはどうやって？」
さっきも言ったでしょ、と宮谷は言葉を繋ぐ。
「『青』を使用すると、無意識下で作動しているフィルターが消えるから、クラージェからの情報を鵜呑みに出来る。大杉は自身の腕を剣に変化させて、荒瀬の右腕を切断した。私に対抗する武器とした。改造生物と一緒よ。クラージェからの『原子構造の組み替え』という情報の元、肉体を変化させたの」
なるほど、と俺は納得すると同時に、怪訝な視線を宮谷に送る。
「待てよ、そんなに青について詳しく知っているってことは、ＩＣＤＡが『青』を開発して……？」
まさか、と浦田さんが肩をすくめる。
「恭司君。僕達が『青』を開発した所で、一体何のメリットがあると言うんだい？ＩＣＤＡの存在目的を否定するような物じゃないか」
「それじゃ、一体誰が？」

俺の言葉に、浦田さんと宮谷は視線を合わせる。
「さぁ、今の所は分からないわ。本当に分からないの」
「ここ最近、そうだね。2週間くらい前かな。その頃突然、裏社会に『青』が出現したんだ。それは瞬く間に広がっていき、今では志穂君の学校の生徒のような、関係無い一般人までもが入手している。そして志穂君ら実行部は、その『青』服用者の処理に追われている」
宮谷が代わりに続ける。
「これだけは分かるわ。『青』の配布者は、Fコード、クラージェを把握している。そして、私を遥に超えるであろう、信じられない程の高適合者の持ち主」
なんで?と俺の質問に対して、宮谷は続ける。
「だってそうでしょ?適合率75%越えの天才集団である研究部のトップ層が、何年掛かっても解明できなかったシステムを、容易く創り上げたのよ。人間の無意識下のフィルターを取り除くということを。本当にただ者じゃないわ」
宮谷の言葉に、俺は少し唸る。
「じゃあさ、その『青』を開発した人は、元ICDAの一員なんじゃないの?だって、Fコードについて知っているんだろ?」
俺の言葉に、浦田さんがため息を漏らす。
「いや、僕達も最初はそう思って、ここ2週間は内部捜査もしていたんだ。でも、特に裏切り者のような人物は見あたらないんだよ、残念ながら」
浦田さんの情報をきっかけに、しばしの沈黙が流れる。耐えかねた俺は、未だ壁に持たれている浦田さんに質問を投げかける。
「あの、その『青』にも、解除薬があるんですよね?確か、宮谷が『緑』とかって言っていたような」
うん、と浦田さんが小さく頷く。
「『緑』は僕達研究部が、実行部が入手した『青』の解析の元、一週間前に開発した新薬。その仕組みは、体内の『青』の検索と消去」
浦田さんは続ける。

「でも、実際はあんまり役立ってないんだよね」
「え？どうしてですか？」
苦笑する浦田さんに、宮谷も苦笑いを浮かべる。そして、浦田さんに代わり解説を始めた。
「この『緑』はね、第二段階までの人しか救えないの。最終段階に突入した人に摂取させても、既に感情を失っているから意味無いのよね。それと、いい？支倉恭司。この『青』を服用する人間の大半が、人生に絶望している低適合者なのよ。そんな彼らが、やっと手に入れた力を簡単に捨てると思う？」
「それは……」
絶対無いな、と心の中で俺。麻薬みたいな物だろうか。恐らく現実主義者の俺でも、一度服用してしまえば止められなくなるだろう。今日の大杉がいい例だ。
「『青』使用者の取り締まりで追われてる中、気分転換兼ねて学校に来たら、大杉ってヤツが『青』を使用しているのを発見。そして本部に始末の許可を取ってから……。今日の一連の出来事については分かってくれたわね」

一通り話し終えた宮谷は、フゥ、と小さなため息を漏らしつつ、俺に聞いた。
「長かったわね。これで、私達からの大体の話は終わりよ。次はアナタについて」
俺は思わず背筋を伸ばす。宮谷は再び身を乗り出し、テーブルのパネルを弄りながら聞いてくる。
「今までの話を聞いて、アナタが記憶を書き換えられなかった原因に心当たりは？」
思わず口籠もる。何か考えは無いかと、浦田さんの方を向くが、当人は無表情のままだ。
助け船は無いと悟った俺は、暫く考えた後に、一つの原因らしき物に思い当たった。

「あ、そうだ。イレイサーって、つまり結果的にはモールドに働きかけて『〇〇の記憶を忘れろ』っていう情報を送ってるんだよな」
「そうね」
宮谷はパネルを操作しながら頷く。
「じゃあ、モールドが無いに等しければ、イレイサーでは記憶を改竄出来ないわけだ」
「だから、それがどうしたの？」
「あのさ、俺、モールドの適合率０％なんだけど」
「きゃっ！」
俺の言葉を聞いたと同時に、宮谷は足を滑らせテーブルに激突した。ゴンッ、という鈍い音が発せられる。
「はっ！？」
俺は驚きから声を上げる。イタタ、と頭をさする宮谷が、ゆっくりと視線を俺に向けた。
「あ、アナタが、世界でたった一人の、適合率０％の人！？」
「い、いや、そうだけど……」
それがどうしたんだ？と俺は心の中で呟く。
そんな俺達二人のやりとりを端から見ていた浦田さんは、短いため息をつく。
「なるほどね。イレイサーはモールドに干渉する。そのモールドが無いも同然の恭司君に、イレイサーが効くはずも無いか。道理で記憶がそのままのワケだ」
そして頭を押さえた浦田さんは、納得したように呟く。
「どっかで見た顔だとは思ってたんだが、まさか彼が世界で一人の『例外』だったとはね。あれだけ入学先のことは調べておけって上層部に言われていたのに。僕は知らないよ～」
「す、すいません……。まさかその当人があの学校にいるとは思えなくて」
「どうするんだい、これから。この事は上層部に報告を？」
「い、いえ。とりあえず雅美に相談してから……」

俺を除け者にして、二人の間で何かやりとりがされている。
「あ、あの～」
俺の存在を忘れていたのか、突然の声に反応した二人が一斉に俺の方に振り向く。
「あ、あの。何か問題が……？」
恐る恐る聞く俺に対し、宮谷の首が全力で横に振られる。
「大丈夫大丈夫！全然問題ないないない」
「とてもそのようには見えないんですけど」
俺の返答に、誤魔化すためか、何かを思い出したのか、宮谷が大きな声を上げる。
「そうそう！聞くの忘れてた！な、何か、ＩＣＤＡのことで質問は？」
「いや、いきなり振られても」
少々不安は残るが、どうやらこの二人は現状について教えてくれそうも無かったので、俺はすぐに諦める。
少しだけ唸って、脳内から疑問を振り絞る。最初に出てきた疑問を口にした。
「そういえばさ、ＩＣＤＡの人員は、みんな何処から来てるの？雇われたりしてるの？」
俺の質問に、目を丸くする宮谷。浦田さんが説明を入れる。
「モールドを摂取した時点で適合率が６５％を越えた者全員が、ＩＣＤＡに強制連行されるんだ。例え、摂取したばかりの新生児でもね。と言っても、６５％を越える人なんて、全人口の０．００１％だから、本当に少数の人間だ。僕も最初にモールドを摂取した時は驚いたよ。測定結果が出るのを待ってたら、いきなり黒尽くめの人達に連行されるんだから」
ソファに座り直した宮谷が口を開く。
「私の場合は、組織が設立された直後からＩＣＤＡに入っていたわ。父親がＩＣＤＡのトップだし」
父親、の部分で宮谷の表情が少し曇った。

宮谷は続ける。
「大抵の人は、ＩＣＤＡが設立された時に政府によって掻き集められたの。その平均適合率は７１％。そして、参加の意思がある者は組織に入り、無い者はこの世から消された」
今度は俺がテーブルに顔をぶつける番だった。
「け、けけけけ消された！？」
そう、と曇ったままの宮谷が頷く。
「この世界の秘密を知ってしまったから。記憶を消したとしても、能力が高いまま外の世界に放ってしまったら騒ぎになるから、確実に世間に知られないようにするにはそれしか無かったの」
宮谷は一拍置く。そして、隣りの浦田さんと視線を合わせた。
「じゃあ、もう質問は無い？私達の話、世界の真実は理解してくれたかしら？」
「まあ、大体はな。理解はしたけど、納得はしていない」
「それで十分」
俺の言葉に、宮谷の表情の真剣味が増す。そして、息を大きく吸ってから俺に聞いた。
「支倉恭司。アナタは、私達ＩＣＤＡに参加する意志がある？」
今後聞かれるとは分かってはいたものの、それでも俺は心臓を鷲掴みにされた気分だった。落ち着いて深呼吸を行ってから、声を潜めて宮谷に聞く。
「無い、と答えたら？どうなるんだ？」
「死んで貰うわ」
そうなるわな、と心の中で俺。イレイサーが通用しなかった今、世界の真実を隠すには、俺という存在を抹消するしかない。
「もしアナタがＩＣＤＡに入る意志が無いのなら、今すぐにでも監禁所に行って貰うわ。そして、上層部とコード査問会の判断から制裁を決める。普通なら記憶を消すだけで済むんだけど、アナタの場合はまず間違いなく処刑されるわね」
記憶を消せないから、と付け足した宮谷の言葉に、俺は生唾を飲込

む。嫌な汗が背中を伝わり、傷口にしみこんだ。
これまで散々色んな話を聞かされたが、結局総括すればこういう事だ。

質素ながらも平穏な日常を捨てられずに、死ぬか。
恐ろしい非日常に身を投じて、生き長らえるか。

正直、ずるいと思った。
宮谷が、あの場で俺を殺さなかったこと。ここまで俺を導き、世界の真実を晒したこと。
あの拳銃を下げた瞬間から彼女の脳裏には、俺が断るなんていう考えが掠ることは、一度たりとも無かったのだろう。その上で、一見信頼とも言えなく無い態度を示され、退路を『死』によって断たれたのだから。
十中八九、全ての人間が受け入れるに決まってる。当然ながら、諦めが身に染みた俺も例外ではない。
つまり、俺の答えは、決まっている。
俺は既に、心身共に非日常に染まっている気がしたから。

「……分かったよ。ＩＣＤＡに、参加する。……いや、参加させてくれ」

「そう」
俺の言葉に、宮谷が表情を和らげる。
さて、と宮谷が正面に向き直ると、真面目な表情で俺に話しかけてきた。
「支倉恭司は、Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ｃｏｄｅ　Ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ&Ｄｅｌｅｔｅ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ、通称ＩＣＤＡに参加する意志がある。それでいいわね？」
「ああ。それでいい。世界一の落ちこぼれなんかで良かったらな」

俺の返答に満足したのか、宮谷はその場を立った。壁に持たれていた浦田さんも、近くのカートに寄って片付けを再開する。
「私達は今から、今日のことを上層部に報告しに行くから。正式な手続きが済んだ後、能力測定とか色々あるけど、それはまだ先の話。アナタは適当にぶらついて、施設見学でもしていて」
そう言った宮谷が、俺に何やらカードらしき物を差し出す。俺はそれを受け取って、まじまじと眺める。両面共に真っ白の、一見何の変哲も無い普通のカード。
不思議そうにそのカードを眺める俺に対して、立った状態の宮谷は解説をする。
「そのカードをエレベータ内のパネルに読み込ませれば、２４３フロア、つまりＩＣＤＡの出入り口と、上層部のフロア以外には行けるわ。アナタが組織の準一員である証明にもなる。私の口座情報も入っているから、施設内でなら好きな物を買えるわよ」
「え、使っちゃっていいのか？」
俺の聞き返しに、笑顔の宮谷が頷く。
「普通に使って。あ、レストランとかは至る所にあるから、お腹が空いたら利用してね」
そうだね、と隣の浦田さんが腕時計を確認する。
「僕達の報告と、今度の任務の打ち合わせが終わるのが大体夜の８時頃だから、それまでは志穂君の言う通り施設見学をしていなよ。自分の目で確かめた方が、現実を実感しやすいだろうしね」
ただ他の人員の邪魔はしちゃだめだよ、と浦田さんは笑顔で付け足す。
二人はその場を離れると、巨大な扉の方へと向かう。俺は慌てて呼び止めた。
「ちょっ、ちょっと待って！」
二人は同時に振り返る。俺は一瞬躊躇ったが、言葉を続けた。
「その……８時が過ぎたら、俺はどうすればいいんだ？帰っていいのか？」

俺の言葉に、二人は目を丸くする。そして、カートを止めた浦田さんが少々唸る。
「そうだね、上層部の判断にもよるけど、数日間はこのＩＣＤＡ内部で暮らすことになると思うよ」
「はい……？」
数日間、ここで暮らす？浦田さんの言葉を消化しようと努めながら、再び発せられる浦田さんの声に耳を傾ける。
「じゃあ、８時頃になったら、またこの志穂君の部屋に戻ってきて」
「あー！ちょっと待って待って」
何？と今度は宮谷が聞き返してくる。
「俺、今日7時からバイトなんだけど……」
えっ？と宮谷は、さも信じられないと言いたげに目を丸くする。
「これだけ飛んだ話を聞いて、バイトの話……？い、いや別に今更だし……休めばいいじゃない？」
「いやいや良くない！死活問題なんだよ！」
短く息をついた宮谷は、呆れ顔で分かったわ、と俺に言う。
「取り敢えず、すぐにこの本部から出るのは無理よ。悪いけど諦めて。後で私が連絡しといてあげるから、ほら、バイト先教えて」
宮谷がケータイを取り出す。俺は渋々ケータイを取り出し、画面を開いた。
「あれ……？」
思わず疑問の音を漏らす。
電波状況が圏外になっていたのだ。このご時世、太平洋のど真ん中でも電波柱は３本立つというのに。
俺の思考を察したのか、宮谷が微笑を浮かべる。
「言ったでしょ？ＩＣＤＡ本部には、外からの電波を遮断する特殊なコーティングがしてあるって。後で私が特殊な回線を使って連絡しておいてあげるから」
宮谷が俺の傍によると、ケータイを奪い取る。そしてそのバイト先の情報を本人のケータイに移し終えると、俺に軽く投げ返す。

「じゃ、悪いけど失礼するわ。羽目外さない程度によろしくね」
そう言い残した宮谷と浦田さんは、部屋を出て行った。重々しい音と共に、再び扉が閉じられる。
そして、広々とした部屋に俺一人。
周りは完全に静寂に包まれており、それが妙に緊張感を高める。
「えーと……」
俺はとりあえず、ソファに座り直した。そしてケータイをテーブルに置き、深いため息をつきながら、ソファに横になる。
「まさか、現実がこんなことになっていたなんてな……」
そう小さく呟きながら、頭上のシャンデリアを眺める俺は考え事に浸る。
しかし、自分のこの頭が不思議でならない。
少年F、Fコード、クラージェ、モールド。
常人ならばまず信じられないような数々の真実が脳内に一斉にたたき込まれたのに。
――――――俺は何故だかそれらを、心の何処かで理解していた。
――――――まるで、元々知っていたかのように。

この世界は、俺のような一般人が想像しているよりも遥に深い闇に閉ざされていた。
その闇に隠れた真実を、俺は知ってしまった。そして、これからもその真実と関わり続けるのだろう。
俺は一瞬鳥肌が総立ちするのを感じた。そして同時に、俺自身について再認識を始める。
俺の適合率が０％。これは、強ちデメリットでもないのかもしれない。
「強大な力にはそれ相応のリスクがある……ってことか」
これまでの不公平極まりない世界は真実では無かった。モールドの

適合率が高いということは、その分感情の消費が早いということ。
より早くＦコードという玩具の操り人形になるということ。
つまり適合率が０％の俺は、感情が浸食されることは、無い。
４７年後例え人類が滅びようとも、俺だけが生き残っている。
俺はすぐに思考を止めた。そんな未来を想像したくも無かった。
俺が横になっているソファは、流石高級ブランドだからだろうか、
俺の体を包み込むように受け持つ。そして、そのソファに受け入れ
られた俺は、ふと眠気を感じ、そのまま静かに目を閉じた。

決意、そして疑念（後書き）

お疲れ様でした。Ｆの軌跡編、完結です。Ｆの覚醒編の冒頭も触り程度で更新しましたので、お時間宜しい方はこのまま次のエピソードへＧＯ！

＊次回更新は１／１６です。どうしてこんなに遅いか、どうしてこの日付かは、どうか察してください……。
投票の方、宜しければお願いします←

描かれた夢

視界の先に浮かぶ、白衣を身に纏った人だかり。

そしてそれに向かい合うようにして、金属質なイスに縛り付けられた、一人の少年。

その少年の痣だらけの体には、幾つもの導線が刺さっている。

その導線を伝わり、何かの薬品が注ぎ込まれる度、少年は苦痛に表情を歪める。

白衣を身に纏った大人達は、残虐な笑みを浮かべて少年をあざ笑う。

まるで、自分達の優位を唄うかのように。

少年を、恐れるかのように。

それに応えるように、苦痛に悶えた少年は、その澄んだ目を見開いた。

――――――僕が一体、何をした。

少年の澄んでいた瞳が、憎悪に濁った。

――――――いつの日か、お前ら全員、喰ってやる。

そして、少年の塞がれた口から、僅かに言葉が漏れる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5586z/

Fの軌跡

2012年1月9日04時16分発行